JAPRS

JAN.2015 No.1

新春号

一般社団法人　日本音楽スタジオ協会

目　次

会長年頭挨拶 1

2014年JAPRS企業説明会レポート 2

スタジオ見学会レポート 4

4.音響ハウス 4

5.ビクタースタジオ 10

6.サウンド・シティ 12

7.ソニー・ミュージックスタジオ 15

音声伝送システム勉強会レポート 18

平成26年度通常総会&懇親会レポート 25

第15回JAPRS新プロ・エンジニア養成セミナーレポート 26

第13回JAPRS認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告 27

ハイレゾ音源制作技術セミナーレポート 28

第11回JAPRS認定「Pro Tools技術認定試験」実施報告 36

第5回Pro Toolsセミナーレポート 37

第25回NHK技術交流会レポート 39

第26回JAPRSゴルフコンペレポート 41

JAPRS Dolby Atmos関連セミナーレポート 42

Inter BEE 2014賛助会員社ブースツアーレポート 56

第21回日本プロ音楽録音賞授賞式レポート 58

第21回日本プロ音楽録音賞審査委員講評 70

「音の日のつどいパーティー」レポート 79

会員動向 81

会長年頭挨拶

（一社）日本音楽スタジオ協会
会長　内 沼　映 二

明けましておめでとうございます。
日本音楽スタジオ協会を代表し、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

当協会は平成２年に社団法人化して以来、本年で設立26年目を迎えることとなりました。
これも偏に皆様のご支援、ご鞭撻の賜と厚く御礼申し上げます。

さて、この数年における音楽ソフトの変化は、パッケージ全盛時代から配信との共存時代へと移行してきました。
更にハイレゾリューション音源の台頭により、音楽制作の現場としては、このような変化に対応するために、新たな機器の選択、対応力、そしてエンジニア個々の音源制作に関する感性がより重要な時代となりつつあります。
当協会と致しましては、ハイレゾ化が進む音源制作に対する対応／次世代を意識したレコーディング・エンジニアの人材育成／音楽制作の現場を支えるレコーディング三者協議会（ref）に於ける機能の活性化／新規会員の入会促進活動 を昨年に続き主要な目標とし、各委員会を通じて、協会活動の活性化に努める所存です。

本年も、皆様からのご支援、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

2014年 JAPRS 企業説明会レポート

平成 26 年 5 月 17 日（土）、レコーディングスタジオへの就職を目指して専門学校に在籍する学生を対象とした合同企業説明会が専門学校東京ビジュアルアーツで開催されました。この催しも今回で 14 回目となり、JAPRS の公式行事として定着している。

受付

参加学生は、仙台、名古屋、大阪からの学生を含めて 100 名が参加。また、出展側からは、正会員スタジオ 6 社と準会員スタジオ 1 社および賛助会員 2 社から 16 名の参加により実施された。

定刻 13 時より同校の 2 号館地下・メディアホールにて参加者全員が集い、吉田保専門学校委員会委員長より挨拶の後、引き続いて、参加企業各社が自社の概要を紹介。

専門学校委員会
吉田委員長

その後、説明会会場を学生ホールに移し、二部がスタート。今回は一回あたりの説明時間を 30 分とし、前半の 3 回は協会で指定した出展ブースの説明を受け、15 分の休憩後、後半の 2 回は各自が希望するブースでの説明を受ける方法で実施した。

リクルートスーツに身を固めた熱心な学生たちが説明に耳を傾け、メモを取り、質問をする光景が見られました。

予定時刻の 17 時に 5 回目の説明が無事に終わり、企業説明会が終了。

報告の最後に、ご出展いただいた企業の皆様に心より感謝申し上げます。

（株）エムアイティギャザリング

（株）音響ハウス

（株）サウンドインスタジオ

（株）丸二商会

（株）メディア・インテグレーション

（株）サウンド・シティ

（株）バーディハウス

（株）ミキサーズラボ

（株）サンフォニックス

出展企業は以下のとおり・・・

（株）エムアイティギャザリング	代表取締役	横山　　武
	エンジニア	加藤　智明
（株）音響ハウス	経理総務部　副部長	豊田　重成
	スタジオ事業部門執行役員技術統括部長	織田　泰光
（株）サウンドインスタジオ	副参事	河野　洋一
（株）サウンド・シティ	営業部部長	明地　　権
	オーディオ技術部 副部長	中澤　　智
（株）バーディハウス	取締役	横井　俊一
	ブッキング	伊藤　　敦
	ブッキング	田中由美子
（株）ミキサーズラボ	統括次長	中村　隆一
	営業部	石川　まなみ
（株）丸二商会	スタジオマネージャー	内藤　重利
（株）メディア・インテグレーション	取締役	岡田　詞朗
（株）サンフォニックス	管理部総務課課長	西尾　靖彦
	管理部総務課主任	柳下　朋子

スタジオ見学会レポート
４．音響ハウス part.1

日東紡音響エンジニアリング株式会社
音空間事業本部 企画営業部
音響設計グループ　崎山 安洋

平成 26 年 5 月 19 日（月）、賛助会員を対象としたスタジオ見学会の第 4 回目として、東京都中央区銀座にある“音響ハウス”の見学会が実施されました。参加者は、19 人。
音響ハウスは、音楽録音スタジオ業務とポストプロダクション業務とを兼ね備えた老舗のスタジオ。今回は、音楽スタジオの中から、ストリングスからバンドもの収録が行われる Studio NO.１、バンドものが中心の Studio NO.２、サラウンド対応の Studio NO.３のスタジオ見学が実施されました。

音響ハウスは、1974 年（昭和 49 年）平凡商事音響ビル新設に伴い、音楽スタジオ業務を開始され、1979 年（昭和 54 年）隣接した映像ビルの竣工とともに、本格的なポストプロダクション業務を開始されています。その後、時代の要望に合わせて、幾度かのリニューアルを重ねながら、マスタリング、オーサリングまで、広い範囲のスタジオ業務を展開されているスタジオです。

弊社は、40 年前の音響ビル新築時よりスタジオ建設に参加させていただき、その後もスタジオリニューアルの建築工事を通して、これまで音響ハウス変遷の歴史を垣間見てまいりました。今回、Studio NO.１の案内役として、現在の１スタについて、リニューアル時の様子を説明させていただきました。

日東紡音響エンジニアリング（株）
崎山 安洋 氏

見学会は、まず１スタに集合、音響ハウス 営業部長の吉川様より、スタジオ概要の説明から始まり、参加されたバーディハウスの伊藤様より、かつてのスタジオから使用されていた立場からのレコーディング話もお聞きすることができました。常務の高根様よりは､スタジオは｢楽器のようなもの｣とのお話もありました。その後、見学者を２グループに分け、３つのスタジオ見学に進みました。

１スタについて、説明させていただいた内容を簡単に報告させていただきます。

１スタも、創設から、２回のリニューアル工事が行われております。創設時の１回目のリニューアルは、確か 30 年前くらいでした、１スタのメインフロアから階段を上がると上部にヴォーカルブースがあり、“ユーミンブース”と呼ばれていました。そうです、今や巨匠の“ユーミン”です。当時、音響ハウスの Lobby に行くと、現在はベテランとなっている“ニューミュージック”と呼ばれたジャンルの若かりし日のミュージシャンが数多く見られました。もちろん、レコード会社には専用スタジオもありましたが、レンタルスタジオも盛況の感がありました。その点から、音響ハウスのレコーディングから数多くの音楽作品が生まれていきました。

１スタの２回目のリニューアルが終了し、オープンを迎えたのが、1995 年（平成７年）となります。このプロジェクトには、計画から参加し、現場管理として常駐することになり、今でもまざまざと記憶に残る物件となりました。竣工式は 3 月 20 日、出席のために地下鉄丸の内線に乗ろうとすると、誰も乗っていない電車が駅を通過、朝なのに変です。地下鉄サリン事件が起きた日でした。音響ハウスに着いて、初めて事件が起きていることが判りました。屋上から見ると、築地にはパトカーやら消防車やらヘリコプターやらが集

結しており、儀式の神主さまも、時間通りには来られない状況、このこともあり、今でも記憶に深く刻まれたプロジェクトです。

さて、１スタリニューアル計画では、スタジオ音場は現状を踏襲、調整室はスペース拡大、ブースの数は確保、メインフロアの天井高さを上げる、プレートエコールームは統合、専用ロビーの確保などが、リニューアルテーマでした。工事面では、同時にエレベータのリニューアルも実施されました。

音響ハウスのスタジオは、創設時、１スタ、２スタ、３スタ共に、フィルム映写室が兼設されており、すべてのスタジオにスクリーンがありました。現在はありませんので、そのような空間もスタジオ空間などに転用されています。

１スタのリニューアル工事にあたり計画が終了すると、工事資材をどこから搬入するかが次の大きな課題となります。音響ビルと映像ビルとの間のすき間に仮設の工事エレベータを設置し、搬入するしかありませんでした。そのために、外壁に設置されている空調室外機を整理して（配置換え)、仮設エレベータを設置する空間を空けることから工事は始まりました。

すべての資材は、外部バルコニーから 590W × 790H の大きさの扉からの搬入となり、部材の大きさと長さの検討、搬入時期の検討の繰り返しでした。今になると、この小さな扉から、これだけの材料をよく入れたなと、改めて思います。スタジオ階から上階に繋がる鉄骨階段の搬入は重さもあることから、特に神経を使いました。

スタジオ内装は、メインフロアに大小４室のブースが面しており、コミュニケーションも考慮した配置とし、全体的にはシンプルな仕上げで、天井面には、木製の化粧梁を付け、アクセントとしてあります。また、調整室上部の空間も、スタジオの空間として取り込み、音響空間として利用し、上階の専用ロビーからは、スタジオの様子が垣間見られるようになっています。ロビーの横には、専用の EMT ルームとし、鉄板エコー３台が置かれています。ロビーには、創設当時の１スタの写真が飾られています。

調整室は、前後方向に広くするために、既存コンクリートスラブ天井に鉄骨フレームで固定遮音天井を増設してあります。機器用ラックも、スペース効率を上げるために、ラックの前後に遮音扉を設け、機器操作は前面からメンテナンスは背面から開閉できるようにしてあります。調整室にならんで、５番目のブースがあり、ブースとして使わないときは、持込機材や楽器等のケースを置けるスペースとなっています。

機材面で特筆すべき点は、アナログコンソールの SSL 9064J は、日本国内に入った初号機です。当時は、デジタルレコーダーとして、テープ媒体の SONY3348 が主流でしたが、SSL のハードディスクレコーダーも導入されました。モニタースピーカーは、London の Air Studio と同じ、dynaudio M4 CUSTOM。これも、国内初号機でした。

機材もさることながら、メンテナンスエンジニアの方々が、日常の機器管理から音質向上のための改造までを行なわれ、常に良好なコンディションを維持されています。

最後に、これからも音質向上に向けて邁進されることを期待しております。

４．音響ハウス part.2

株式会社ソナ
小林 美香

５月 19 日（月)、第４回スタジオ見学会として音響ハウス様に伺いました。

銀座１丁目という日本の中心地にあり、設立 40 周年という歴史あるスタジオです。

今回はその中からStudio NO.１、Studio NO.２、Studio NO.３の３つのエリアを見学させていただきました。

設立の時代背景の異なる３つのスタジオを一度にぐるりと回ることができたのは大変貴重な体験だったと思います。いろいろな時代のアーティストがこの場所に立ったのかと想像をすると感慨深い気持ちになり、古き良きスタジオから新しいスタジオまで大事に扱っておられる音響ハウス様の方々のスタジオへの愛情を感じることができました。

～スタジオ見学～

Studio NO.１にて参加者19名が集合しました。吉川様の司会のもと、広岡社長のご挨拶をいただいた後、早速ＡとＢの２グループに分かれてＡは櫻井様、Ｂは高村様のご案内での見学となりました。

（株）音響ハウス
吉川 浩司 氏

Studio NO.１

最上階８階の吹き抜けた高さのある天井と梁が印象的なスタジオです。

アール形の盾のような形状の反射板が取り付けてあり、様々なセッションに合わせ残響が調整できるようになっていました。

メインスタジオに付帯する各ブースは楽器によって遮音の仕様や間口などが変えてあるそうです。

時間の都合でコントロールルームでの試聴はできませんでしたが、国内初であったアナログコンソールSL9000Jや左側にはStuderA820、Sony PCM3348などのマルチテープレコーダーがしっかりメンテナンスされて現役で活躍しているということでした。

一旦スタジオの外に出て、レンガタイル貼りに沿った階段を上がると専用ラウンジがありました。（レンガタイルの壁面に街灯のようなランプが灯り雰囲気があって絵になる素敵な階段でした！）更にこの部屋を抜けるとコントロールルームの上に出てメインスタジオを俯瞰することができます。

Studio NO.２

今回見学させていただいた中では一番時代が古いものだそうです。

独特の響きは時代を背負っており、この響きを大切に引き継いで行くべくとても大事に取り扱われている印象を受けました。

響きの気持ちよい空間で弦やピアノなどの録音ではおなじみのスタジオとのこと、見学の時もスタインウェイのピアノがセッティングされていました。

スイッチのパネルから録音中のランプまでが当時のままで、この時が止まったようなレトロな味のある空間が若いアーティストやエンジニアに人気が高いというのもうなずけます。

メインスタジオの壁のデザインも個性的で、TVなどで見かけるとすぐ音響ハウスさんだ！と分かるもので、実際に間近で触れることができて感激しました。

Studio NO.２にもスタジオの外から螺旋階段で上がる専用ラウンジがあり、ブースとしての使用もできるようにマイク回線も引いてあり音場調整用のカーテンが用意されていました。

Studio NO.３

2006年にフロア全体を改装しオープンしたという今回の３つのエリアの中では一番新

しいスタジオになります。私自身も設計に携わったとても思い出深いスタジオです。

（株）ソナ
小林 美香 氏

スタジオ改修時のエピソードとして、老舗ならではの建物の古さを補う工事について苦労話等をさせていただきましたが、久しぶりに足を踏み入れたStudio NO.３は完成してからの８年の時間も感じさせず、できた時のフレッシュなままでした。

Studio NO.３はサラウンドの部屋となっており、アピトン材とバーチ材を交互にサンドした分厚いスピーカー台に載ったADAM S5Aに取り囲まれるラウンド型のコントロールルームが特徴です。

JAPRSで用意していただいた矢沢永吉さんのライブディスクを今回も再生していただきました。

広めのサウンドロックを介したブースは、ガラスによる反射音の影響を抑えた縦に角度をつけた大きな覗き窓が部屋を広く感じさせ、コントロールルームとのコンタクトも良好です。壁面はQRDパターンとなっており、壁面の裏には一部収納が隠されています。

見学の時にはナレーション収録のセッティング用にテーブルと椅子が用意されていました。

～見学を終えて～

あっという間に見学の時間は過ぎてしまいました。

最後の高根様のご挨拶で、David Lee Rothさんがレコーディングで来日し、音響ハウスStudio NO.１のレンガタイルの階段のところで「東京の“イツツボシ”５ Stars Studio !」とYouTubeにアップしているのを知って感激した、というお話を聞き、もちろん私もすぐ検索をしてしまいました。David Lee Rothさんがしっかりと日本語で「イツツボシ」と！国内外のアーティストのハートをしっかり掴んでいる音響ハウス様のスタジオ、今回はたっぷり３つのエリアを見学できるようにスケジュール調整のご配慮、誠にありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

賛助委員会主催のスタジオ見学会も今回で４回目でしたが、伊藤様の見学会終了のご挨拶の中には５回、６回と次に続く見学会のご予定についてのお話がありました。

このような貴重な体験をさせていただき大変感謝しております。是非また今後の見学会にも参加をさせていただきたいと思います。

関係された全ての皆様、どうもありがとうございました。

４．音響ハウス part.3

株式会社若林音響
若林 豪之

初夏を感じられる汗ばむ陽気であった５月19日、JAPRSスタジオ見学会に参加しました。今まで都合が付かず不参加であったスタジオ見学会へ漸く参加出来ると意気込み、月曜午前中の銀座は人通りもまばらな中、音響ハウスへ意気揚々と向かっておりました。すると「おはよう！」と大きな声の挨拶と共に颯爽と現れたのが、本日の目的地である音響ハウスの代表取締役である広岡社長でした。出社途中の広岡社長に道案内をして頂き、こ

（株）音響ハウス
広岡 淳利 氏

れは幸先が良い見学会だと内心喜ぶと共に、恐縮するばかりでした。音響ハウスへ到着するや否や広岡社長は「タバコは吸うのか？喉は渇いてないか？」とお気づかいを頂き、ラウンジまで案内して下さったのには、音響ハウス様ならびに広岡社長の寛大さを感じる次第でしたが、恐縮が緊張へと変わり真夏のような汗を流す目的地到着となりました。

盛況であったスタジオ見学会は２班に別れての進行となり、私が最初に足を踏み入れたのは音響ハウスでも１番大型であるStudio NO.１の大空間メインフロアーでした。

冒頭、吉川　浩司氏（株式会社 音響ハウス 営業部部長）よりご挨拶と設立に関する説明を受け、音響ハウスはレコーディングをメインとした「音響ビル（1974年竣工）」と隣接するポストプロダクションをメインとする「映像ビル（1979年増設）」の建屋２棟の構成となっており、海外の著名アーティストから「東洋１のスタジオ」と呼ばれているエピソードなどをお話し頂きました。私が生を受けた頃より営業されているスタジオと伺い、色々な意味で感慨深く歴史を感じた次第です。

今回見学会が行われた音響ビルの最上階である８階にStudio NO.１は設置されており、メインフロアーの天井高5.5ｍは圧巻の空間であり、一般的なビルの２フロアー分の高さが必要なため、８階建てのビルは実際には12階建て以上の規模となる上、設計時よりスタジオ専用として計画された建屋が成せる素晴らしき利点を感じました。

Studio NO.１の説明には設計施工を担当された崎山　安洋氏（日東紡音響エンジニアリング株式会社）より行われ、竣工当時の音響内装や映画音楽の収録が多かった設備等の説明を受け、その後1990年代に行われた大規模改修での音響内装や形状の変更、施工時の苦労話を伺えました。流石は40年も営業を続けられているスタジオとあって、改修工事の内容等でレコーディングスタジオが求められる機能・構成・残響時間・設備等、時代の変化を知ることが出来る貴重な内容でありました。

営業中のスタジオが存在するビルで、この地上高への資材搬入出、想像するだけでも言葉を失う大変な大工事であったと思います。また、崎山氏が40年以上前から素晴らしい大型スタジオに携わっていることを改めて知り、尊敬の念を抱くばかりです。

続いて行われたのが同ビル５階にあるStudio NO.２です。このスタジオも崎山氏が設計施工を担当され説明が行われました。

Studio NO.２は竣工当時の形状や音響内装が多く残されており、ポップス音楽の収録を目的とした当時の設計が、21世紀の今日に至っても高い利用率であることを考えると、いかに斬新かつ前衛的であったかが伺えると思います。メインフロアーの天井はかまぼこ形の反射板が多段で構成され、天井高は4.3ｍと高く非常に自然な響きが部屋全体を覆う音場でありながら、壁面の吸音層で部屋の癖や余分な反射を感じさせない、マイクスタンドを何処にでも立てられる優れた音響内装が施されており、各パートブースにおいても各々残響時間の違いが明確に施されており、Steinway & Sonsが置かれるピアノブースは木製反射板とスリット面での吸音が構成する豊かな響きが印象的でした。

コントロールルームに設置されるSSL 4000Gは非常に良いコンディションで、私のような若輩者には新設当時を垣間見られる驚きの体験でした。コントロールルーム正面にバッフルマウントされたWestlake製ラージモニターは、大型FIX窓の上に当たり前のように設置されていますが、スタジオ間の視認性向上が考慮された配置であり、その重量を考

えると支持構造が簡単には理解しがたい事が伺えます。このシステムで試聴を行って頂きましたが、Westlake が奏でる定位の良さにはエンジニアでない私でも息を呑む体験でした。

さて、見学会も終盤にさしかかり次に拝見したのは同ビル７階にある Studio NO.３です。

説明を行って頂いたのは、萩原　一哉氏（株式会社　ソナ）と小林　美香氏（株式会社　ソナ）のお二方で、設計を担当された小林氏より音響的特長をお聴かせ頂きました。

（株）ソナ
萩原 一哉 氏

こちらのスタジオの特長はサラウンドシステムが構築されており、ITU-R を基準に同芯軸上で構成されたダイレクトサラウンドシステムが、空間を余すことなくデザインされた部屋の内装と相まって非常に目を見張る仕様となっています。

ブースには RPG 社製の拡散ユニットが用いられ、全体的にデッドな空間でありながら、適度な残響感を得られる設計となっており、室容積以上の空間を感じました。コントロールルーム間の大型 FIX 窓は、ガラスの反射によるマイクロフォンへの影響を考慮し、くの字型に折れ曲がったユニークな形状が施され、設計者の気配りが感じられる印象的な仕様です。

また、計画段階から施工に至るまでのお話しについても興味深く、床耐荷重の制限で遮音層構造を変更した経緯、計画段階でのシミュレーションや施工途中での音響試験など、サラウンドシステムならではの大変さや、隣接した営業中のスタジオへの配慮など、同業者には身にしみる思いでした。

サラウンドシステムの見学では試聴が醍醐味であり、フロントセンター席を確保した結果､試聴ソースを最大限に生かせる臨場感は言葉では表せない空気感を体験した次第です。

最後に、私は音響内装設計施工会社の営業という立場上、同業他社様設計施工のスタジオへ伺うことは非常に楽しみとしており、業界の大先輩から直々にお話を伺える有意義な時間を過ごせた見学会でした。

また、機材やユーティリティにおきましても音響ハウス様の意識の高さを感じることが出来、今回この様な貴重な体験をさせて頂けたことは、関係された全ての方々に感謝し、この場をお借りして、お礼申し上げます。ありがとうございました。

５．ビクタースタジオ

株式会社ミキサーズラボ
池本　瞳

平成 26 年 6 月 18 日に行われたビクタースタジオ見学会に参加しました。
日本を代表する大手レコーディングスタジオである Victor Studio へ足を踏み入れる機会を設けていただき、心より感謝いたします。

冒頭に、ビクタースタジオの設立から現在に至るまでの概要を説明していただきました。
ビクタースタジオの歴史の長さと、常に音楽に対するスタジオのあり方を考えるコンセプトが明確になっていることが伺えました。

（株）JVCケンウッド・
ビクターエンタテインメント
ビクタースタジオ長
秋元 秀之 氏

今回、見学をさせていただいたのは「401Studio」「301Studio」「303Studio」でした。
ビクタースタジオは各 Studio それぞれにコンセプトがあり、ブースやコントロールルームは Studio によって雰囲気が異なっていました。

「401Studio」は Studio の最先端をいくものとして考えられており、コントロールルームのデザインも近代的な空間になっていました。
メインブースには日本のレコーディングスタジオでは珍しい 3 点吊りのマイクシステムがあり、コントロール可能で、広範囲にわたり動くという優れものでした。

ピアノブースは 7 m の天井と高く、面積は小さくても、容積を大きくすることで、ピアノの鳴り方を考えられて設計されているところにも工夫がありました。
また、鉛を使ったエコールームでは、カーテンを開け閉めすることで、響きの長さを調節できたりと、音を扱う現場で、求める音をいかに作り出せるのかについて考えられた部屋でした。

「301Studio」はパーティションを組めば、最大 9 つの部屋が作れ、大きな編成でも、同時に音が録れるようなブースになっていました。
今回、この 301Studio のシステムを使って、ハイレゾ音源の試聴もさせていただきました。
Studio を案内していただいたスタジオ長の秋元秀之氏の「ハイレゾとは、決して何かを付け足して作られた音ではなく、Studio では当たり前に聴いている音を、どのような環境でも聴けるようになったもの」だという言葉が印象的でした。
オーディエンスによって音を聴くシステムは違っても、より再現性の高い音を提供することによって、あたかも Studio で聴いているような音を世の中に発信していけたらいいなと思いました。

「303Studio」は主にトラックダウンや簡単なダビングができる Studio でした。
ブースとコントロールルームには壁の穴を通して、直ケーブルが用意されており、パッ

チをせずとも、簡単に信号の受け渡しができる状態になっていました。
　ダイレクトに信号の受け渡しができるため、そのぶん接点も少なくなります。
　効率よく良い音が録れる環境づくりにも力が入っており、そこには音へのこだわりが強く込められていました。

　ここからは、301Studio で試聴させて頂いた「ハイレゾ」について、焦点を当ててみようと思います。
　今回のハイレゾ音源試聴会では、ビクター株式会社（現：株式会社 JVC KENWOOD）とビクターエンタテインメントのビクタースタジオにより共同開発された高音質化技術「K２ Technology」の高度な技術を目の当たりにする機会となりました。
　この試聴会では、音声ファイルフォーマットの違う３種類のデータを用意していただきました。
　試聴の比較対象にしていたのは、圧縮処理された「MP３」、CD フォーマットである「44.1kHz/16bit」、そして「K２処理されたハイレゾ音源」です。
　見学会には多くの方が参加されており、残念ながら私自身、スピーカーのセンター位置で音を聞き比べることはできませんでしたが、それでもこの３つの音の違いは明確にわかるものでした。
　同じ音源であるのに、音の立ち上がり方や奥行き感など、それぞれのフォーマットによって全く違い、K２処理されたハイレゾ音源は１つ１つの音のニュアンスが感じとれるような音になっていました。
　それほどにも、K２処理を施したものと、そうでないものの音の違いは明確に現れ、秋元氏の言う「どのような環境でも Studio の音により近いかたちでの音の提供」を可能にしたものだと確信できる試聴会となりました。

　同じ音楽もの中心のレコーディングスタジオで働く私にとって、他社のスタジオをじっくりと見て回る機会というのも少ないので、とても貴重な時間となりました。
　最後になりますが、このような見学会を執り行っていただいた委員会のみなさま、ならびに Studio 調整をしていただいた Victor Studio のみなさま、この場を借りて、お礼を申し上げます。
　有り難うございました。

６．サウンド・シティ part.1

日東紡音響エンジニアリング株式会社
音空間事業本部 企画営業部
音響設計グループ　崎山 安洋

平成 26 年 7 月 28 日（月）、賛助会員を対象としたスタジオ見学会の第６回目として、東京都港区麻布台にある“サウンド・シティ”の見学会が実施されました。参加者は、26 人。

サウンド・シティには大小５つの音楽スタジオがあり、今回は、ブースも多く一番大きなＡスタジオ、ブース付ののＳスタジオ、この２つのスタジオを見学させていただきました。営業部の明地権部長よりスタジオの概要説明があり、その後、見学者を２班に分け、Ａスタジオはオーディオ技術部の中澤智部長による説明が、Ｓスタジオはオーディオ技術部の内藤岳彦チーフエンジニアによる説明が行われました。両スタジオともに、モニタースピーカーでの試聴もありました。

Ａスタジオは、国内で最大級の大きさと天井高さがあり、ブースの数も多いことから、フルオーケストラの同時録音が行えるスタジオです。中澤氏より、Ａスタ概要から始り、実際の録音現場での楽器配置も含めて使われ方などの説明を受けました。調整室では、モニタースピーカー調整から、スタジオ運用の変遷、これから Live Recording にも力を入れていくことなどの将来展望のお話を伺いました。

Ｓスタジオは、ダビングブースのあるトラックダウンルームです。5.1ch Surround Mix にも対応しています。リニューアルを担当された内藤氏より、モニタースピーカーから特に低域がしっかりした再生音を出すまでの、工事秘話が語られ、現在は Pro Tools を音楽用と MA 用の２式が設置され、どちらにも対応できる運用をされているとのことでした。

現スタジオは、昭和 51 年（1976 年）９月、新橋より麻布台へ移転された時に始り、昭和 62 年（1987 年）７月Ａスタ、Ｂスタの全面改修が完了し、現在までＡスタＢスタとして運用されています。弊社は麻布台移転工事から参加させていただき、当時の竣工図には、“飛行館スタジオ麻布台新築工事”と書かれてあります。新橋の飛行館スタジオは、昭和 36 年（1961 年）の設立ですから、放送局以外では長い歴史のあるスタジオです。

今回の見学会では、昭和 62 年のＡスタ、Ｂスタ全面改修時のことを説明させていただきました。当時の担当者様からの要望事項に幾つかの項目がありました。

録音内容は、オーケストラ録り、劇伴録り、リズム録り、ボーカルダビング、邦楽録りなどなど。また、同録が行えること。以上の内容に合わせて、スタジオプランが練られました。その結果、Ａスタはメインフロアに面してリズム系楽器を想定したブースを基本配置、それ以外に半円状の平面に回転式の扉２枚が付いて、扉の位置を替えることで、１～３室に分割して使える Aux Booth。Gt Booth も間仕切壁が移動して、大きさが拡張できる Booth など、今見てもユニークなブースですが、お客様との打合せの中から様々なアイデアが次々と生まれたものです。

音響面では、アコースティック楽器が生き生きとした響きで収録できるライブなスタジオとのコンセプトの基、天井は高く、壁と天井は、大理石貼りと塗装仕上げ、床は硬質なフローリング仕上げで、反射面をベースとし吸音面を一部に割り付けた仕様となっていま

す。建築工事完成時に吸音面の調整を行い、アコースティックな響きのある音場となっています。また、天井を高くする以外に、照明については、屋外のように明るくしようとのコンセプトもあり、白色塗装との相乗効果から、広くて高いスタジオ空間となっています。Ｂスタは広さが少し狭くなりますが、同様の仕様とコンセプトとなっています。

調整室は、モニタースピーカーがREY AUDIOのRM-7V、巨大なスピーカーです。当時、何回か所沢に伺い、試聴をさせていただきました。その後、現場に設置する前に、弊社の調整室形状の実験室に仮設置し、調整室の音場特性を検討するために、形状や吸音構造を変えながら、測定と試聴を繰返しておりました。そのテスト結果と実用性とを考慮して、現場に反映しました。現在は変更されていますが、Ａスタ調整室とＢスタ調整室から、共通マシンルームへのスムーズなスタッフ動線が確保され、機材の効率使用のためにリンク回線なども充実しています。

ＡスタＢスタリニューアルプロジェクトは、現在考えても、意匠・音響・機能、どの面からも、先を見据えたコンセプトに根ざしたものだったと改めて思いました。

Ｓスタについては、音響調整工事で参加させていただきました。一番のご要望事項は、モニタースピーカーから、しっかりとした低域の再現でした。結果は、室内のどの位置でも、均一な音場になっているかと思います。

今回、見学会に参加させていただいた弊社スタッフからは、Ａスタ、Ｓスタの説明をしていただいた中澤様、内藤様のお話の中に、強い主体性と情熱を感じたとの感想がありました。これからも、良い音楽創りのできるスタジオ運営と、ご活躍を期待しております。

６．サウンド・シティ part.2

株式会社メディア・インテグレーション
ROCK ON PRO 町田 幸紀

今回は麻布台に有るサウンド・シティで行われた、第６回スタジオ見学会に参加させて頂きました。

サウンド・シティはレコーディング部門とポストプロダクション部門の２部門を同じ敷地内に持っている珍しいスタジオです。

今回はレコーディング部門のスタジオ見学と言う事で、メインスタジオでもあるＡ studioへ集合しスタジオの成り立ちやコンセプトをお教え頂きました。

まずブースに入って目を引くのは天井の高さと壁の色に目が行きました。
スタジオの傾向として、どちらかと言うと天井高はあまり無く、ブースの壁も吸音処理のジャージ素材の色で暗めな感じが多い中、サウンド・シティＡ studioは天井高が有り、壁も石造りと他のスタジオとは差別化をしています。

このアイデアはスタジオ施工時に、スタジオ内にいても外の明るさを再現する事でスタジオ内外部から移動した時の違和感が無くなる様に考慮され、壁も白を基調にした開放的な空間を提供しています。

またブース内にはピアノブースを始め各ブースが有りますが、そのなかでもAuxiliary Boothが有り、大きめな１ブースとして使用する事も可能ですが、移動式の壁で３分割出

来て用途に応じて使い分けているとの事で大人数の編成にも対応しています。

そしてコントロールルームで目を引くのは、バッフルにビルトインされているREY AUDIO製RM-7Vです。
最近ではミドルサイズのスピーカを使用している所が多く、ラージモニターをしっかり鳴らしているスタジオは少なくなって来たと思います。
実際に音を聞かせて頂きましたが、ジャンルを問わずバランス良くしっかりとした音を出していました。
エンジニアの方よりスタジオのコンセプトをお話し頂きましたが、DAWにはPro Tools等のデジタル機器を使用するが、一番拘るのはアナログ部分との事で、ブース、コントロールルーム含め随所に拘りが有りクライアントの心を掴んでいるのでしょう。

そしてもう1つご紹介頂いたのはS studioで、此方はポストプロダクション作業とレコーディング作業を共同で使用されているとの事です。
メインデスクの左側にはボーカルブースが有りますが、此方はMA時にはナレーションブースとしても使用するそうで、ハイブリッドなシステムになっており両作業に適した上手な作りになっていました。
サラウンドにも対応しており、正面のモニターTVを利用したDVD/BD等の5.1サラウンドの制作作業にも対応し、とても使い勝手の良い環境に思いました。
S studioもA studio同様REY AUDIO社RM-11BCがバッフル面にビルトインされており、各スタジオのコンセプトの統一感が有り、部屋が変わってもイメージの変わらない作業が出来るのではないかと思いました。
特にS studioはソフトバッフルで有ったり、正面にモニターTVが有ったりと不利な条件にも関わらず統一感が有るのは施工時の苦労が伺われます。

両方のスタジオに共通するのは、デジタル機器も取り入れながらアナログにも拘り、音作りをする姿勢がスタジオの個性となり老舗スタジオにも関わらず色々なジャンルの録音を行っているのだと思いました。

7．ソニー・ミュージックスタジオ

専門学校 ESP ミュージカルアカデミー
井良沢 元治

赤坂は乃木神社の隣、SME 乃木坂ビルの地下３階に、今回見学したフルオケ同録が出来る Studio２とそのほかに大小４箱、合計５箱からなるソニー・ミュージックのレコーディング・スタジオがあります。

地下２階は 12 部屋あるマスタリング・スタジオ、地下１階は、映像の編集室４部屋とオーサリング３部屋からなる Blu-ray Disc、DVD などのオーサリング・スタジオで、この３フロアで一貫した音楽制作を行うことが可能なすばらしい環境です。

地下なのに、乃木坂の立地を利用して全フロアに自然光が入り圧迫感は感じません。

2001 年オープンから 10 年以上過ぎているのに、古さを感じ無い、クリーンでクールな地下３階建のスタジオビルです。

○レコーディング・スタジオ

ソニー・ミュージックスタジオは、地下鉄千代田線と周囲幹線道路の交通騒音を事前測定し､その対策として防振ゴムによるフローテイングで基礎を作り影響を無くしています。内装材の共振、空調まで管理し、静けさの数値が NC-15 ／ M’-15 というすばらしい結果になっています。

まず地下３階、全てのレコーディング・スタジオにはアーティスト・ロビーが配置されていて、その脇には充分な打合せと休息の場となるアーティスト・ルームがあります。

Studio１, ２はその中間にマシンルームと EMT が６台入ったエコーマシン・ルームを挟んで対称で全く同じ形に創られています。最大６m の天井高を持ちフルオケの録音も可能なメイン空間と、どこでもスタインウェイの "D" フル・コンサート・ピアノが置ける大きさを持つ５つのブースが、コントロール・ルームを中心にクラスター状に配置されています。

通路を隔てた反対側には、今回は見学出来なかった Studio３, ４, ５があります。ミックス＆ダビング用途のこの３つのスタジオは共有のマシンルームと､同形状のコントロール･ルームに、吹抜けの高い天井を持つブースをそれぞれ持っています。

サラウンドにも対応した Studio５は、フロントとリア５台のスピ－カーが全てラージ・モニターで揃えられ、２本のサブウーファーを用いた「5.1ch」仕様になっています。

○ラージスピーカー

共通のラージ・モニター・スピーカーは「TEC:ton Engineering」社の"TTH-1s"で、ソニー・ミュージックスタジオ用に新規設計したもので、コントロール・ルームのコンクリートの壁に直接埋め込まれています。

スピーカーの大音量に負けない堅固なエンクロージャーとして、その壁は床部分から全てコンクリートで出来ています。その重量がすごく、床上のコンクリート・バッフル部分で約50トン、床版のコンクリートで約70トン、合計約120トン、それにまだ遮音ボードや仕上げの重量などが加わり、巨大なスピーカーを堅固に支えています。

ミキシングコンソールはNeve8872、ボリューム/スィッチは日本で指定した特注品で全てを金接点にし、最初から全ランプをLEDにしたそうです。

○ディフューザー＆クロス

スタジオ壁面の要所々々に使用されているオリジナルの拡散材料は"ディフューザー・ブロック"で、その形状は音響的にもデザイン的にもユニークです。内部に吸音材を詰め、凹みに溜まる音をスリット状の溝で吸音する構造になっています。

コントロール・ルーム後壁の縦に4段設置されている木製箱型（本棚）600 × 1200 × 500 ～ 700の"ディフューザー・ボックス"は、モニター音を拡散する役割を果たしています。

ディフューザーは「bau:ton」社のオリジナル商品で、その扱い方・手法がまるで海外のスタジオそのもののように空間を仕上げています。

また、クロスも「KNOLL」社という海外メーカーの素材を使用しているという事でした。

○マスタリング/オーサリング・スタジオ

（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ
スタジオ＆ネットワークカンパニー
スタジオオフィス次長
宮田 信吾 氏

マスタリング・スタジオのモニター・スピーカーはスタジオラージモニターと同じ「TEC:ton Engineering」社のミッドフィールド型、"TTmF-2" 2ウェイモニターで バスレフ方式です。スタジオオリジナルのA/D・D/Aコンバーターをメインに、マスタリングソフトはSequoia を使用し、各ブースで基本的な機材を統一しているそうです。

オーサリング・スタジオには、ノンリニア編集システムQuantel Pablo、リニア編集システム SONY MVS-7000X、映像ファイルサーバーシステム DVS SpycerBoxが設備され、すべての映像機器は高速のネットワークでファイルサーバーに接続され、劣化のない非圧縮のまま取り扱えることで、映像編集から各種フォーマットへのエンコード、Blu-ray Disc、DVDのオーサリングの各作業を高画質のまま行えるなど、多様化する映像フォーマットに非常に高効率的に対応しているそうです。

古くは、六本木、信濃町、そして現在は乃木坂の、ソニー・ミュージックスタジオという日本を代表するソニーサウンドの本拠地を、わずかの時間でしたが見学出来たことは、とても貴重な体験でした。

宮田さん、花田さん、内藤さん、工藤さん、ご説明をありがとうございました。

ソニー・ミュージックスタジオの全てがわかるiPad用アプリケーション『Sony Music Studios Tokyo Guidebook』が公開されています。まるで実際に見学をしているような感

覚でスタジオの細部まで知ることができます。iPad をお持ちの方は、ぜひダウンロードして体感してください。

「参考ホームページ」
http://www.sonymusicstudio.jp/

http://www.noe.co.jp/technology/18/18std1.html

http://www.sme.co.jp/pressrelease/images/20120531.pdf

音声伝送システム勉強会レポート part.1

オタリテック株式会社
柳 秀和

5月22日、メディア・インテグレーション様のセミナールームにて行われた音声伝送システム勉強会にて、RIEDEL社のMediornetを紹介させていただきましたのでご報告いたします。

マルチメディアネットワークの必要性に関して

スタジオ、イベント会場、中継等の既設･仮設設備の信号の量は年々増え続けています。信号伝送のデジタル化・ネットワーク化により物理的な配線の数・量は減少してきていますが、従来の光伝送、ネットワーク製品は映像、音声、データ通信などに分かれていて、それぞれ個別に構築する必要があり、また映像伝送はポイントtoポイントの製品が主流でネットワーク構築に制限がありました。

RIEDEL社のMediornetは、音声のみを取り扱うネットワーク製品と異なり、ビデオ、オーディオ、インカム、データ等、様々な信号を2Uフレームに取り込み、フレーム間を光接続してネットワークを構築することが出来る分散型マルチメディアネットワーク製品です。複数フレームを光ケーブルにてディージーチェーン接続、スター接続、ループ接続など様々な形で接続可能で、光信号を多重することにより最大で76.5GBit/sのネットワークを構築することができます。

オタリテック（株）
柳 秀和 氏

各信号を一元管理しネットワークを構築することにより、システム構築のコスト削減や中継現場での設営時間短縮、システム設定・監視の一元化が可能となります。

Mediornet（メディオネット）について

Mediornetに関して､独自フォーマットによるデータ伝送方式についてご紹介しました。映像、音声等各種データをパケットに分割することにより複数のフレームに各種信号を分配できる仕様となっています。光伝送に関しては「CWDM」を実装することが可能で、波長の異なる光信号を多重することにより、１本の光回線で大容量の信号を伝送することができ、これによりネットワーク間に大量のデータを伝送することができます。CWDMの技術的な仕様や､内部に実装する光トランシーバーの種類や仕様をご紹介いたしました。

本体はモジュール式の構成となっていて、映像・音声関連の様々なオプションカードに関するご紹介をしました。

システムの運用例ついて

Mediornetが大々的に使用されたユーロビジョン・ソングコンテスト2011年大会の報告をいたしました。

この大会は欧州放送連合（EBU）加盟放送局によって開催される世界最大級の音楽イベントで、1956年から毎年途切れることなく開催されています。2011年はドイツ・デュッセルドルフのエスプリアリーナにて開催されました。

イベント / 放送で使用されるすべての信号はRIEDEL製品経由で伝送・分配されました。（UpLink, WebTV, Internet, EBU-Feed等）

伝送・管理されるオーディオ回線数：1200
伝送・管理される映像回線数：HD-SDI × 70 入力、150 出力⇒ Mediornet フレーム：80 台（21 箇所に分けて設置）

このような複雑で多チャンネルのシステムを従来の方式で構築する場合、冗長性の確保やシステム管理が困難となり、設営、撤収に膨大な時間がかかってしまいます。次世代ネットワーク製品である Mediornet を中核にシステムを組む有効性についてご説明させていただきました。

Mediornet は最近 Ver2.0 となりさらに機能が追加されていく予定となっています。
ネットワークの帯域を最大 640 GB まで拡張できるファイバーコアルーター Metoron、映像信号を広域ネットワーク経由で伝送する Mediornet WAN など新製品を予定しておりますので、またの機会にご紹介をさせていただきたいと思います。

以上

音声伝送システム勉強会レポート part.2

株式会社シンタックスジャパン
三橋 武

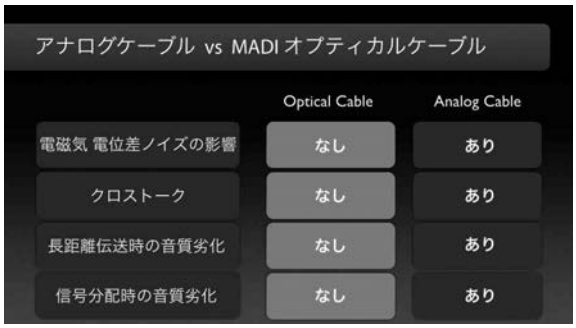
この度は、株式会社エムアイセブンジャパンとして参加させていただいております JAPRS の音声伝送システム勉強会に、グループ会社の株式会社シンタックスジャパンとレゾネッツ合同会社で扱う音声伝送システムに関して簡単なデモンストレーションを行う機会をいただきました。この場をお借りしてご参加の皆様、JAPRS スタッフの皆様、そして会場をご提供いただきました株式会社メディア・インテグレーション様に厚く御礼を申し上げたいと思います。

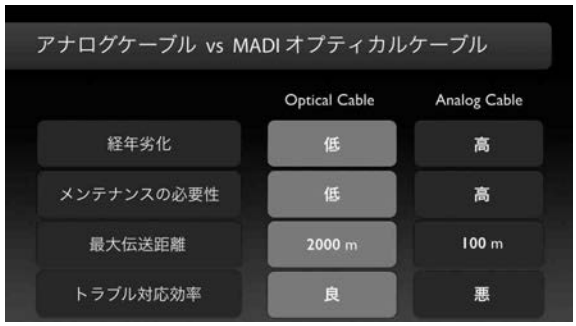
株式会社シンタックスジャパンのプレゼン概要

（株）シンタックスジャパン
三橋 武 氏

取り扱い製品：RME
伝送カテゴリー：MADI

独 RME は、古くから MADI の開発を行っており、非常に高い技術とノウハウを持っております。
また､最近リリースされました新たな MADI シリーズを中心に、より多くのユーザーに役立つよう、コンパクトで廉価な MADI ソリューションを展開しておりますので、当日は、その辺りを中心にスライドを使ったご説明を行わせていただきました。
まず、MADI の優位性として、オプティカルケーブルと従来のアナログケーブルを比べた表をスライドでご紹介いたしました。表を見ますと、多チャンネル化が進んできた昨今、今までの様に銅線のアナログケーブルを使うメリットは殆ど見当らないのがお判りになるとおもいます。





次に、いくつかMADIを扱うブランドがある中で、特に、RMEのMADI製品が優れている理由として、冒頭に挙げた高い技術と蓄積されたノウハウという部分以外に、大きな特徴として以下の２点をご紹介させていただきました。

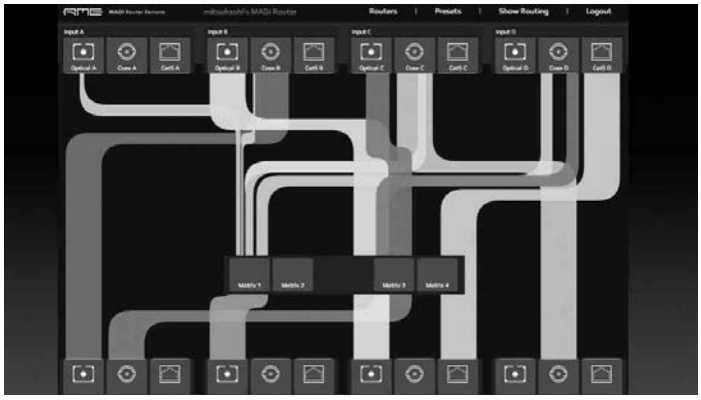
非常にコンパクトながら最大３系統のMADI（=192ch）を搭載したUSB3インターフェイスを中心に、RMEであればコンパクトながらクオリティを一切落とさないMADIシステムを構築する事が可能です。機材がコンパクトであるということは、最小のスタッフで現場のオペレーションを執行できるという事になりますので、限られた予算内で今まで以上にクオリティの高い作品を収録しなくてはいけないという昨今のニーズによりフィットしたソリューションであるといえると思います。また､MADIは設営が非常に簡単です。いままでケーブル接続に費やしていた時間を大幅に削減する事ができますので、今まで以上にマイキングなど音楽的な部分に集中できる時間を取る事ができます｡また音質面では、RME独自のクロック技術であり、非常に高精度かつ驚異的なジッター抑制機能を持つ「SteadyClock」が大きく貢献しています。また実際にRMEのMADI機器を使い収録された、加藤訓子のアルバム「CANTUS」はミュージック・ペンクラブ音楽賞最優秀録音作品を受賞しておりますし、その他、多くの現場に導入され、第一線で活躍しているエンジニアの皆様にも日々ご愛用いただいております。導入事例などはここでご紹介すると紙面が足りませんのでご興味のある方は是非下記にてご覧いただければとおもいます。

synthax.jp/madi

また、RMEは、MADIのインターフェイスだけではなく、マイクプリや、各種AD/DA、ルーター、コンバーターなど数多くのMADI周辺機器をリリースしております。勉強会では、Pro ToolsのPREプロトコルにも対応している８ch高品位マイクプリのMicstasyを始め、先日リリ

ースされたMADI Routerなどをご紹介させていただきました。

特にMADI Routerは1Uのコンパクトボディーですので、それほど多くのMADI端子を必要としない現場にはジャストサイズのルーターです。また、近く対応予定のオフラインでMADIルーティングを作成できるウェブサイトを使えば、非常に直感的なルーティングも可能です。



製品紹介に続きまして次は実際にどのようにMADI機器を接続するのかという部分にスポットを当て、配線図を使い様々なパターンをご紹介させていただきました。特に当日ご参加いただきましたエンジニアの皆様はPro Toolsシステムをお使いの方が多いかと思いましたので、Pro Tools HDシステムにRME MADI機器を組み合わせた効果的なソリューションをご紹介し、さらに現在も多くのライブ収録現場で実際に使われているMADIマイクプリとMADIインターフェイスを組み合わせた収録システム例、またMADI搭載のデジタルコンソールとMADIインターフェイスを接続する例などをご紹介させていただきました。

なおシステム図も下記URL上の「RME MADI導入事例」にてご覧いただけます。

synthax.jp/madi

このように前半では、RMEのMADI機器のご紹介をさせていただきましたが、後半では、そのMADI信号をさらに応用した伝送方法のご紹介をさせていただきました。

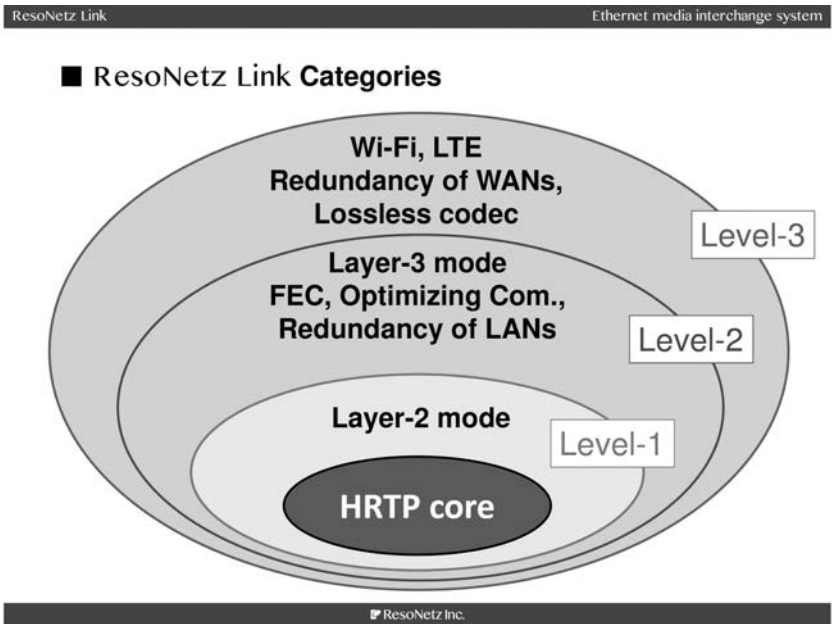
<u>レゾネッツ合同会社のプレゼン概要</u>

取り扱い製品：EtherMADI-64（Ethernet MADI Convertor – LAN & WAN -）
伝送カテゴリー：IP音声伝送

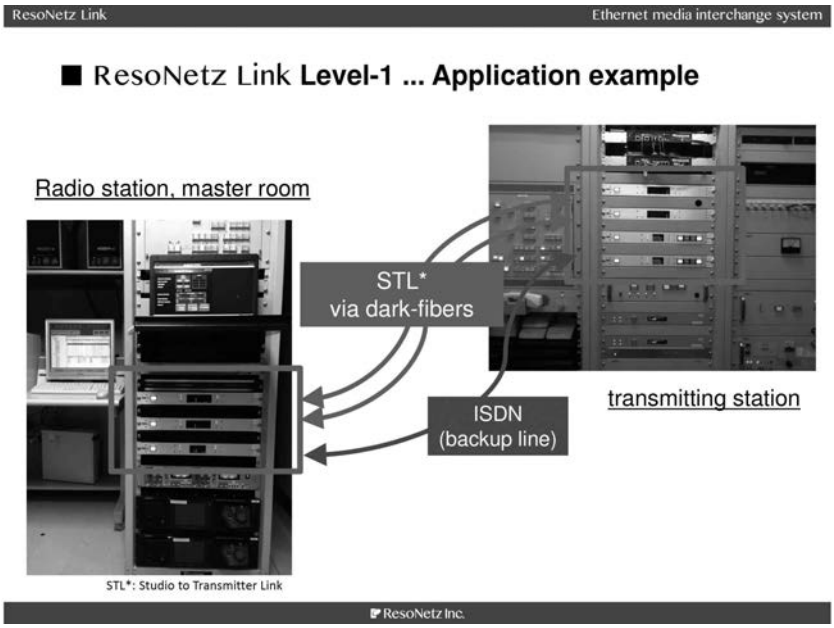
弊社は、設立からようやく1年目の若い会社ですが、デジタル・メディア・ストリームのIP伝送技術開発では10年以上の経験を持つ技術者集団です。FPGAを用いて、高速処理と安定性が要求される業務用途向けの組み込み技術開発を得意としております。今回は独自開発のIP伝送技術「ResoNetz Link」を紹介させていただきました。

弊社のResoNetz Linkは、RTP（Real-time Transport Protocol）の複雑なIP伝送プロトコルをFPGA上に構築する技術（HRTP）をコアとして、３つの通信カテゴリで構成されています。様々なアプリケーションの要求仕様に応じて、それらを柔軟に組み合わせ

てプロトコル体系をカスタマイズできる点が、ResoNetz Link の特長となっています。



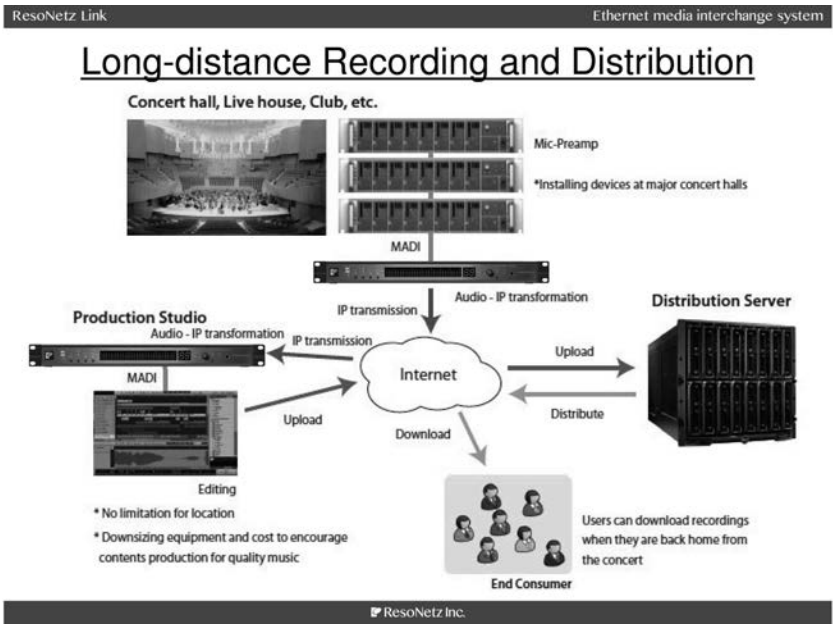
・Level-1: ローカル・ネットワーク（LAN）でデータリンク層（Layer 2）のプロトコル体系により、極めて安定的に IP 伝送する事ができます。FM 放送局の演奏所から遠隔地の電波送信所に FM コンポジット信号をデジタル化、専用回線経由で IP 伝送する機器を開発し、現在 FM 局 15 カ所で稼働しています。既に導入から 2 年以上になりますが障害・事故の発生ゼロの実績を誇ります。



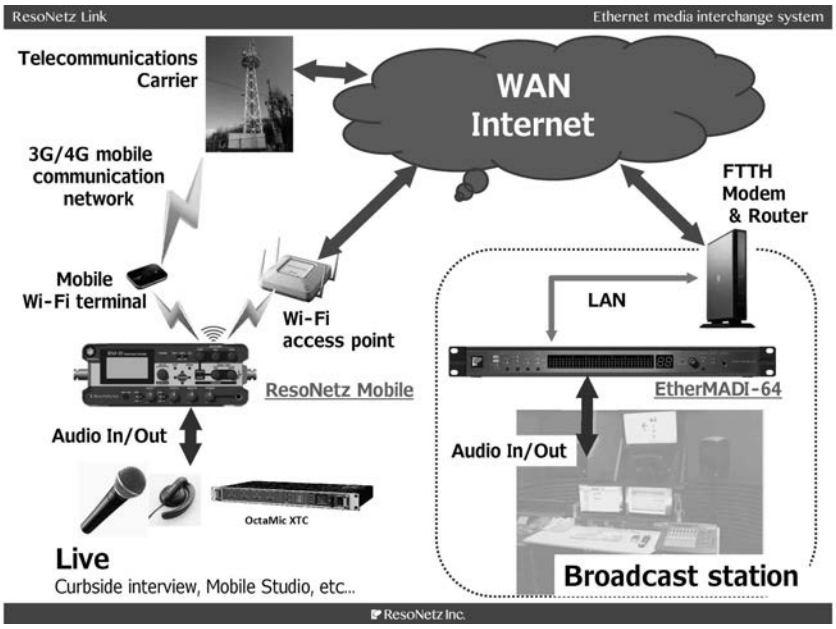
・Level-2: 通信経路の選択（ルーティング）機能を有するネットワーク層（Layer 3）での伝送方式により、LAN およびインターネット（WAN）経由での IP 伝送が可能です。回線状態のリアルタイム監視と遅延時間の自動最適化機能、回線二重化機能、および、パケット・ロスによる音抜けを抑制する誤り訂正機能を装備します。

EtherMADI-64 は InterBEE 2013 にて発表し、現在製品リリースの準備をすすめてお

ります。放送現場、収録現場などの標準規格 MADI を装備し、IP 音声伝送のゲートウェイとしてご利用いただけます。



・Level-3: Wi-Fi などの無線 LAN 通信に最適化した IP 伝送プロトコルです。複数の移動体通信網にアクセスする事により、通信回線の冗長化に対応しています。中継放送や災害時の緊急通信への応用などが考えられます。現在、開発中です。



デジタル音声の IP 伝送方式は幾つかございますが、規格化・統一化の命題ゆえにその規模の肥大化、複雑化などの課題もございます。ResoNetz Link の特長は、目的のアプリケーションに合わせたカスタマイズによって、不要なオーバーヘッドを無くして高速かつ安定動作が可能となる点です。純国産の技術でもありますので、「こんなことはできないか？」など、お気軽にご相談いただけますと幸いです。

音声伝送システム勉強会レポート part.3

株式会社フリーダムスタジオ
山口 諒

ROCK ON PRO セミナールームにて5月22日に音声伝送システム勉強会がおこなわれ、（株）エムアイセブンジャパン、（株）シンタックスジャパン、オタリテック（株）、タックシステム（株）、（株）メディア・インテグレーション、それぞれによる AoIP を使用した多 ch 伝送システムの機材出展、説明がありました。

各社、共通で主張していたのはケーブルの費用対効果で、Ethernet ケーブル、オプティカルケーブルとも、長距離の引き回しが可能で、ケーブル自体の重さもアナログマルチケーブルのような重さはなく、データ伝送の恩恵による少ない本数で膨大な ch を扱える点を挙げていました。劣化せず設置も容易、アナログ伝送に比べ遥かにコストや手間を省け、将来性を感じました。

音声伝送と一言で言っても、AoIP を使った転送には多くの規格があり、使用するプロトコルの Layer 間には互換性が少なく、ハードウェア開発者のインタビューを読んでも、同一の Layer でない限り対応が難しいと言及していました。そのため、複数社の機材でシステムを組み上げる自由度はまだ低いと思います。ただ、現在でも Avid 社の Digilink との接続オプションや Ravenna と Dante のコンバーター等、挙げられなかった部分でも伝送システムとしての拡張性に進歩があり、期待もあります。

多 ch を２～４U で扱うことのできる運搬のしやすさの点でも、高品質のレコーディングを簡易に可能にする AoIP での音声伝送システムをスタジオに持ち込み、使用できる点も魅力的です。他にも一般的な I/O 接続の方法として AoIP の技術を利用して thunderbolt ポートなどがない、既に使用されている場合でも、ほぼ全ての PC に搭載されている Ethernet で動作可能な汎用性の高さなど、様々な領域を担う可能性もあるのではないかと思いました。

平成 26 年度通常総会＆懇親会レポート

＜通常総会＞

６月６日（金）、JAPRS は港区元赤坂の明治記念館１Ｆ「千歳の間」において、平成 26 年度通常総会を開催し、平成 25 年度の事業報告書（案）決算報告書（案）、平成 26 年度事業計画書（案）及び収支予算書（案）、役員全員任期満了による新役員の選出について正会員に諮り、全ての議案が異議なく全員一致で承認された。

はじめに、佐藤事務局長が定足数の確認を行い、書面表決書を含む 39 名の出席数を確認（定足数）、総会の開会を宣言した。

続いて内沼会長が議長に当たり、議事録署名人として副会長の石野 和男氏、専務理事の清水　三義氏の両名が選出された。

次に石野副会長より第１号議案「平成 25 年度事業報告書（案）」及び佐藤事務局長より「収支決算報告書（案）」について説明が行われ、審議の結果、異議なく全員一致で承認された。

続いて石野副会長より第２号議案「平成 26 年度事業計画書（案）」及び佐藤事務局長より「収支予算書（案）」について説明が行われ、審議の結果、第１号議案と同様に全員一致で承認された。次に議長より第３号議案「役員全員任期満了による新役員の選出」について経過が説明され、同様に全員一致で承認され、最後に議長である内沼会長が閉会を宣し解散した。

＜懇親会＞

内沼 会長

経済産業省
望月 孝洋 氏

通常総会終了後、18：30 より明治記念館１Ｆ「末広の間」において、正会員、準会員、賛助会員及び招待者を含む 83 名が集い、懇親会が開催された。

司会進行は総務委員会の江下規彦氏（ヴァストミュージック・エージェンシー）と茂木泰佑（個人会員）氏の２名が担当し、内沼会長の開会の挨拶に続き、経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長補佐　望月 孝洋氏により来賓代表として挨拶が述べられた。

続いて乾杯となり、恒例により本年から準会員として新たに入会された 合同会社 SIGN SOUND 会員代表者、井本　光紀氏と（株）丸二商会会員代表者、内藤　重利氏により乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなる。

更に歓談が続くうちに中締めの時間となり、同日の総会において選任された専務理事 高田　英男氏による挨拶が行われ、本年の懇親会も無事に終了となりました。

（株）丸二商会
内藤 重利 氏

（合同）SIGN SOUND
井本 光紀 氏

スタッフとして開宴前より準備にご協力いただいた会員の皆様、有難うございました。

高田 専務理事

第 15 回 JAPRS 新プロ・エンジニア養成セミナーレポート

平成 12 年第 1 回目を開催して以来、今年で 15 年目を迎えたのが、この新プロ・エンジニア養成セミナーです。

専門学校委員会の主催により実施されているこのセミナーは、JAPRS 賛助会員加盟専門学校 18 校の 2 年生以上を対象として、東京地区、大阪地区正会員スタジオの協力により継続されているもので、プロのレコーディングスタジオにおけるセッション開始前のスタジオセットアップおよびミックスダウン･デモを体験させることを主目的としています。今回は、6 月 7 日（土）～6 月 14 日（土）の期間で東京地区 1 日 2 回、大阪地区 1 日 1 回開催。

実施内容

①アシスタントエンジニアによるスタジオブースの説明
②アシスタントエンジニアからのアドバイス
③ミックスダウンのセットアップ
④ミックスダウン・デモ
2ch バランス・2ch メーターの確認　EQ の使用方法　DYN・INS 系の使用方法
クロス・パッチ等　AUX 系のエフェクタ・バランス トータル処理の方法

東京地区会場（6 月 7 日（土）於：サウンドインスタジオ Bst）
参加者：8 校 44 名
エンジニア：吉田　保 氏
アシスタントエンジニア：原田　潤也 氏
サポート：稲垣　杏里 氏

大阪地区会場（6 月 14 日（土）於：スタジオグルーヴ Ast）
参加者：2 校　12 名
エンジニア：吉田　保 氏
アシスタントエンジニア：松嶋　毅之 氏

タイムスケジュール

東京会場：サウンドインスタジオ Bst
6 月 7 日（土）
1 回目　13：00 ～ 15：15
2 回目　15：30 ～ 17：45

大阪会場：スタジオグルーヴ Ast
6 月 14 日（土）
1 回目　13：00 ～ 15：15

第 13 回 JAPRS 認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告

７月６日（日）、札幌、仙台×２、新潟、東京×８、名古屋×３、大阪×３、広島、那覇の９地区 20 ヶ所の団体受験会場に分散して実施された「第 13 回サウンドレコーディング技術認定試験」については、当初の受験申請者数 768 名に対し、欠席者 87 名を除く当日の受験者数 681 名の参加により実施されました。

試験内容は例年通り四者択一マークシート方式で、音響の理論 / 電気音響とスタジオシステム/レコーディング技術と先進技術/音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史などの４ジャンルから各 25 問（計 100 問、1000 点満点）が出題されましたが、平均点は 708.8 点という結果になりました。以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

専門学校東京ビジュアルアーツ

経専音楽放送芸術専門学校

（１）受験申請者 768 名　欠席 87 名　受験者 681 名
　　最低点 250 点　最高点 1000 点（9 名）　平均点 708.8 点

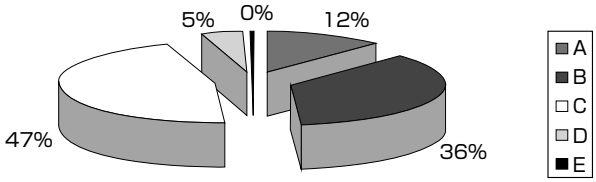
（２）平均点詳細（各ブロック 250 点満点）
　Ⅰ. 音響の理論
　　正答率　77.6%　平均点　194 点
　Ⅱ. 電気音響とスタジオシステム
　　正答率　68.0%　平均点　170 点
　Ⅲ. レコーディング技術と先進技術
　　正答率　75.7%　平均点　189 点
　Ⅳ. 音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史など
　　正答率　62.2%　平均点　156 点

（３）得点別人数

1000 ～ 900	92 名
890 ～ 800	112 名
790 ～ 700	151 名
690 ～ 600	156 名
590 ～ 500	114 名
490 ～ 400	48 名
390 ～ 300	7 名
290 ～ 200	1 名
0	0 名
計	681 名

（４）ランク別人数

Ａランク	1000 ～ 901 点	85 名
Ｂ　〃	900 ～ 701 点	248 名
Ｃ　〃	700 ～ 451 点	316 名
Ｄ　〃	450 ～ 201 点	32 名
Ｅ　〃	200 点以下	0 名
計		681 名



ハイレゾ音源制作技術セミナーレポート part.1

深田 晃

7月25日東放学園音響専門学校において「ハイレゾ音源制作技術セミナー」が開催され、私は「ハイレゾリューション・レコーディングの新たな可能性について」というタイトルでお話をさせていただいたので、その内容を以下に紹介する。

１．オーディオの歴史と背景

1957年のLPレコードの発売から25年後の1982年音楽CDが発売、さらに25年後の2007年から音楽配信が本格化した。メディアの変遷は約25年の周期で起こっているようである。一方テクノロジーの発展は高音質化への道でもあったが、配信は当初音源の圧縮という高音質化の逆方向へ向かっていた。しかしここに来て、CD以上の高音質化が求められ、現在ハイレゾ配信という新たな高音質化への模索が始まっている。

ハイレゾの配信はファイルベースで行われているがプロの制作現場は2000年頃から.wav形式でのデータのやりとりが行われるようになり、我々はCDやSACDというパッケージだけでなくデータという形式に対する違和感は少なくなっていた。制作現場の機器もより高音質化が進み、コンシューマ機器も高品位なD/Aコンバータが多数発売されるようになり、ハイレゾ録音再生が本格化した。

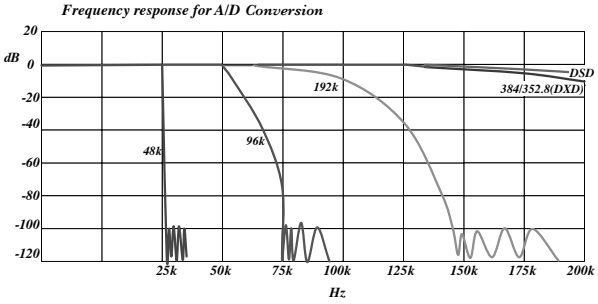
深田 晃 氏

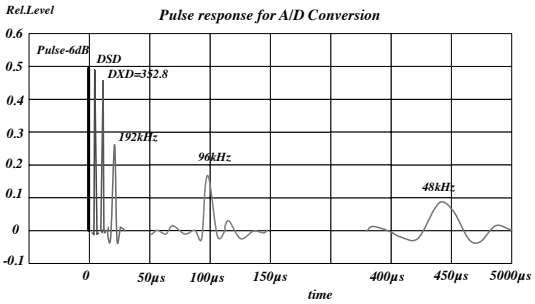
２．ハイレゾとは何？

ハイレゾが注目される中、オーディオ協会や民生機器メーカの集まりであるJATA等が相次いでハイレゾの定義を決めている。しかし我々は制作者としてハイレゾというものを認識しておく必要がある。ハイレゾはCDを基準としてそれ以上の解像度（ダイナミックレンジや周波数特性）を持つものを言うと思う。現在ではPCMでFs=384kHzや1bit ΔΣ方式の256Fs=11.2Mの録音も可能になった。ちなみにDSDは商標であり、この音声記録方式は1bit ΔΣ方式というのが正しいと思う。そしてPCM vs 1bitという議論がよく見受けられるが、それぞれ音の特徴がありどちらが音が良いと言う事は言えない。

３．なぜハイレゾなのか

Fsが96k,192k,384kと高くなる利点は周波数特性だけでなく、インパルスの立ち上がりのスピードが上がることにある。また、一つの波形を形成するために用いられるサンプル数も多くなる。この事は音楽信号をより正しく伝えることに貢献する。すなわち20Hz～20kHzの帯域の音がよくなるということを意味している。





Digital Audio Denmark社の資料より

４．1bit ΔΣの特徴

最近 1bit ΔΣ（DSD）が話題に上ることが多いのでその特徴を解説する。

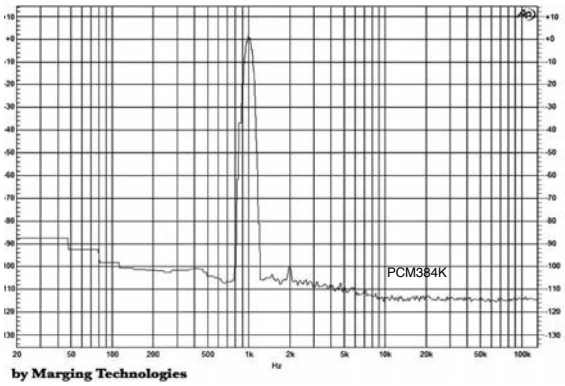
a. 原理的に編集、加工、ミキシングができない。マルチトラックで録音した場合はアナログ卓で加工するしかない。（編集ができるとしているものは全て PCM で処理を行っている。）

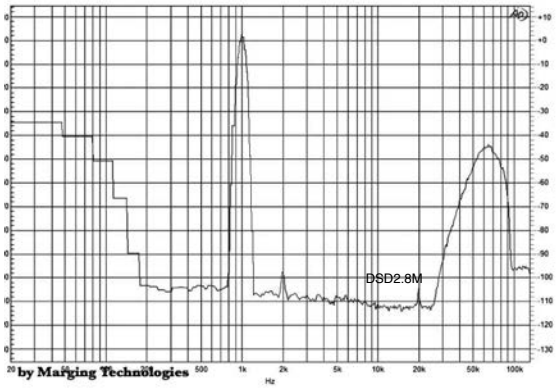
b. Pyramix の開発元である Merging Technologies 社は SACD 開発時、SONY 等と編集をするために DXD を開発し（Fs352.8kHz/24bit の PCM）このモードで録音、編集後 1bit に変換しても DSD 録音であるとした。

c．1bit ΔΣは低音域と高音域にノイズがあり、高域では 40kHz 付近からフィルターでノイズを除去しなければならない。また、ダイナミックレンジが周波数により変化する。

d．スタジオ制作の通常のワークフローでは使用することが不可能であるが、ダイレクト録音や編集を必要としない録音では用いることが出来る。

下図は PCM（Fs384kHz）と 1bit ΔΣ（2.8M）との特性の比較である。





５．天上のオルガンの制作例

ハイレゾ配信のために昨年「天上のオルガン」を制作した。オルガンは建築物と一体であり、建物の固有の響きとともにオルガンの音を捉えようと計画した。

録音フォーマットは現在録音できる最高のフォーマットである Fs=384kHz/32bit で行った。

その理由は

(a) 192/24 で配信を行ってもマスターとして上位フォーマットを持てる。

(b) 1bit ΔΣに変換しても充分な特性を持っている。という２点からである。

録音機材は Merging Technologies 社の Horus と Pyramix を用いた。Horus は Ravenna と呼ばれる Audio over IP で動作し、Ethernet を用いてパケットでデジタルデータを送るためジッターのない信号伝送が可能である。

Muza 川崎と聖グレゴリオの家の空間の違い、オルガンの違いを表現出来たと感じている。

６．1bit ΔΣ 5.6M と PCM192/24bit での JAZZ のダイレクト録音素材の試聴

Jazz のピアノ・トリオをダイレクトミックスで、PCM192/24 と 1bit ΔΣ 5.6M でレコーディングした素材を試聴した。人によって感じ方が異なるのが興味深かった。

ただ、スタジオで試聴するとフォーマットの違いによる音の変化はかなり大きいと思った。

７．Audio over IP について

「天上のオルガン」で用いた Audio over IP について簡単に解説する。

特徴としては

a. 接続性：Network 上の信号は接続された全ての機器で受け取ることが出来る。つまり従来の 1:1 の接続ではなく複数の回線を自在にマトリックスルーティング可能となる。
b. １本のケーブルで多チャンネルを高品位のまま長距離伝送できる。
c. 様々な規格があるが、AES67-2013 が策定され、今後統一化への動きが起こる。
d. Ravenna は AES67 の上位フォーマットであり、基本は同じであるが、Fs384kHz や 1bit ΔΣ 11.2M 等の伝送も可能。
e. Ravenna はショップスやノイマンなどのマイクメーカ、Lawo や Calrec などのコンソールメーカ、Genelec などのスピーカメーカも対応を表明しているので将来は音の入り口から出口まで Ethernet での伝送が用いられるかもしれない。

８. ハイレゾ制作で最も重要なこと

ハイレゾの目的はなんといっても音楽の魅力が増すことであり、今まで聞こえなかった微妙な音が鮮明になることで音楽の本質を今まで以上に知ることができることだ。

スペックやフォーマットはそれを実現するための手段であり、フォーマットによる音の違い等にあまりこだわるべきではないと思うが、制作者はフォーマットや特性については充分に理解している必要があると思う。

サラウンドが始まった頃には音響的な面白さのみに着目した製品も発売されたが、そういったものはすぐに飽きられてしまった。現在はハイレゾということで音楽よりもオーディオ的な志向の作品が同じように制作されている。しかし我々が感動する音楽をより充実したものにすることを目指した作品でなければ長く聴き続けられることはないだろう。

コンサート会場で音が始まる瞬間、聴衆が集中する気配、演奏家同士のインタープレイの中に生まれるある種の気持ちの連続性、「気」とも言えるものが解像度を高めていくことによって捉えられるかもしれない。もしそうであればそこに音楽を聴く新しい喜びが生まれるに違いない。また、解像度が高まることによって、今まで聞こえないものを聞こえるようにするために用いていた EQ や Comp と言った処理は少なくて良くなるだろう。そしてマイク自体の数も少なくなっていくのではないかと想像する。

ハイレゾ制作はマイキング等の録音手法、マスタリング手法等全てに影響を与えるだろう。その結果、音楽制作者の地位、録音制作の価値がより上がっていくなら喜ばしいことである。

ハイレゾ音源制作技術セミナーレポート part.2

名古屋芸術大学　音楽文化創造学科
准教授　長江 和哉

1. ハイレゾレコーディングの利点とその考え

• 88.2kHz 24bit 以上で録音すると 40kHz 程度の高域が再生されるだけでなく 20Hz-20kHz の可聴帯域の再現性が格段に向上するという利点がある。（図１，２）

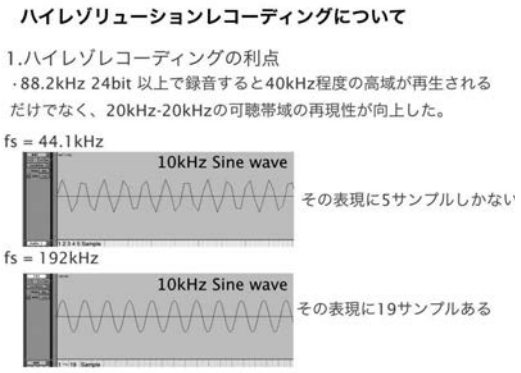


図１

図２

長江 和哉 氏

- 今後 CD ではなく Web 配信によりそのデータはそのままコンシュマー再生機まで届く。
- 従来は大規模システムが必要であったが低廉化した。

2. それらを生かすには、

- 感動が伝わる優れた演奏をハイレゾで記録することが重要。
- 収録のどの過程で音が変化（劣化）してきたかを検証することにより、よりクリアで躍動感溢れる収録につながる。特に、アナログマルチでの音質劣化は MADI などのデジタル転送により音質劣化なしに収録することができる。（図 3）
- マイクアレンジなどの技術はもちろん、プロデュースワークが重要となる。

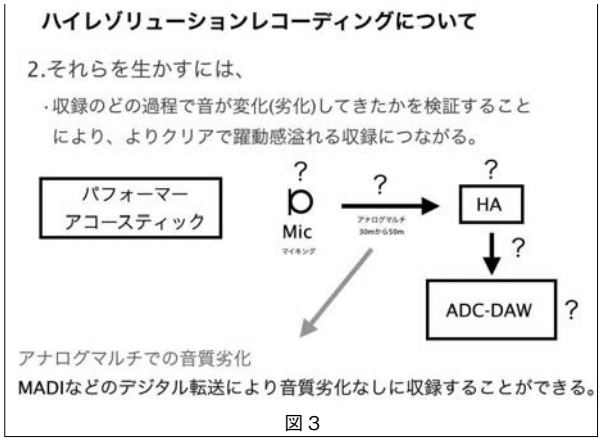


図３

3. MADI との出会いとドイツでの使用事例

- 1949 年から 65 年間にわたり音楽大学でのトーンマイスターとよばれる、録音プロデューサーと録音エンジニアの両方をかねそろえたスペシャリストを養成する教育の歴史があり、約 130 のプロオーケストラが活動するドイツで、放送、録音、音響に関わるサウンドエンジニアの多くがディプロムトーンマイスター（Dipl Tonmeister）である。
- その背景があり、音が変化する要因について深い理解がある。
  演奏、ディレクション、アコースティック、マイク、ケーブル AD-DA、DAW、エフェクト、エディット、ミキシング、マスタリング、電源などの要因があるが、その中でも、重要なものは、演奏とディレクション、アコースティック、マイクである。
- そのために AD-DA や DAW はトランスペアレントなものがふさわしい。
- マイクレベルで長距離転送すると信号が劣化するのでマイクの近くに HA ADC を設置し MADI 転送する。

4. MADI 機器導入とシステム紹介

- 実際に使用している収録システムについて説明を行った。

5. MADI 転送とアナログマルチケーブル転送の比較

以下、２つの比較音源を用い、MADI 転送とアナログマルチ転送の比較試聴を行った。

- 2013 年２月ベルリン・イエスキリスト教会　弦楽トリオのセッションレコーディング
  メインマイク出力を Micstasy に入力、MADI 経由で録音した音源と、Micstasy のダイレクトアウトをアナログマルチ 50m を経由して Octamic II で収録した音源の比較

- 2013 年６月名古屋　しらかわホール　オーケストラレコーディング
  メインマイク出力を Micstasy に入力し、MADI 経由で録音した音源と、Micstasy のダイレクトアウトを数百メートルのパラ接続された会館マルチを経由し、もう一台の Micstasy で収録した音源の比較。

6. 録音事例の紹介

以下、３つの MADI を使用した録音事例について紹介をした。

- 飛騨高山ヴィルトーゾオーケストラ コンサート
  2013 年６月１日　飛騨芸術堂

- チコ本田氏 ライブレコーディング
  2013 年９月 14 日（土）15 日（日）名古屋 Jazz inn Lovely

- 秋山和慶氏指揮中部フィルハーモニー交響楽団
  2014 年５月 20 日　三井住友海上しらかわホール（写真１～４）

写真１

写真２

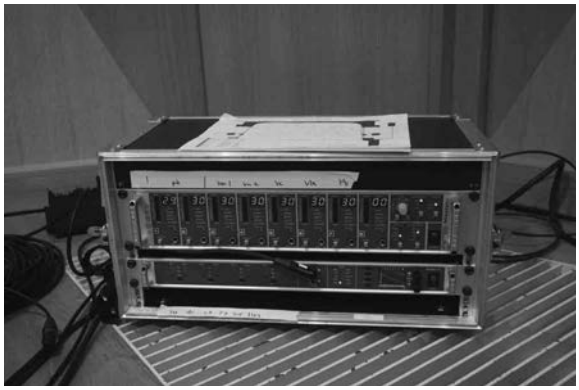


写真３

写真４

7. まとめ

- ハイレゾレコーディングでは、音質劣化がないように機材をルーティングすることで、そのフォーマットを生かすことができる。また、技術のみではなく、どのように感動が伝わる優れた演奏を引き出すかというプロデュースワークが重要となる。

- ホール収録など、マイクの長距離伝送が必要な場合、MADI を用いるとシステムも省力化され、さらに音質劣化がなく収録できる。

- 省力化
  →運搬作業効率の向上と仕込時間の短縮。
  →バックアップシステム構築の容易さ。
  → 48kHz=64ch / 96kHz=32ch / 192kHz/16ch を 1 本のケーブルで転送。
  →機材のセッティング時間も少なくなり、マイクアレンジや演奏者とコミュニケーションする時間を増やすことができ、よりよい録音作品につながる。

- 高音質
→マイクレベル転送距離が短くなりマイク信号の鮮度を維持。
→→ハイレゾ収録にふさわしいロスレス転送。

ハイレゾ音源制作技術セミナーレポート part.3

日本音楽スタジオ協会　技術委員長
高田 英男

高音質をテーマとしての技術セミナーは一昨年度「ハイレゾ配信の現状」、昨年度「パッケージメディア高音質の現状」をテーマとして開催、今年度のテーマとして音楽制作現場で活躍されているエンジニアの協力を得て、「ハイレゾリューション・レコーディングの新たなる可能性について」をテーマとする技術セミナーを実施した。

日　時：　平成 26 年 7 月 25 日（金）
場　所：　東放学園音響専門学校・渋谷校舎3A1教室 & Ast
テーマ：「ハイレゾリューション・レコーディングの新たなる可能性について」

内　容：Ⅰ．①ハイレゾリューション・レコーディングの利点と考え
　　② MADI との出会い　ドイツでの使用例

③ MADI 機器導入～システム紹介
④ MADI 転送とアナログマルチケーブル転送比較
⑤録音事例紹介
⑥纏め
講師：長江 和哉 氏／名古屋芸術大学 音楽文化創造学科 准教授

Ⅱ.「天上のオルガン」ハイレゾリューション・レコーディング紹介
①オーディオの歴史と背景
②ハイレゾとは （定義～音質～特性）
③天上のオルガン制作例
・マイキング
・録音機材～システム
・イーサネット伝送
④纏め
講師：深田 晃 氏／（株）dream window 代表

Ⅲ. ハイレゾリューション・レコーディングサウンド試聴
長江　和哉氏
「飛騨高山ヴィルトーゾ・オーケストラ」
「チコ本田　ライブレコーディング」
「中部フィルハーモニー交響楽団」
深田　晃氏
「天上のオルガン」
「ピアノトリオ」

Ⅳ. ハイレゾリューション・レコーディング機材紹介
講師：坂本 有紀 氏／（株）シンタックスジャパン ジェネラルマネージャー
柳瀬 智史 氏／ DSP ジャパン（株）代表取締役
齊加 博和 氏／ミックスウェーブ（株）代表取締役

Ⅴ. 質疑応答

高田 技術委員長

・ハイレゾ音源制作技術セミナー報告
＊詳細レポートについては各プレゼンターから頂いておりますので、受講者として感想報告です。

・新たな次元に入ったサウンド創りによる音楽感動
ハイレゾリューション・レコーディングと言う音楽制作における大きな武器を手に入れた今、エンジニアとして大きなチャンスと課題を感じている。
深田さんレポートに記載されている「気配」・「気」など音で表現する事が難しい世界までもが、ハイレゾ録音により音楽として伝える事が出来る今、エンジニアとして更なる技術力・感性の高さが要求される時代になっている。
何をもってハイレゾリューションなのかであるが、フォーマット的定義には色々ある

が、スタジオで創り上げたマスターサウンドがそのままリスナーに届く事が基本であると思っている。

マスターサウンドのクオリティーを上げる手段としてハイレゾフォーマットがあり、その器を使いこなすエンジニア力が要求されている。

デジタル技術の進化と並行して音に対する判断力や感性を磨き、海外視野を含めて音楽制作へのチャレンジが今、重要課題であると感じた。

・各システム（フォーマット）による音質について

（個人的見解であり、音質基準が無い中での試聴感想）

①アナログケーブル　／　MADI

アナログケーブル

低域が安定し、聴きなれた素直な音色感であるが解像力が悪く、音の繊細さなどが伝わりにくい。

MADI ケーブル

高解像力でクリアーな音質であるが、中低域が少しやせる感じがした。

② 192kHz/24bit　／　DSD5.6M

192kHz/24bit（ジャズ　ピアノトリオ）

音の立上りが良く、シンバルやアコースティックピアノなど高域の伸びがありスピード感のある音であるが、中低域が少し細く感じた。

DSD5.6M

中音域が充実しており、音のリアル感が非常に高く安定した音質であるが、低域の解像力が少し悪い感じもした。

＊参考

今回のセミナーではありませんが、DSD11.2 Mの音を体験したが、コンソール BUSS OUT に大変近い音色感が印象的であった。

ハイレゾ配信ビジネスが進む中、最先端技術を駆使して音楽制作にチャレンジしているエンジニアからのプレゼンテーションは、非常に刺激を受けたセミナーでした。又、お忙しい中、ハイレゾ機材を持込みプレゼンして頂きました皆様に、この場をお借りし、お礼を申し上げます。

第 11 回 JAPRS 認定「Pro Tools 技術認定試験」実施報告

９月７日（日）、札幌×２、仙台、郡山、新潟、東京×７、横浜、名古屋×２、大阪×３、博多、鹿児島の 10 地区 20 ヶ所の団体受験会場に分散して、「第 11 回 JAPRS 認定 Pro Tools 技術認定試験」が実施されました。本年度の受験者数は、昨年度の 530 名に対して 502 名という結果となりました。団体受験会場として今年も博多、鹿児島地区でも実施されました。

また、今回の試験については、昨年と同様に受験者個々の Pro Tools に関する知識をより明確に把握するために、初級 50 問（500 点）、中級 50 問（500 点）の出題構成とし、それぞれ「Pro Tools 概要」「録音・編集」「ミキシング」「シンク・MIDI・用語集など」に区分された出題としたが、初級問題の正答率は 72%、中級問題については 58.8%、全体的な正答率は 66.2%という結果になりました。以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

東放学園音響専門学校

国際アート＆デザイン専門学校

（１）受験申請者 636 名　欠席 134 名　受験者 502 名
　最低点 190 点　最高点 1,000 点（8 名）　総合平均点 654.6 点

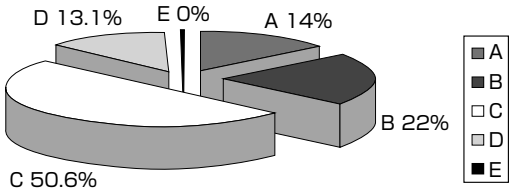
（２）平均点詳細
　初級１（Pro Tools 概要／ 140 点）：101.1 点
　初級２（録音・編集／ 130 点）：99.9 点
　初級３（ミキシング／ 110 点）：70.1 点
　初級４（シンク・MIDI・用語集など／ 120 点）：89.3 点
　◆初級計 360.4 点
　中級１（Pro Tools 概要／ 130 点）：84.2 点
　中級２（録音・編集／ 120 点）：68 点
　中級３（ミキシング／ 120 点）：70.6 点
　中級４（シンク・MIDI・用語集など／ 130 点）：71.4 点
　◆中級計 294.2 点

（３）得点別人数

1000 ～ 900	74 名
890 ～ 800	48 名
790 ～ 700	60 名
690 ～ 600	113 名
590 ～ 500	103 名
490 ～ 400	76 名
390 ～ 300	20 名
290 ～ 200	7 名
200 ～	1 名
計	502 名

（４）ランク別人数

A ランク	1000 ～ 901 点	71 名
B　〃	900 ～ 701 点	110 名
C　〃	700 ～ 451 点	254 名
D　〃	450 ～ 201 点	66 名
E　〃	200 点以下	1 名
計		502 名

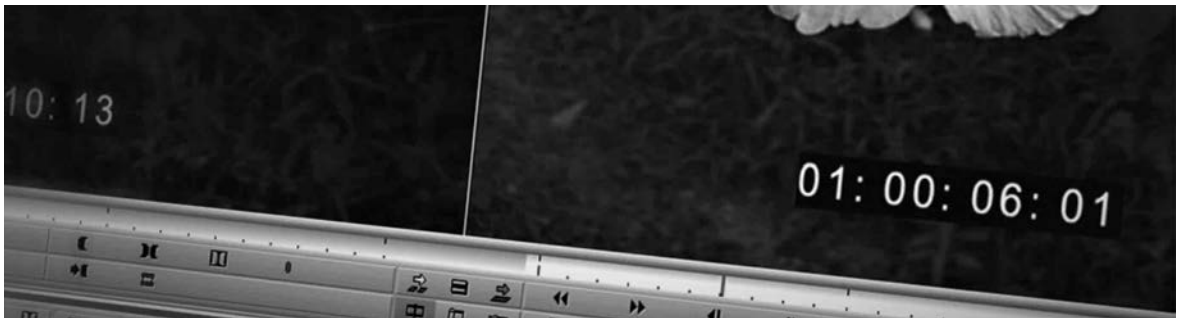


第 5 回 Pro Tools セミナー　レポート

会　場：Media Integration
講　師：赤尾真由美氏、岡田詞朗氏
開催日：2014/09/19

㈱サウンド・シティ
末次 亮介

Video Satellite 基本講座



去る平成 26 年 9 月 19 日、メディア・インテグレーションの ROCK ON PRO セミナールームに於いて 20 名の参加者により「Pro Tools セミナー」が行われました。今回は Avid が提供している「Video Satellite」についての Ver.10 を基本とし、Ver.11 との違いを含めた基本的な内容となりました。大きく分けて 2 部構成となっており、1 部では Video Satellite の概要。2 部では実際に Pro Tools と Media composer を同期させての実演でした。

今回のレポートでは私が感じた Video satellite システムについて記していきます。システム概要、詳細については端折らせて頂きます。

赤尾 真由美 氏

Video Satellite とは Avid が提供している Satellite 機能を利用した新しい同期システムです。まずこれまでと大きく違うのは 9pin や LTC を繋ぐのではなく、通信媒体に Ether ネットワークを使用している所です。そうすることによって、スタジオは既存のインフラを利用する事ができ、比較的容易に Satellite システムを導入する事が出来ます。同期の方法は従来の考え方とほぼ同じで、マスター（以降 admin）とスレーブ（以降 Satellite）に分かれます。admin 側で同じネットワーク内にいる satellite マシンを選択します。

これまでと違う点、メリットとして、同期の on,off、再生、停止を satellite 側から出来るという点があります。例えば従来の様に 9pin や LTC を使った同期の場合、編集連動作業時に新しい映像を受け取った際に、admin 側から同期を解除して、satellite マシンを触って映像を差し替え、また admin 側で同期を on にするという手順をとります。これがなかなかストレスがかかる行程です。何故なら、日本では MA 作業は 2 マンセルで進めていくもので、映像用ワークマシンは基本的にアシスタントがオペレートします。ミキサーが Pro Tools を触っている最中に映像

を差し替えなければいけない状況になった時、アシスタントが一言ミキサーに声をかけ、ミキサーの作業を止めて先ほど記した行程を行う必要があります。それがどれだけストレスになり時間の無駄か現場の方はよくご存知かと思います。しかし今回紹介された Video Satellite システムならば、satellite 側から同期の on,off が可能なのでアシスタントのオペレートだけで全てを完結する事ができます。勿論その時ミキサーの手は止まらないので、とてもスムーズです。

加えて Media composer との satellite の場合、Media composer にプロジェクトを立ち上げておくだけでいいので、従来の様に編集が一段落して MA ワーク用に映像を吐き出す必要がありません。これは編集側にとってもかなりメリットがあります。映像を吐き出している際は編集機は他の操作を受け付けないので、エディターの手が止まる事になります。それが解決されるのと、クライアントにとっても、編集が終わり MA ルームに入ったらすぐに作業が開始できるという利点があります。この場合 Avid の ISIS サーバーを使うのがベストでしょう。

小規模なポスプロの場合は Media composer ではなく Pro Tools を映像ワークとして satellite 使用するのもアリだと感じました。導入コストも大幅に下がり、かつ二台目の Pro Tools として音効さんにあてがえます。

しかし以前とは今のマシンのパワーも比べ物にならない程向上し、Pro Tools11 には Media composer と同じビデオエンジンが搭載されています。これまではマシンの負荷分散の為の別映像ワークでしたが、よほど編集と連動しない限りはこれからはインボックスでもいいのかもしれないという感触もあります。

実際に動作しているのを見た感触としてはとてもスムーズだということでした。9pin や LTC だと Pro Tools を再生してから１～２秒してから同期ロックするというのが限界でしたが、Video satellite だとノータイムで同期されており、かなりストレスフリーだと感じました。加えてこれまで不可能だった Pro Tools のループ再生に瞬時に追従していて同期の精度の高さを表していました。

これからの Video Satellite の運用方法について感じた事は、現状では間違いなくクライアントから MA ルームで編集同時進行を求められるということです。実際に Video Satellite を導入しているポスプロでそういった要求があるが、「出来ない」という事で突っぱねているらしいです。システム、技術的には間違いなくできるのでしょうが……。実際にどこかのポスプロがやり始めたら価格破壊が起こりそうな気がします。

最後に講師を務めて頂いた赤尾真由美氏、進行をしてくださった岡田詞朗氏に厚く御礼を申し上げます。

第25回　ＮＨＫ技術交流会
「ステレオ・ニアフィールド・スピーカー比較試聴」レポート

株式会社フリーダムスタジオ
目等 進

10月4日（土）サウンドインスタジオＡstに於いて、「ステレオ・ニアフィールド・スピーカー比較試聴」をテーマとしたＮＨＫ技術交流会が開催されました。
NHK制作技術センター技術部6名を含めた参加者30名弱の方々を、C/Roomとstudioに区分し、交代で試聴して頂くこととした。

比較試聴の観点から、ひとつは、９種類のモニタースピーカーを同じ素材、同じ音量で聞くことを目的としたC/Roomでの試聴。

もうひとつは、studio内では、視聴者が持ち込んだリファレンス用CD等を様々な音量、距離でモニターする自由度の高い試聴と、試聴の方法を異なったシチュエーションで行いました。

●ご協力を頂いたメーカー／代理店　製品名

１．オタリテック　GENELEC 1031A（ニアフィールドモニターのスタンダードとして基準試聴）
２．コンチネンタルファーイースト　ADAM S3X
３．エレクトリ　RCF MYTHO6
４．メディア・インテグレーション　Focal Solo6BE
５．ミックスウェーブ　Sonodyne SM100ak
６．ゼンハイザージャパン　Neumann KH310A
７．ヒビノインターサウンド　PMC twotwo.6
８．ヤマハ　MSP5studio
９．エムアイセブンジャパン　KSdigital C8-Coax

試聴会に先立ち、JAPRS・高田技術委員長から参加者に対して挨拶があり、次にNHK放送技術局制作技術センター　番組制作技術部　運用・設備管理　小野さんからの挨拶の後、目等から当日の進行を説明し、２班に分かれて試聴会を開始しました。

高田 技術委員長

NHK 小野 良太 氏

C/Roomでの試聴音源として、昨年のプロ録受賞作品から、「ケイコ・リー・シングス・スーパー・スタンダーズ２」、グラミー賞作品「ダクト・バンク／ランダム・アクセス・メモリーズ」、NHKからは、「いきものがかり／風が吹いている」「Yuji Ohno & Lupintic Five／Junpin Dippin」の音源提供を受けました。視聴時間が限られているため、あわただしい試聴とはなりましたが、参加者の方々には満足して頂ける試聴になったと思います。

C/Roomの試聴は、同音量で試聴を行うため、各試聴モニターの前にピンクノイズを使用し、dB計で音量を確認した後、試聴を行いました。各モニターは、ニアフィールドモニターとは言え、出力に差があることは大きさ・重量から歴然としています。出力音量を

一定にしたことは、一部のスピーカーにおいては不利な状況になったかも知れませんが、比較試聴という観点から見れば、公正な評価を得るための手段の一つとも言えます。９種のモニターを同じ音源で、同音量で聞くために、間にブレイク（休憩）も入れずに、１時間半弱一気に聞いて頂きました。一方、スタジオでの試聴は、自由度の高い構成で実施したことから、各リスナーのリファレンス CD や、サンプル CD を様々な音量で聴きながら、モニターのスペックなどの説明を受けていました。

C/Room とスタジオの２セッション併せて３時間弱の詰め込み試聴になってしまいましたが、密度の濃い試聴会になったのではと、自負しています。スピーカーを持ち込んだ各代理店・メーカーの方々も、同じ規模のスピーカー（他社の）を同条件で聞く機会は滅多にないとのことで、興味を持って頂けました。

試聴終了後には、スタジオに集まって頂き、質疑応答をさせて頂きました。

各スピーカーの値段や、Digital 入力の有無、ハイレゾ対応などの質問には、各代理店・メーカー担当者にお答え頂きました。

この様な形で、これだけの種類のスピーカーを試聴出来るチャンスはなかなか無いと思います。企画倒れにならず、無事終了したことに「ホッ」としてますが、この場をお借りして、あらためて賛助委員会・出展社担当の方々と、会場と技術スタッフを提供して頂いたサウンドインの皆様、事務局の方々にも、お礼申し上げます。長時間のご協力、ありがとうございました。

コントロールルーム試聴

スタジオ試聴

第 26 回 JAPRS ゴルフコンペレポート

平成元年よりスタートしたJAPRSゴルフコンペは、昨年まで開催していた千葉県野田市の「紫カントリークラブ」から会場を変更し、総務委員会の主催により本年は10月18日（金)、神奈川県厚木市の「大厚木カントリークラブ・桜コース」において、JAPRS内外29名の参加者により、実施されました。

当日は7:51スタートのため、集合時間が早朝の7:00となりましたが、無事全員が集合し、受付の後、7:30にクラブハウス前集合となり、コンペ幹事の（株）ソナ萩原一哉氏よりルール等の詳細説明の後、参加者全員の記念写真を撮影後、IN、OUTコースに分かれ、無事にコンペが開始されました。

競技終了後、クラブハウス2Fにおいてパーティーが開催され、本年度の優勝者・吉田保氏（個人正会員）をはじめ、各賞が参加者に渡され、最後に清水総務委員長の挨拶が行われ、無事にコンペ終了。

また、今回初めて外部よりJAPRSコンペに参加されたグローイングアップ・瀧口博達、テイチクエンタテインメント・檜山直樹、レガートミュージック・木尾栄子の各氏に感謝申し上げます。

優勝・吉田 保 氏

＜主な成績＞

優　　勝：吉田　保
準　優　勝：佐藤　尚
３　　位：清水　三義
ベスグロ賞：伊藤　猛
ニアピン賞：加藤　英雄、菊地　功、萩原　一哉
ドラコン賞：高橋　哲也、瀧口　博達、萩原　一哉、檜山　直樹　　（敬称略）

ベストグロス賞・伊藤 猛 氏

JAPRS Dolby Atmos 関連セミナーレポート

日本音楽スタジオ協会　技術委員長
高田 英男

高さを含む３次元的音響表現が可能な Dolby Atmos 関連セミナーを東映株式会社のご協力を頂き実施致しました。

期日　　平成 26 年 11 月 10 日（月）　15：00　～　17：30
会場　　東映東京撮影所　　デジタルセンター　ダビングステージⅠ
　　〒178-8666　東京都練馬区東大泉 2-34-5　　TEL 03-3867-5010
内容
　　１．Dolby Atmos における音響設計
　　講師：株式会社ソナ　　中原　雅考　氏
　　２．Dolby Atmos の概要
　　講師：Dolby Japan 株式会社　中山　尚幸　氏
　　３．東映ダビングステージⅠ　詳細＆ Dolby Atmos デモミックス
　　講師：東映株式会社　　室薗　剛　氏

参加人数　36 名

（株）ソナ・中原 雅孝 氏
Dolby Japan（株）・中山 尚幸 氏
東映（株）・室薗 剛 氏

セミナー報告
• 詳細は各プレゼン資料を参照

セミナー概要
１．Dolby Atmos システムとは
　Atmos システムは天井にスピーカーを設置し、立体的３次元の音場空間表現が可能なシステムであると同時に、劇場再生スピーカーのどこにでも音源を定位する事が可能なシステムである。具体的な音場空間創りとして、Bed（従来サラウンドチャンネルに近い）基本の音場空間定位を創り、その空間に Object（位置情報）をピンポイントにて音源移動の軌跡データとをレンダリングし、高さを含む３次元立体音場空間を創るシステムである。
　更に Dolby Atmos で創られたデータは自動的に 5.1ch、7.1ch のサラウンドトラックを生成、最大 128ch 音源を記録し、最大 64 個のスピーカに出力が可能。

２．東映ダビングステージ１　主なシステム
　・コンソール　AVID System 5 Hybrid（72Faders）
　・プロツールス　HDX2 ver.11 ×５台
　＊Video Satellite のネットワークシステムにより、シンクロナイザーレスの完全同期と互換性を実現。
　＊ダビングステージ内のどの位置からでもプロツールスに同期した映像をコントロール可能。（IHSE 社の KVM を採用）
　・ビデオ　AVID MC Nitris DX
　・スピーカー　東映カスタム制作（天上と壁に 32 本を設置）

＊アコースティックデザイン：sona 中原氏によりハイブリッドディフューザーを採用し吸音と拡散のバランスのとれたダビングステージが完成。
・スクリーン　Seymour Screen Excellence スクリーンによる音の反射や抵抗がほとんど無いスクリーン。
・オーディオプロセッサー　Lake LM26/Dolby RMU

◎正確なモニター環境とストレスの無い操作性を重視し、日本で初めてダビングステージに「ドルビー・アトモス　システム」を導入したスタジオ。

感想

映像（劇場）の世界における立体的表現は、映像の３Ｄ化について、衝撃（凄い！）を受けたが、音のサラウンド化は中々進化しない・・・と感じていた。

今回、東映東京撮影所（デジタルセンター）室薗さんのご協力を頂き、「ドルビー・アトモス」システムが導入されたスタジオでデモ映像を試聴し、音のリアリティーと驚異のサラウンド空間に大いに感動した。

映像を伴ったドルビー・アトモスの世界は新たな映像世界を創り出す力を感じ、更にホームシアター・オーディオの世界に繋がって行くと、音楽ソフトにおける新たなサラウンドソフトの可能性は・・・・・又、音楽制作に携わっているエンジニアの感性で、ドルビー・アトモスシステムを使った劇場サウンド音楽～音楽ソフトへの音創りは、などサラウンドサウンドにおける新たなノウハウは、次世代のビジネスチャンスにもなって来るのではと、感じた次第である。

お忙しい中、皆様のご協力を頂き Dolby Atmos セミナーが実施出来ました事、感謝申し上げます。又、ハイレゾレコーディング制作～サラウンドサウンドに精通され、東映デジタルセンター　ダビングステージで実際にミキシングを体験された dream window inc. 代表　深田　晃氏に 3D 音響についてコメントを頂きましたので、併せて掲載致します。

3D 音響について

今、Dolby Atmos をはじめ Auro-3D,IOSONO など３Ｄオーディオに関する様々なフォーマットが出現している。3D オーディオで論じられているキーワードは､｢Immerseve｣=没入感である。音の存在を感じず、その音の中に無意識で入ってしまうような音響、それが 3D オ－ディオが目指す世界であると思う。

特に映像と一体となった時本当にその世界に入り込めるという可能性を 3D オーディオは秘めている。

Dolby Atmos と Auro-3D が始まったころは多少コンセプトの違いがあったが、ここに来て Auro-3D もオブジェクトという言葉を使い始めている。
AES をはじめ様々な学会でも 3D オーディオについて議論されていて、今後はチャンネルベースからオブジェクトベースへ向かうであろうと言われている。従来のチャンネルを主体（スピーカのポジションが決まっていてそこに必要な音を当てはめて行く。）からオブジェクト（目的に応じてスピーカを使う。）という考えに変わりつつあるのである。音の表現ということを第 1 に考えると確かにチャンネルに音を割り当てて行くよりも必要に応じて必要な音をオブジェクトとして扱い表現するという考え方の方が自然であると思う。

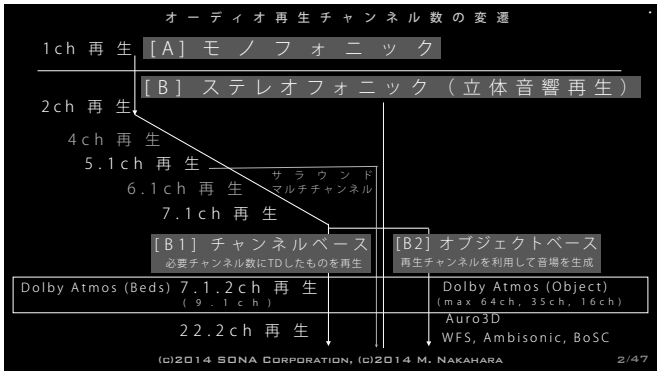
それでは音楽という分野での 3D オーディオの可能性とはいったい何であろうか？
高さ方向（ハイトチャンネル）の表現は臨場感をよりリアルに実現できる事が様々な実験によって実証されている。しかしそれだけでなく、大きなアドバンテージだと感じるのはチャンネルセパレーションだと思う。従来の 5.1ch は映画館のような大きな空間ではリア LR はサイドから後方にかけての大きな固まりとしてのチャネルであった。しかし Dolby Atmos では一つ一つのスピーカを独立してコントロールできる。音の出るスピーカを特定できることは音楽の立体表現には大きな力を持つのではないだろうか。
Dolby Atmos や Auro 3D は 9.1ch がベースになっている。従来の 5.1ch+ ハイト 4 ch である。
9.1ch の再生環境を持つスタジオはまだ少ないが、9.1ch で音楽のどのような表現が可能であるのかは我々が今後研究して行かなければならない課題でもある。
特に映画音楽の制作に関わる人々は従来の 5.1+ の可能性と表現の幅について考察しておかなければならないと思う。

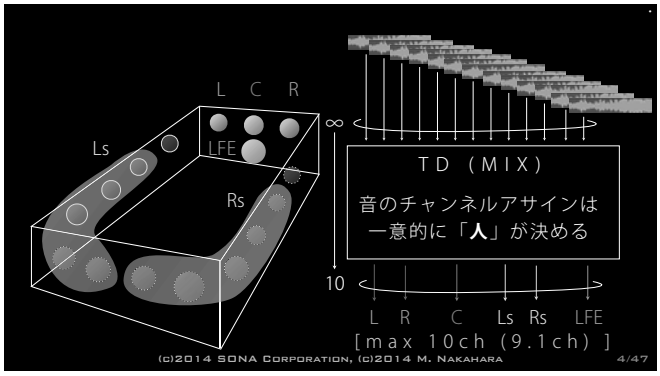
ドイツ・バイエルンではバイエルン放送の子会社が今年 IOSONO を搭載した音声中継車を制作し今後稼働して行こうとしている。IOSONO は WFS（Wave Field Synhesis= 波形合成）を応用した 3D 技術で数多くのスピーカを壁面天井面に配置し波形合成技術で立体的な音声を構築していく技術であるが、この場合は全ての音がオブジェクトであると考えられる。

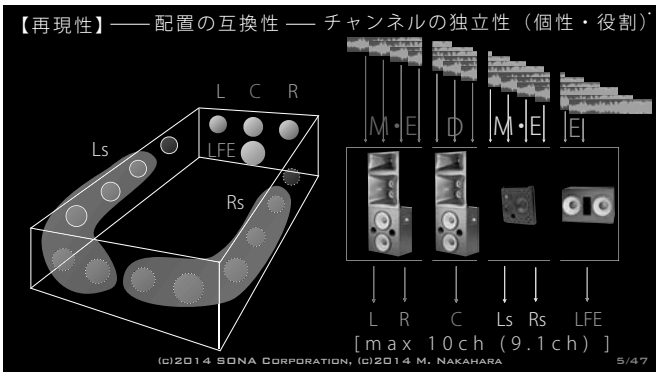
Dolby Atmos に限らず、音声表現の技術動向を常に学んで行く事が、今後我々のビジネスにも重要な力になると思われる。
音楽には関係のない世界という事ではなく、その可能性と表現の幅を身につけて行く事はエンジニアとして重要な事であると思う。
JAPRS としても様々な機会を通じて新しい技術動向について紹介して行きたいと考えている。

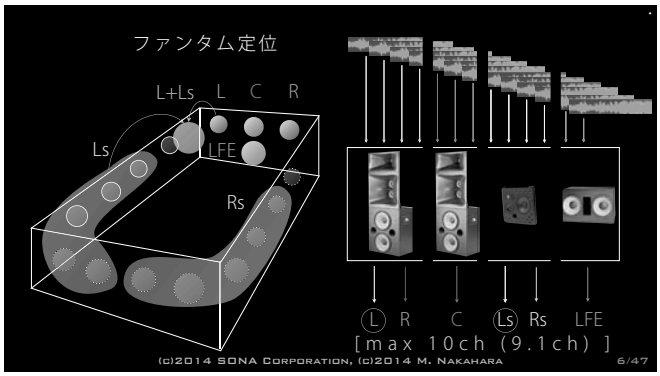
深田 晃

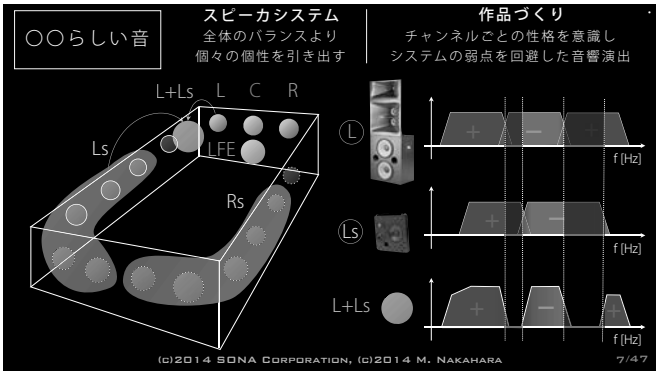
1．Dolby Atmos における音響設計関連資料

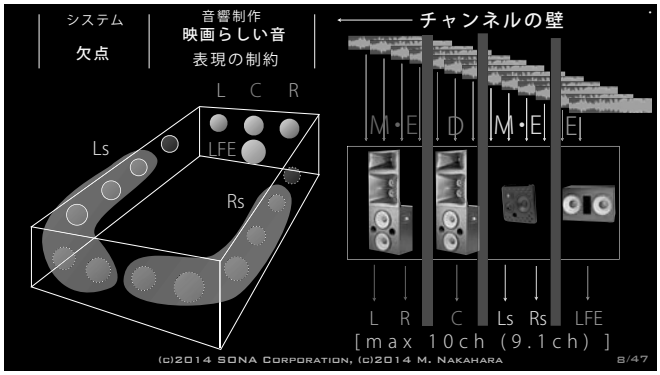


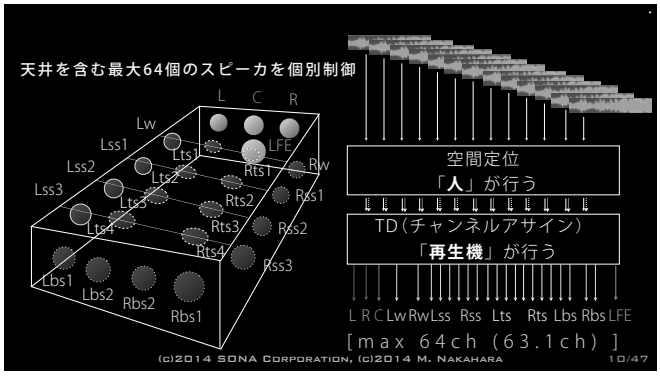


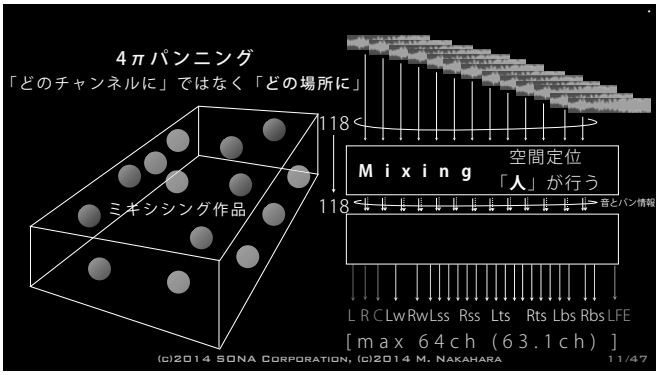


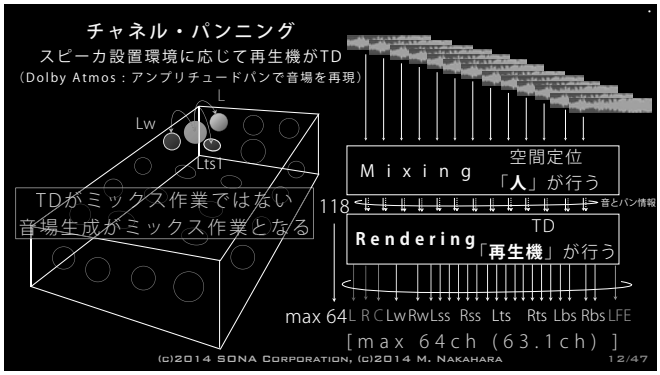


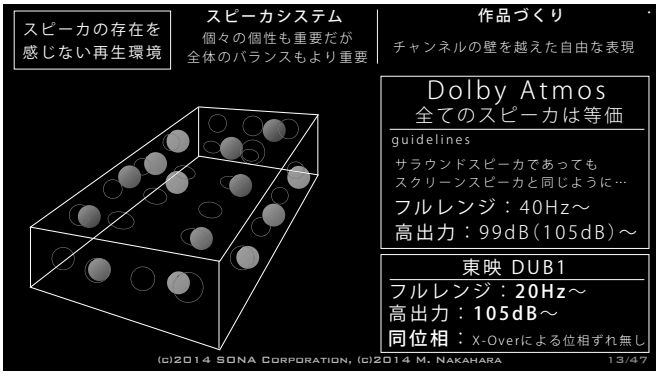


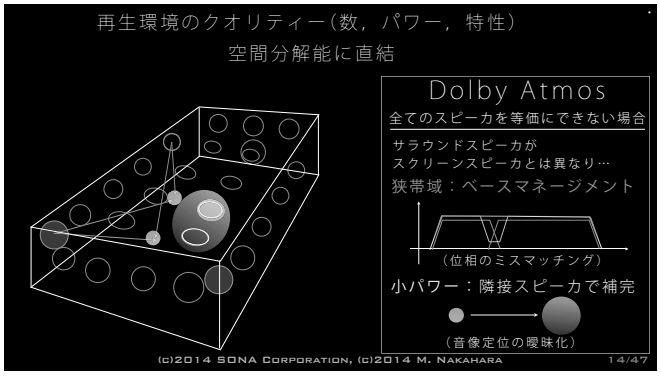


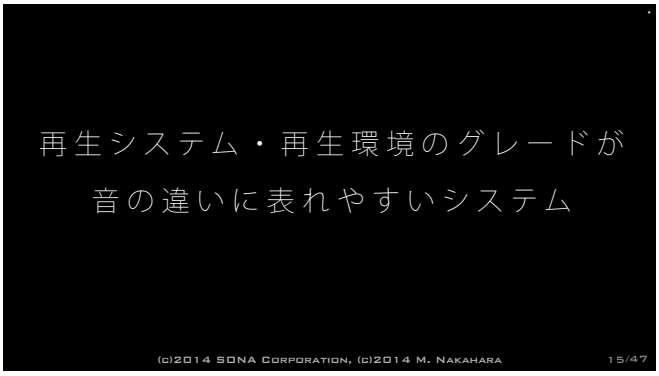


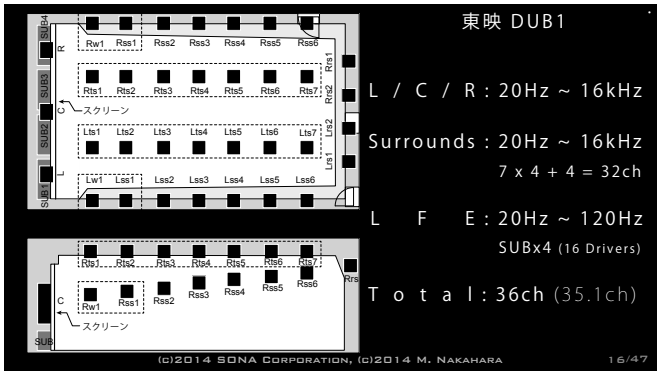

4πパンニング
「どのチャンネルに」ではなく「どの場所に」
118
Mixing
空間定位
「人」が行う
ミキシング作品
118
音とパン情報
L R C LwRwLss Rss Lts Rts Lbs Rbs LFE
[max 64ch (63.1ch)]
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
11/47

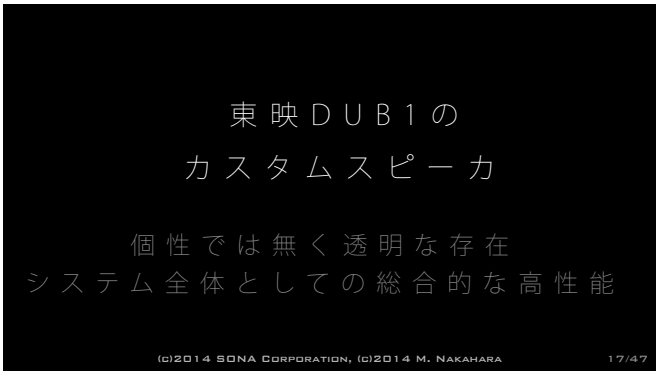

チャネル・パンニング
スピーカ設置環境に応じて再生機がTD
(Dolby Atmos：アンプリチュードパンで音場を再現)
L
Lw
Lts1
TDがミックス作業ではない
音場生成がミックス作業となる
Mixing
空間定位
「人」が行う
118
音とパン情報
Rendering
TD
「再生機」が行う
max 64
L R C LwRwLss Rss Lts Rts Lbs Rbs LFE
[max 64ch (63.1ch)]
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
12/47

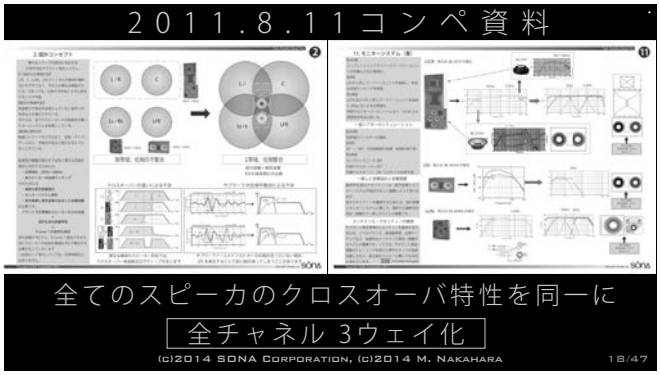

スピーカの存在を
感じない再生環境
スピーカシステム
個々の個性も重要だが
全体のバランスもより重要
作品づくり
チャンネルの壁を越えた自由な表現
Dolby Atmos
全てのスピーカは等価
guidelines
サラウンドスピーカであっても
スクリーンスピーカと同じように…
フルレンジ：40Hz～
高出力：99dB(105dB)～
東映 DUB1
フルレンジ：20Hz～
高出力：105dB～
同位相：X-Overによる位相ずれ無し
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
13/47

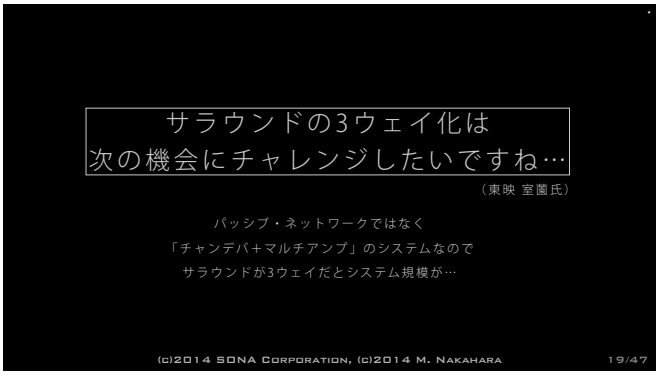

再生環境のクオリティー(数，パワー，特性)
空間分解能に直結
Dolby Atmos
全てのスピーカを等価にできない場合
サラウンドスピーカが
スクリーンスピーカとは異なり…
狭帯域：ベースマネージメント
(位相のミスマッチング)
小パワー：隣接スピーカで補完
(音像定位の曖昧化)
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
14/47

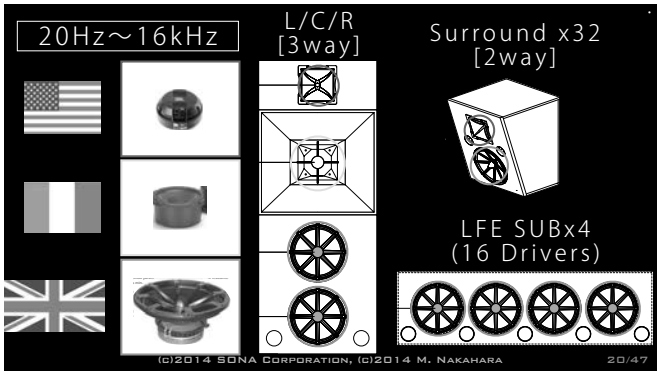

再生システム・再生環境のグレードが
音の違いに表れやすいシステム
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
15/47


東映 DUB1
L / C / R：20Hz ~ 16kHz
Surrounds：20Hz ~ 16kHz
7 x 4 + 4 = 32ch
L F E：20Hz ~ 120Hz
SUBx4 (16 Drivers)
Total：36ch (35.1ch)
スクリーン
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
16/47


東映DUB1の
カスタムスピーカ
個性では無く透明な存在
システム全体としての総合的な高性能
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
17/47

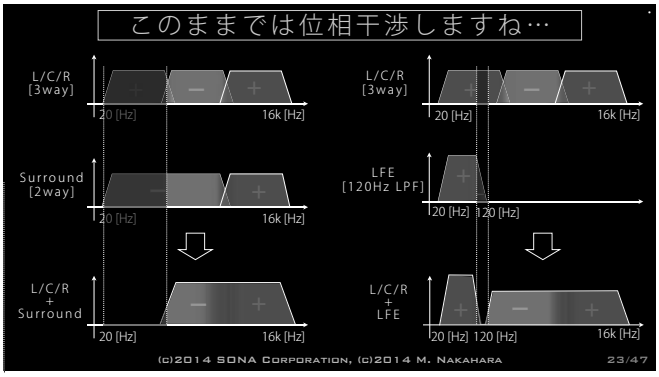

2011.8.11コンペ資料
全てのスピーカのクロスオーバ特性を同一に
全チャネル 3ウェイ化
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
18/47

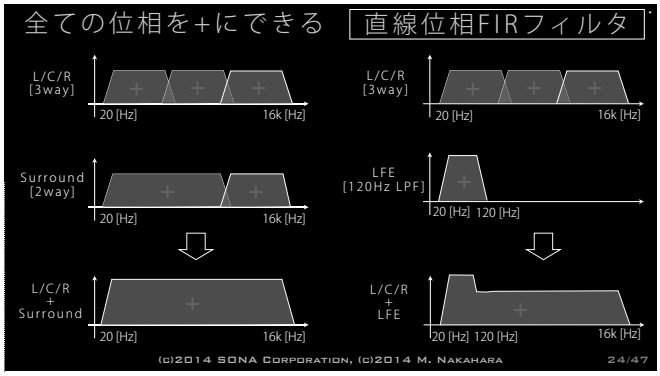

サラウンドの3ウェイ化は
次の機会にチャレンジしたいですね…
(東映 室薗氏)
パッシブ・ネットワークではなく
「チャンデバ+マルチアンプ」のシステムなので
サラウンドが3ウェイだとシステム規模が…
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
19/47


20Hz～16kHz
L/C/R
[3way]
Surround x32
[2way]
LFE SUBx4
(16 Drivers)
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
20/47

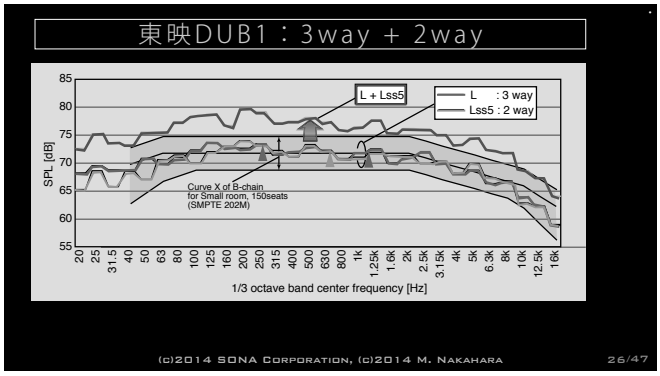
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
21/47

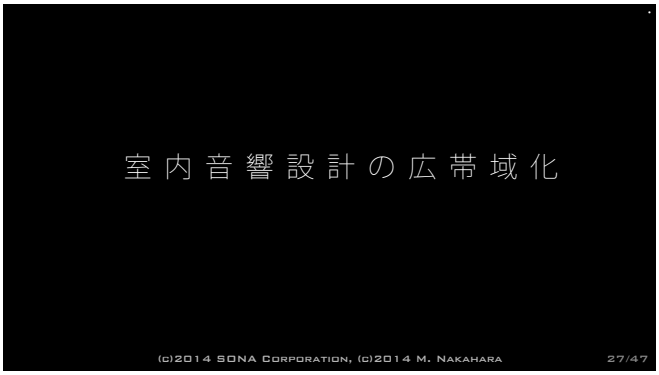
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
22/47

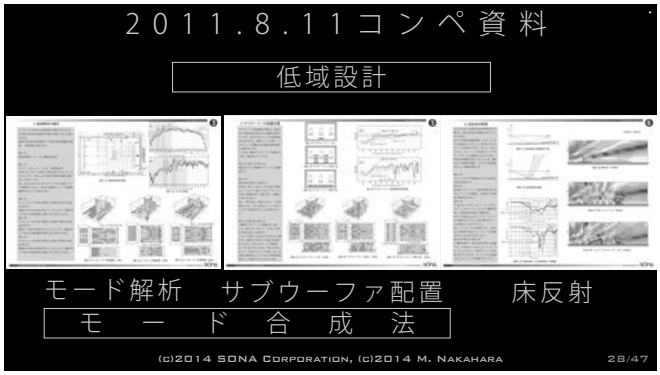

このままでは位相干渉しますね…
L/C/R [3way]
Surround [2way]
L/C/R + Surround
LFE [120Hz LPF]
L/C/R + LFE
20 [Hz]
16k [Hz]
120 [Hz]
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
23/47

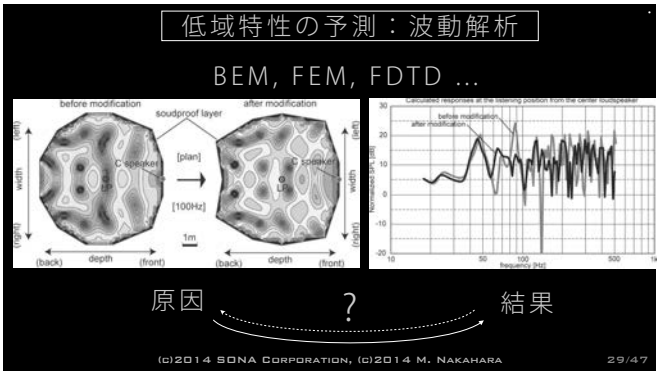

全ての位相を+にできる
直線位相FIRフィルタ
L/C/R [3way]
Surround [2way]
L/C/R + Surround
LFE [120Hz LPF]
L/C/R + LFE
20 [Hz]
16k [Hz]
120 [Hz]
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
24/47

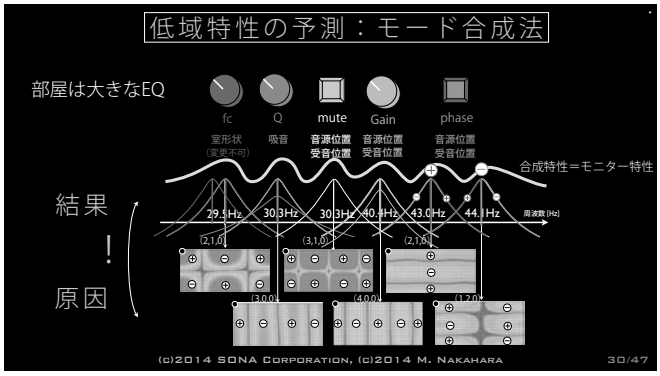
直線位相FIRフィルタ
欠点：遅延
（PCベースの製品だとバッファで更に遅延が大きくなる）
速い FIR
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
25/47

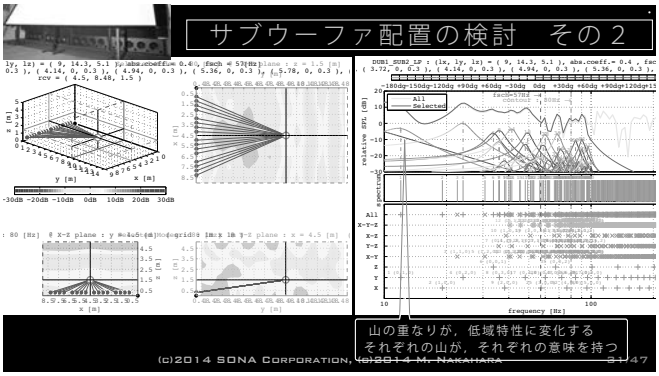

東映DUB1：3way + 2way
L + Lss5
L : 3 way
Lss5 : 2 way
SPL [dB]
Curve X of B-chain for Small room, 150seats (SMPTE 202M)
1/3 octave band center frequency [Hz]
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
26/47

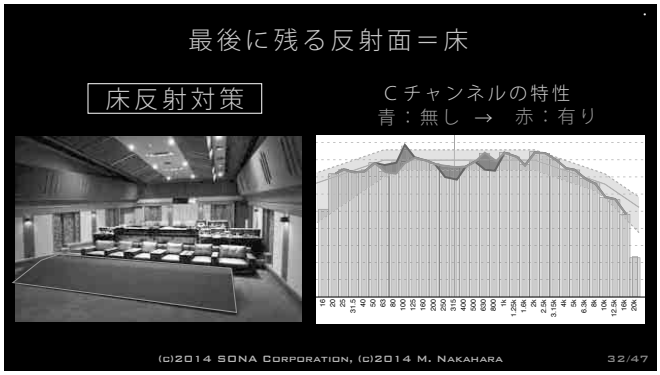

室内音響設計の広帯域化
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
27/47


2011.8.11コンペ資料
低域設計
モード解析
サブウーファ配置
床反射
モード合成法
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
28/47


低域特性の予測：波動解析
BEM, FEM, FDTD …
before modification
after modification
soudproof layer
[plan]
[100Hz]
原因
?
結果
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
29/47


低域特性の予測：モード合成法
部屋は大きなEQ
fc
Q
mute
Gain
phase
合成特性＝モニター特性
結果
!
原因
29.3Hz
30.3Hz
43.0Hz
44.1Hz
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
30/47

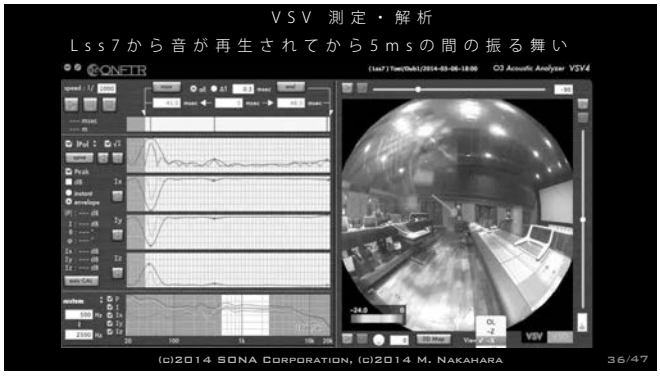

サブウーファ配置の検討　その２
山の重なりが，低域特性に変化する
それぞれの山が，それぞれの意味を持つ
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
31/47

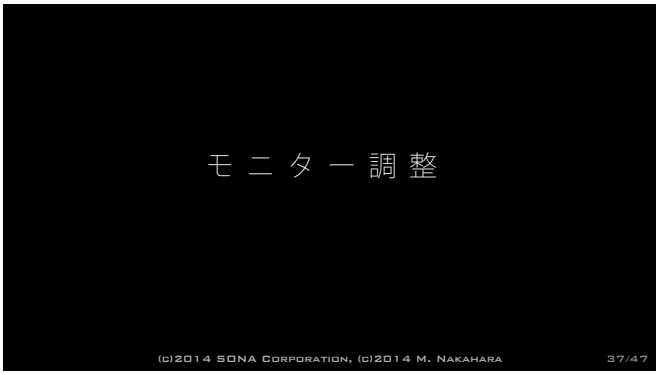

最後に残る反射面＝床
床反射対策
Ｃチャンネルの特性
青：無し → 赤：有り
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
32/47

２０１１.８.１１コンペ資料
高域設計
反射音のコントロール
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
33/47

反射音設計モデル
L/C/R
時間
Surround
（低相関）
時間
スタジオの音響パーツには音響調整幅を有するものが望まれる
音響可変型
ディフューザ
QRD
350Hz~2kHz
+
MLS
3kHz~6kHz
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
34/47

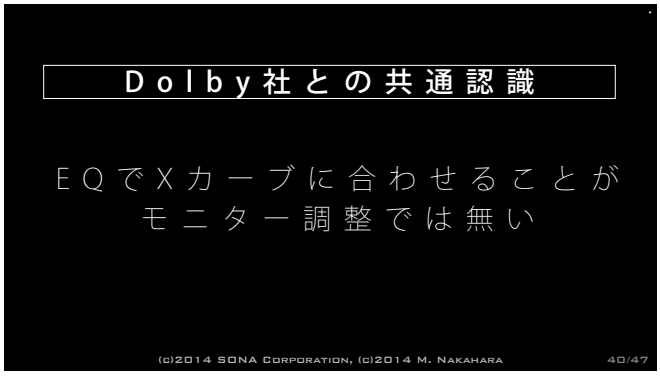
適　材　適　所
Surround
L/C/R
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
35/47


VSV 測定・解析
Lss7から音が再生されてから5msの間の振る舞い
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
36/47


モニター調整
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
37/47

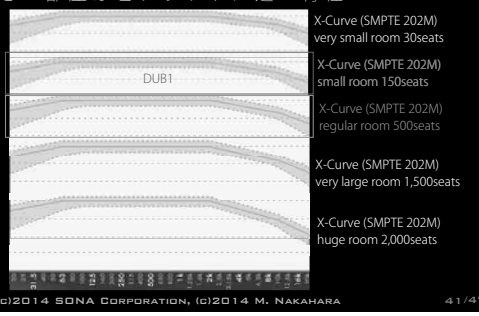
with Dolby Lab.
2013.9.15~20
DOLBY ATMOS
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
38/47

空間平均値が
Xカーブの上限と下限の間に納まっていることが重要
SONA
Dolby
(Atmos)
幅をうまく使って調整する
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
39/47


Dolby社との共通認識
EQでXカーブに合わせることが
モニター調整では無い
(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara
40/47

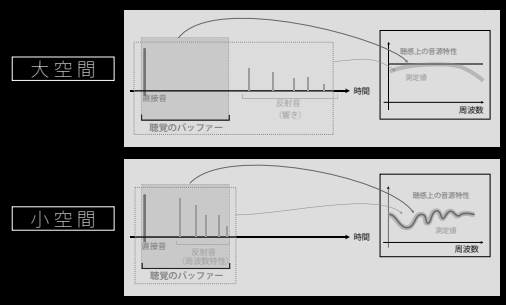
Xカーブ

小さい部屋ほどフラットに近い特性



(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara

聴感と測定値



(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara

適切な音響環境の部屋では…

フラットな音が耳に届いていれば

測定値は自然に

大空間：大きくハイ落ち

小空間：若干ハイ落ち

となる

(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara

最良のモニター音は

Xカーブに EQ加工することではなく

NoEQで適切なXカーブの

許容範囲内に納まっていること

（ハイ落ちの度合いは部屋の大きさによって異なる）

幅をうまく使って調整する

(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara

Xカーブ

映画特有のEQではない

（スクリーンロスが再現されているため少々多めなハイ落ち特性だが）

大空間でスピーカをフラットに

再生するための測定値の目安

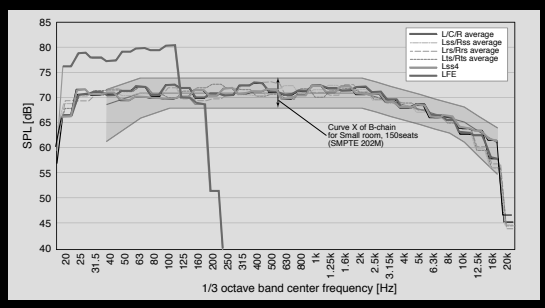
音楽スタジオでもポストプロダクションでも

大空間ではXカーブ

（にほとんど近い特性となる）

(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara

DUB1のモニター特性



(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara

さいごに

ファンタム定位を多く使用したミックス

↓

チャンネル相関の高い作品

↓

再生環境の互換性が重要（問題）

（例）合成SPL：合成大空間・劇場：+3dB，スタジオ・小空間；+6dB

パンナ-の仕様？

再生環境の多チャンネル化

↓

ハード定位が多くなる

↓

チャンネル相関が低い

↓

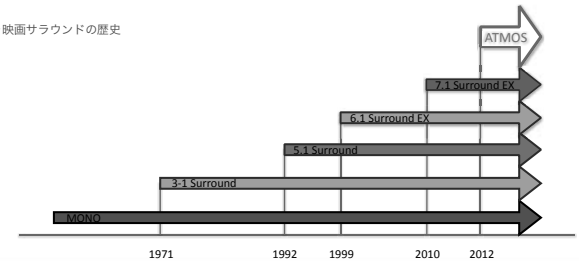
再生環境による変化が少ない

(c)2014 SONA Corporation, (c)2014 M. Nakahara

２．Dolby Atmos の概要関連資料

History of Sound

・映画サラウンドの歴史



DOLBY

ATMOS System

・高さを含む3次元的な表現が可能なリアルでナチュラルな音場を実現するシネマ音響

・音源（オブジェクト）を劇場内のどこにでも自在に配置、または動かすことができる

・既存のDCPシステムとの高い親和性・互換性

・ATMOS用DCPで、あらゆる劇場音響設備に（ATMOS未対応スクリーンを含む）に対応できる

・音声制作作業環境

・アトモスミックス以外に5.1や2.0のファイナルミックスは不要。

・現行のDAW(Digital Audio Workstation)による制作のワークフローやノウハウをそのまま活用できる

DOLBY

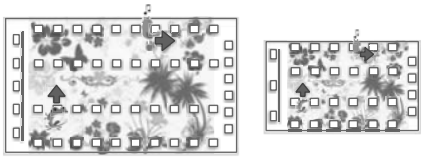
Object and Bed

・オブジェクト音声は、音声データと位置情報。
・ベッド音声は再生ゾーン（従来のチャンネルに近い）を指定。

DOLBY

Object and Bed

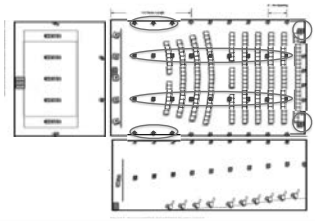
・サイズの異なる、スピーカー数の異なる環境下でも正しい定位。



DOLBY

ATMOS System

・5.1ch,7.1chとの互換性を有し、天井左右、前方横左右にスピーカーを追加
・スピーカー数は劇場サイズに最適化
・最大出力数は64ch
・サラウンドスピーカーのBM用SW
・スピーカーは個別ドライブ



DOLBY

Dolby ATMOS Specification

・Dolby Atmos Specification 日本語版 Issue2 を配布
・スピーカーレイアウトとスピーカー仕様のガイドライン
　・スピーカー位置とスピーカー性能・仕様

DOLBY

Dolby ATMOS Specification

・フロント
　・L, C, R 必須 – Lc, Rc はスクリーン幅が12mを超える場合。
　・40Hz-16KHz 。
　・最大連続出力（SPL） ≥ 105 dB@リファレンスポジション。
　・ISO/2969/SMPTE 202 Standards を満たす特性。
　・同じモデルで揃える。

DOLBY

Dolby ATMOS Specification

・サイド・リア・オーバーヘッド
　・Lss/Rss/Lrs/Rrs/Lts/Rts（各必要数）
　・40Hz-16KHz （ベースマネージメントを使用しない場合）
　・最大連続出力（SPL） ≥ 99 dB@リファレンスポジション/SP
　・最大連続出力（SPL） ≥ 105 dB@リファレンスポジション/アレイ
　・リファレンスレベル85 d BSPL
　・ISO/2969/SMPTE 202 Standards を満たす特性
　・モデルは不問

DOLBY

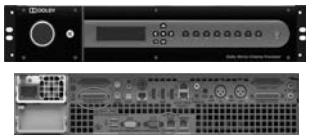
Dolby ATMOS Specification

・LFE（低周波数効果音用SW）
　・31.5Hz-120Hz
　・最大連続出力（SPL） メインスピーカーより + 10 dB(バンドゲイン）@リファレンスポジション
・BM（ベースマネージメント用SW）
　・40Hz-120Hz
　・最大連続出力（SPL） メインスピーカーと同等 0 dB(バンドゲイン）@リファレンスポジション
　・常にペアで使用
　・サイドの中心より後ろ /後方のコーナー近く / 天井

DOLBY

Dolby ATMOS System

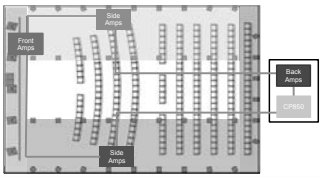
・劇場への設置作業の負担軽減。
　・ATMOS対応シネマプロッセッサー　CP850
　・Lakeプロッセッサー内臓　Auto EQ、レベル、ディレイ。
　・音声出力にはBlu-Linkを採用。
　・メディアブロックからのAES入力とODS用端子搭載。



DOLBY

Dolby ATMOS System

・劇場への設置作業の負担軽減。
　・Blu-Link/AES67の引き回しでケーブル数量の削減。
　・ループ接続で、ケーブル破断にも対応。
　・AMPのレイアウトに自由度を提供。



DOLBY

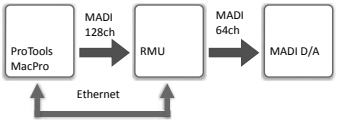
Tools and Workflow

・ATMOS音声制作環境とシステム
　・ダビングステージ　ATMOSスピーカー配置
　・RMU（Rendering Mastering Unit）　MADIインターフェース
　・Pro Toolsバンナープラグインとフィジカルバンナー System5、JLCooper等

DOLBY

Tools and Workflow

- 専用制作ツール
  - Rendering Mastering Unit（RMU）
  - オブジェクトとベッドのレンダリングをリアルタイムで行う。5.1/7.1chも出力



DOLBY

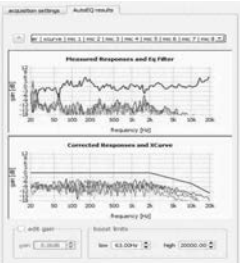
Tools and Workflow

- RMUの設定
  - Dolby Atmos Designer Software

DOLBY

Tools and Workflow

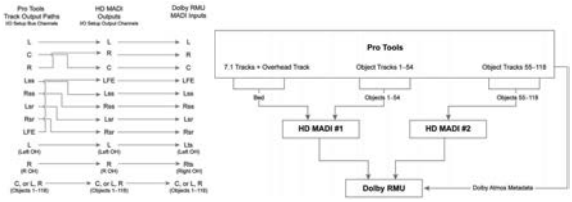
- RMUの設定
  - CP850と同様にAutoEQで調整



DOLBY

Tools and Workflow

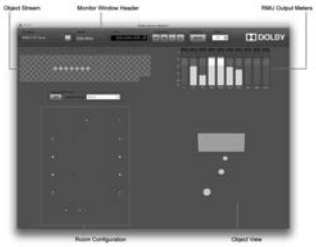
- Pro Toolsとの接続



DOLBY

Tools and Workflow

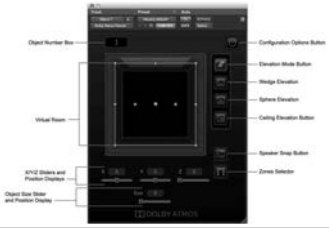
- ATMOS Monitor Application



DOLBY

Tools and Workflow

- ATMOSバンナー
  - ProTools AAX Plug-in
  - 32bit/64bit



DOLBY

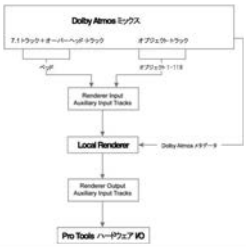
Tools and Workflow

- これまでの音声制作と同じワークフロー

DOLBY

Tools and Workflow

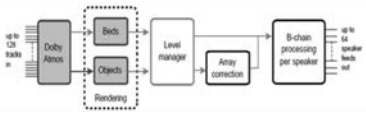
- 音声素材準備と仕込み
  - ベッズとオブジェクトを使い分ける
- 仕込み作業のために、RMUを使用しないで
  ATMOSミックスを行えるLocal Renderer plug-inツールを提供中。
  - モニターコンフィグ
    - 9.1
    - 11.1 (1 side, 1 back, 2 top per side)
    - 11.1 (2 side, 1 back, 1 top per side)
    - 13.1 (2 side, 1 back, 2 top per side)
    - 13.1 (2 side, 2 back, 1 top per side)
    - 15.1 (2 side, 2 back, 2 top per side)
    - 15.1 (3 side, 1 back, 2 top per side)



DOLBY

Tools and Workflow

- ファイナルミックス
  - ATMOSに対応したダビングステージで、RMUの出力をモニタリングしながら行う
  - 完成したMixはレコーダ用Pro ToolsにATMOSのセッションとして記録することが可能



DOLBY

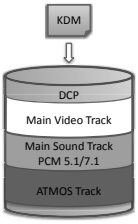
Tools and Workflow

- マスタリング
  - RMUにプリントマスターを録音。（ベッド+オブジェクト+バンニング）
  - RMUでプリントマスターをDCP用ATMOSデータ（MXF）に変換
  - DCP用PCM音声にRMUによるダウンミックス5.1 / 7.1ch出力を使用可能オブリビオン／モンスターズ・ユニバーシティ／ハンガー・ゲーム２

DOLBY

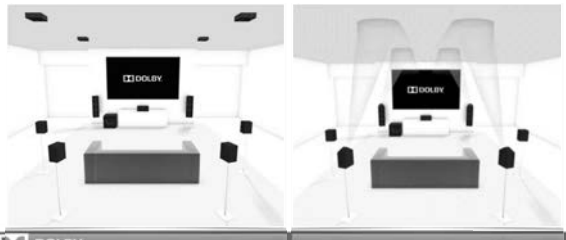
Tools and Workflow

- DCPパッケージ作成
- AtmosDCPはSMPTEフォーマット
  - ATMOS音声用MXFファイルはAUXトラックに記録
  - Main Sound Track ch14にATMOS同期信号が記録される。



DOLBY

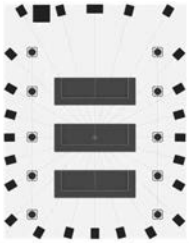
Home Theater ATMOS



DOLBY

Home Theater ATMOS

- AVRの出力ch数
  最小5.1.2、最大24.1.10
- 5.1.2、7.1.4とは
  地平方向のチャンネル数. LFE. 天井



DOLBY

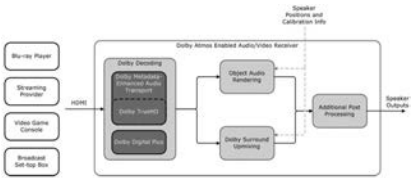
Home Theater ATMOS

- Atmos非対応デコーダとの互換性あり
- Blu-ray PlayerとAVRの接続はHDMI
- Dolby Digital Plus
- Dolby TrueHD

DOLBY

Home Theater ATMOS

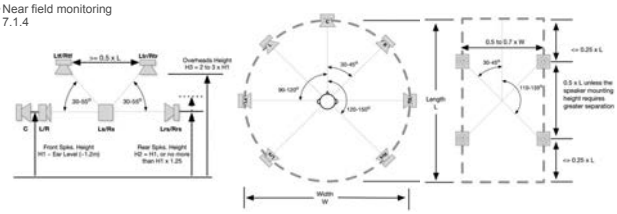
- Upmixing機能
  名称：Dolby Surround



DOLBY

Home Theater ATMOS制作

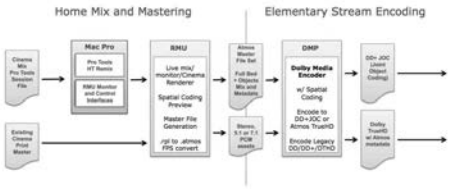
- Near field monitoring
  7.1.4



DOLBY

Home Theater ATMOS制作

- マスタリング
- ニアフィールドモニターで
  エンコーダパラメータ確認



DOLBY

Home Theater ATMOS制作

- Encoder/Decoder Software

Dolby Media Producer ver.2発売は2015年初旬~現在はDolby本社でエンコード対応。
Dolby Atmos Master FileをDolby Digital Plus / Dolby TrueHDにエンコード。

DOLBY

ATMOS市場

DOLBY

ドルビーアトモス関連セミナー

日本音楽スタジオ協会

2014年11月10日
東映株式会社

室薗　剛

TOEI DIGITAL CENTER
東映デジタルセンター

正確さ

作業環境の良さ

次世代音響

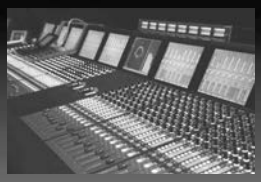
正確さ

- 正確な音の再生と記録
  - ・オリジナルの質感を損なわない高解像度システム
- 正確な音の出力と音場

AVID最大スペック　DF70コア搭載

日本初導入のS5

ハイブリッド／72フェーダー



64bit処理能力のAVID Pro Tools ver.11 HDX2

(Music64, FX128, Dialog64, Foley64, Recorder128)

サンプリングレート96kHzで処理

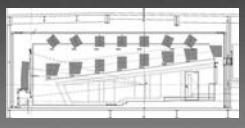
クリーン電源の供給

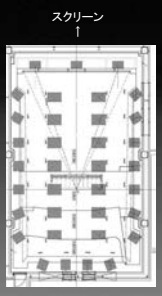
正確さ

- 正確な音の再生と記録
- 正確な音の出力と音場
  - ・スピーカーのフルレンジ化とドライバーユニットの統一

カスタムメイドオリジナルスピーカー

（JBL社、VOLT社、RCF社）





スクリーンスピーカー×7

サラウンドとシーリングスピーカー×32

全スピーカーを

パッシブバイアンプ駆動

16本のユニットによる

アレー出力サブウーハー

正確さ

- 正確な音の再生と記録
- ・アコースティックデザイン

ソナ社製オリジナルQRD型＆MLS型

ハイブリッドディフューザー

スクリーンエクセレンス社製

ファブリックスクリーン日本初導入

正確さ

作業環境の良さ　　次世代音響

作業環境の良さ

- 操作性
  - ・効率的なワークフロー
  - ・ストレスフリーなオペレーション
- 居住性

Pro Tools中心のシステム

Video Satellite ネットワークシステム

ハリウッドスタンダード

IHSE社製KVM日本初導入

（様々なセッションにあわせたレイアウト変更が可能）

東映デジタルセンター内の

Pro Tools HDX化

作業環境の良さ

- 操作性
- 居住性
  - ・長時間の作業でも疲れない空間

適切なNC値と

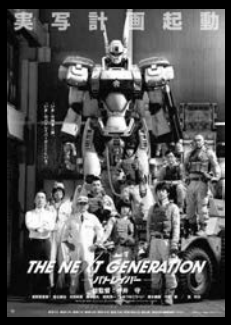
適切な残響時間

正確さ

作業環境の良さ　　次世代音響

次世代音響

DOLBY ATMOS



2015年のゴールデンウイークに劇場公開の実写映画「THE NEXT GENERATION パトレイバー」長編劇場版に、劇場用シネマ音響技術の「Dolby Atmos」が採用される。日本映画でドルビーアトモスの採用が決定した初の作品となる。

配給　松竹株式会社
製作プロダクション　東北新社
監督　押井　守
音楽　川井憲次
ミキサー　室薗　剛
音響効果　柴崎憲治

Inter BEE 2014 賛助会員社ブースツアーレポート

株式会社メディア・インテグレーション
岡田 詞朗

第 50 回となる 2014 年国際放送機器展 Inter BEE が 2014 年 11 月 19 日～ 21 日の 3 日間に渡り開催されました。今年は 2020 年開催予定の東京オリンピックの影響もあってか過去最多となる出展者数 977 社・団体（うち海外 33 カ国・地域から 543 社）が 1,773 小間を出展、昨年よりも 1 ホール拡張し 6 ホール全てを使用しての開催となりました。映像では主に 4K/8K に代表される超高精細度化が、オーディオではデジタル・オーディオ・ネットワークが、更にそれら全てを包括する意味でのノンリニア化によるサーバーソリューションを主軸としたワークフローに話題が集まった感がありました。

そして今年も Inter BEE に出展を行った日本音楽スタジオ協会賛助会員 16 社を巡る「Inter BEE 2014 賛助会員社ブースツアー」を昨年に続き開催させて頂きました。スタジオ関係者と賛助会員の交流が普段特に若い世代で以前よりも少なくなっていることの解消策としてスタートした賛助会員社ブースツアーですが、結果からお伝えするとやはり昨年同様参加者の少なさが課題となる内容となりました。Inter BEE 自体が映像寄りのイメージを与えている事と開催場所が都心から離れて居る事にも起因していると思われますが、本年度の Inter BEE が過去最多となる登録来場者数 37,959 人を記録した事を鑑みるとやはり賛助委員会としての企画力の強化、周知の徹底等今後の課題を感じることが多々ありました。またほぼ同時期に東京ビッグサイトで開催されていた 2014 楽器フェアが 3 日間で 4 万人を超える来場者があったことを考えますと、Inter BEE よりも圧倒的に音楽寄りである楽器フェアに対するアプローチも今後何かしらの形で必要では、とサジェスチョンを抱かされました。

反省が多くなってしまい恐縮ですが､実際の「Inter BEE 2014 賛助会員社ブースツアー」自体は、ご参加頂いた主にスタジオ関係者の方々と賛助会員の交流が様々な新製品を通して上手く行われたと思います。またこれらの活動を通して円滑な空気が日本音楽スタジオ協会内に流れることを祈りつつレポートを終わりにしたいと思います。

最後に、ご協力頂きました事務局の方々、賛助会員各社のご担当者様、そしてツアーに参加頂いた方々、ありがとうございました。

Inter BEE 2014 賛助会員社ブースツアー参加賛助会員 16 社

アビッドテクノロジー株式会社
株式会社エムアイセブンジャパン / シンタックスジャパン株式会社
オタリテック株式会社
株式会社オーディオテクニカ
カナレ電気株式会社
株式会社サンミューズ / サンフォニックス株式会社
スチューダー・ジャパン - ブロードキャスト株式会社
ゼンハイザージャパン株式会社
ソリッド・ステート・ロジックジャパン株式会社
高橋建設株式会社
タックシステム株式会社
株式会社トライテック
ヒビノインターサウンド株式会社
ミックスウェーブ株式会社
日東紡音響エンジニアリング株式会社
株式会社メディア・インテグレーション

第21回日本プロ音楽録音賞授賞式 レポート

「日本プロ音楽録音賞」は、平成５年に当協会が制定した「JAPRS録音賞」を出発点とし、音楽制作、録音に対する認識を高め、音楽産業の更なる質の向上、録音技術者の地位の確立などを目的として、平成６年より実施されているものです。

今回第21回目の実施にあたり、一般社団法人日本音楽スタジオ協会および一般社団法人日本オーディオ協会、日本ミキサー協会、一般社団法人日本レコード協会、一般社団法人演奏家権利処理合同機構MPNの５団体が主催し、経済産業省の後援および日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、株式会社ステレオサウンドの協賛、サウンド＆レコーディング・マガジン、ＣＤジャーナル、ステレオサウンド、プロサウンド、レコード芸術の賛助、並びに（株）JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント、（株）サウンドインスタジオ、オタリテック（株）、（株）ソニーミュージック・コミュニケーションズ、東放学園音響専門学校の協力により「第21回日本プロ音楽録音賞」を実施し、平成26年12月５日（金）、目黒雅叙園３Ｆ「カシオペア」に於いて授賞式、３Ｆ「シリウス」に於いてパーティーが開催され、受賞作品および受賞者の発表が行われました。今回の授賞式も「音の日」のイベントとして開催され、はじめに内沼会長が運営委員長として開会の辞を述べられ、続いてプロ音楽録音賞に対し後援を得ている経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長補佐 望月 孝洋氏が来賓代表として挨拶された後、７部門計15作品およびベストパフォーマー賞並びに、新人賞について表彰が行われました。

内沼 映二・運営委員長

応募作品の分類については以下の通りとし、審査は以下の７部門およびベストパフォーマー賞、新人賞を対象に行われ、全99作品の応募から部門Ａ：２作品、部門Ｂ：２作品、部門Ｃ：３作品、部門Ｄ：２作品、部門Ｅ：２作品、部門Ｆ：２作品、部門Ｇ：２作品がそれぞれ優秀作品としてノミネートされ、その中から各部門１作品が最優秀作品として選定され、更にベストパフォーマー賞１作品、新人賞２作品が選ばれました。

経済産業省・望月 孝洋氏

部門Ａ　２chパッケージメディア：クラシック / 応募総数：11作品
（CD、SACD、DVD、BDの2chステレオ）
部門Ｂ　２chパッケージメディア：ジャズ、フュージョン / 応募総数：８作品
（CD、SACD、DVD、BDの2chステレオ）
部門Ｃ　２chパッケージメディア：ポップス、歌謡曲 / 応募総数：26作品
（CD、SACD、DVD、BDの2chステレオ）
部門Ｄ　２chノンパッケージ：ジャンルを問わず / 応募総数：24作品
部門Ｅ　サラウンド・サウンド：ジャンルを問わず / 応募総数：10作品
（パッケージメディアおよび配信音源等のマルチchサラウンド）
部門Ｆ　放送メディア：放送作品部門：2chステレオ / 応募総数：14作品
（ラジオ番組：ＡＭ、ＦＭ、衛星放送）（テレビ番組：地上波、衛星放送）
部門Ｇ　放送メディア：放送作品部門：マルチチャンネルサラウンド / 応募総数：６作品
（テレビ番組：地上波、衛星放送）
ベストパフォーマー賞
新人賞

今回は、各部門の最優秀作品、優秀作品およびベストパフォーマー賞、新人賞を紹介するとともに、最優秀作品として表彰された代表エンジニアの方々およびベストパフォーマー賞のアーティスト、新人賞の代表エンジニアにアンケートを依頼し、受賞の感想、作品のコンセプトについてコメントをいただきましたので、60頁以降に掲載させていただきます。

第 21 回日本プロ音楽録音賞
授賞式次第

1、主催者代表挨拶

第 21 回日本プロ音楽録音賞　運営委員長
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　内沼　映二

2、ご来賓ご挨拶

経済産業省　商務情報政策局
文化情報関連産業課　課長補佐　望月　孝洋　様

3、最優秀作品・優秀作品の発表及び表彰並びに審査員講評

部門Ａ
一般社団法人日本オーディオ協会　会長　校條　亮治
株式会社ＪＶＣケンウッド・ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデューサー　高田　英男

部門Ｂ
一般社団法人日本オーディオ協会　会長　校條　亮治
株式会社ＪＶＣケンウッド・ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデューサー　高田　英男

部門Ｃ
一般社団法人日本レコード協会　理事　畑　陽一郎
日本ミキサー協会　理事長　吉田　保

部門Ｄ
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　内沼　映二
株式会社ＪＶＣケンウッド・ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデューサー　高田　英男

部門Ｅ
日本ミキサー協会　理事長　吉田　保
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　監事　清水　三義

部門Ｆ
日本放送協会放送技術局制作技術センター　専任局長　鈴木　啓三郎
音響ジャーナリスト
株式会社マクス　代表取締役　加藤　茂樹

部門Ｇ
日本放送協会放送技術局制作技術センター　専任局長　鈴木　啓三郎
音響ジャーナリスト
株式会社マクス　代表取締役　加藤　茂樹

4、ベストパフォーマー賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人演奏家権利処理合同機構ＭＰＮ　副理事長　松武　秀樹
理事長　椎名　和夫

5、新人賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　内沼　映二

6、受賞者代表挨拶

部門Ｃ　最優秀賞　ミキシング・エンジニア
株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ　村上　宣之

以上

部門Ａ　「2ch パッケージメディア」クラシック
（写真は☆印の代表エンジニア）

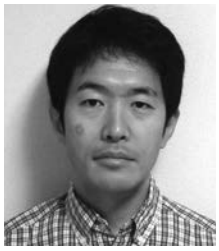
[最優秀賞]
■作品「SHIRO'S SONGBOOK ‘Xpressions’」（YMCL-10015/6）より「Love Overcome」
鷺巣　詩郎　CD
発売元：株式会社ヤマハミュージックアンドビジュアルズ

☆メインミキシング・エンジニア：内沼　映二
（株式会社ミキサーズラボ）

〈受賞のことば〉
この度は、第 21 回「日本プロ音楽録音賞」の部門 A にて最優秀賞という栄誉ある賞を選定頂きまして誠に有難うございました。
選定頂いた楽曲は、鷺巣 詩郎氏のアルバム SHIRO'S SONGBOOK ‘Xpressions’ から「Love Overcome」です。このアルバムは 2 枚組、全 29 曲で JAZZ, フュージョン、POP'S、クラシカルと多彩な音楽ジャンルが網羅されています。
音楽制作も予算的に厳しい環境下ですが、楽曲により東京、ロンドン、北欧と良い演奏、音質を求めて行く鷺巣氏の音楽芸術に対する拘りと制作姿勢には頭が下がります。
その中で、「Love Overcome」はクラシカルな楽曲で透明感あるストリングスを求めて、ワルシャワ国立ホールにて Warsaw National Philharmonic Orchestra の演奏が収録されています。その後ロンドンでボーカル、クアイヤーを収録して東京で最終ミックスをしています。
ミックスは、鷺巣氏の Pro Tools での繊細なストリングスのミックスバランスを活かしつつ、アナログ・ミックスに拘り、PrismSound　ADA-8XR の D/A にて全チャンネルを SSL-9000J に立ち上げ最終ミックスを仕上げています。
鷺巣氏とは 30 年を越すお付き合いで、常々 Hi-Fi を追求しつつ、音楽的にも優れた作品創りをモットーに多数送り出してきました。今回この様な栄誉ある賞を頂き、鷺巣氏をはじめこの作品創りに携わった多くの方々に厚く御礼を申し上げます。
㈱ミキサーズラボ　　内沼 映二

○ミキシング・エンジニア：鷺巣　詩郎
○マスタリング・エンジニア：バーニーグランドマン

[優秀賞]
●「吹奏楽燦選 / フェスティーヴォ！」（COCQ-85028）より
「ネリベル：２つの交響的断章Ⅱ - アレグロ・インペトゥオーゾ」
東京佼成ウインドオーケストラ 指揮：ヴァーツラフ・ブラフネク CD
発売元：日本コロムビア株式会社



☆マスタリング・エンジニア：毛利　篤（日本コロムビア株式会社）
○ミキシング・エンジニア：塩澤　利安（日本コロムビア株式会社）

部門Ｂ　「2ch パッケージメディア」ジャズ、フュージョン
（写真は☆印の代表エンジニア）

[最優秀賞]
■作品「mooki ～ The Best and more ～」（VICL-64184）より
「Something Something」 Minako“mooki”Obata CD
発売元：株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント

☆ミキシング・エンジニア：今関　邦裕
（フリーランス）

〈受賞のことば〉
フリーランスで活動しております、今関と申します。
この度は日本プロ音楽録音賞「2ch パッケージメディア」ジャズ・フュージョン部門での最優秀賞という素晴らしい賞を授かり、大変光栄でございます。
今作品は Vocalist である Minako”mooki”Obata さんのベストアルバムで、90 年代に発売されたアルバムの中からと、新たに録音された新曲３曲を含めたオムニバス的な作品で、受賞しました「Something Something」は新曲の中の１曲になります。
過去の曲に加わるという事はあらかじめわかっていましたが、当時の作品は Steve Sykes や Al Schmitt 等、凄いメンツにより作られており、かなり気負って取りかかりました。
始まってみると今作に参加されたミュージシャンの方々が本当に素晴らしく、ベーシックの部分においては何の問題も無く進み、Mix も順調に、マスタリングでは袴田さんに過去曲と並んでも違和感無く美しく仕上げて頂き、参加された皆さんのおかげで受賞できた事と思います。
とにかく歌の本質、パワー、存在感を大事に、ナチュラルに素晴らしい歌声を少しでも多くの方に届けられる様に努めました。
プロデューサーの岡田さん、CRESCENTE STUDIO、そして mooki さん、バンドメンバー、同じベクトルでクリエイトでき、素晴らしい作品に携われたことに心から感謝申し上げます。
今後も精進し、より良い作品作りに努めて行きたいと思います。

○マスタリング・エンジニア：袴田　剛史（FLAIR MASTERING WORKS）
○アシスタント・エンジニア：井澤　渓（有限会社アルデバラン）

[優秀賞]
●作品「Spinning Globe Kazumi Watanabe featuring Jeff Berlin & Virgil Donati」（WPCR-15377）より「Spinning Globe」CD
発売元：株式会社ワーナーミュージック・ジャパン

☆ミキシング＆マスタリング・エンジニア：鈴木　浩二
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）
○レコーディング・エンジニア：中村　昭子（フリーランス）
○アシスタント・エンジニア：春　雅之
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）

部門C　「2ch パッケージメディア」ポップス・歌謡曲
（写真は☆印の代表エンジニア）

[最優秀賞]

■作品「青春ラブレター～ 30th Celebration Best ～」（ESCL4193）より「Ocean Side」
菊池　桃子　CD
発売元：Sony Music Labels Inc.

☆ミキシング・エンジニア：村上　宣之
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）

〈受賞のことば〉

菊池 桃子さんデビュー 30 周年のアルバムに参加することができ、この中の楽曲がプロ音楽録音賞最優秀賞を受賞したことを大変うれしく思います。

受賞した「Ocean Side」は小倉 博和さんによりボサノバ調にリアレンジされた楽曲ですが、楽器自体の音がすばらしく、ただバランスを取っただけでまとまりがあるサウンドにする事ができました。

そして何といってもボーカルです。23 年ぶりのアルバムリリースという事もあり、過去のイメージを意識しつつ現代的なアプローチを心がけました。

アレンジ、楽器、スタッフ、スタジオの総合力で今回賞をいただけたと思っております。

部門Ｂにて最優秀賞を受賞した今関氏や、新人賞の安達氏、小坂氏と同年代が今回受賞しているのは大変励みになります。

共に切磋琢磨し、今後の音楽業界に貢献出来ればと思います。

○マスタリング・エンジニア：酒井　秀和
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）
○アシスタント・エンジニア：春　雅之
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）

[優秀賞]

●作品「はじめての海」（COCP-38613）より「童神」上間　綾乃　CD
発売元：日本コロムビア株式会社

☆ミキシング・エンジニア：三浦 瑞生
（株式会社ミキサーズラボ）
○マスタリング・エンジニア：松永　健司
（株式会社ミキサーズラボ）

●作品「無頼豊饒」（TKCA-74085）より「地獄の料理人」人間椅子　CD
発売元：徳間ジャパンコミュニケーションズ

☆マスタリング・エンジニア：菊地　功
（株式会社ミキサーズラボ）
○ミキシング・エンジニア：内藤“Teru”輝和
（BAZOOKA STUDIO）

部門D　「2ch ノンパッケージ」
（写真は☆印の代表エンジニア）

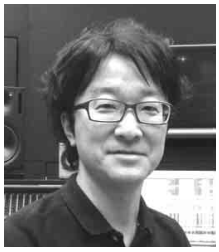
[最優秀賞]
■「飛騨高山ヴィルトーゾオーケストラコンサート 2013」より
「プロコフィエフ：交響曲第 1 番 古典交響曲ニ長調 作品 25 第一楽章 Allegro」
飛騨高山ヴィルトーゾオーケストラ　フォーマット：96/24
発売元：株式会社シンタックスジャパン

☆ミキシング＆マスタリング・エンジニア：
長江　和哉（名古屋芸術大学）

〈受賞のことば〉
このたびは、部門D 2ch ノンパッケージ 最優秀賞という大変栄誉ある賞を頂きありがとうございました。飛騨高山ヴィルトーゾオーケストラの設立に寄与された、トランペットの栃本浩規さん、コンサートを企画した大萱真紀人さん、また、この音源の配信の機会を頂いた、シンタックスジャパン、e-onkyo のみなさまはじめ、収録チーム全員の力が反映され受賞につながったと思っております。この作品は飛騨に縁があり東京を中心に活躍する一流演奏家によって 2005 年に発足したオーケストラ「飛騨高山ヴィルトーゾオーケストラ」が、2013 年 6 月に行ったコンサートを収録したライヴアルバムですが、これまで素晴らしい演奏家達による演奏を何とか発信する方法はないものかと模索してきました。その折に、今回はじめてシンタックスジャパンと e-onkyo により 96kHz 24bit ハイレゾ配信をさせていただくこととなり、録音したそのままのフォーマットで、音楽ファンの元へ届けることができるようになりました。オケは弦楽器計 16 名、木管楽器 8 名、金管楽器 4 名、打楽器 1 名と決して大きな編成ではないのですが、メインマイクのホールトーンを生かしながらミキシングすることに心がけ、渾身の演奏と木の国 • 飛騨の素材で造られた飛騨芸術堂の素晴らしいアコースティックと共に収録できたと思っております。
最後に、制作に関わっていただきましたすべての皆様に感謝申し上げ、受賞の言葉に代えさせていただきます。

○アシスタント・エンジニア：島田　裕文（株式会社名古屋テレビ映像）
○アシスタント・エンジニア：竹内　耕平（フリーランス）

[優秀賞]
●「Horizon」より「Rite of Harmony」　吉田兄弟　フォーマット：96/24
発売元：株式会社ソニー・ミュージックダイレクト



☆ミキシング・エンジニア：山内“Dr.”隆義　（gogomix@）
○マスタリング・エンジニア：酒井　秀和
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）
○アシスタント・エンジニア：赤井　聡史
（株式会社サウンドインスタジオ）
○アシスタント・エンジニア：春　雅之
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）

部門Ｅ　サラウンド・サウンド
（写真は☆印の代表エンジニア）

[最優秀賞]
■「レスピーギ：ローマ三部作 [祭 / 噴水 / 松]」（COGQ-68）より
「レスピーギ：交響曲《ローマの祭》Ⅰ - チルチェンセス」
アンドレア・バッティストーニ指揮 東京フィルハーモニー交響楽団 SACD マルチ ch
発売元：日本コロムビア株式会社

☆マスタリング・エンジニア：毛利　篤
（日本コロムビア株式会社）

〈受賞のことば〉
この度はご選定いただきまして、誠にありがとうございます。
今回のマスタリングにあたっては、私自身驚きの連続でした。弱冠20代半ばの指揮者に、オケは東フィル、しかもライブ録音です。「日本のオケもついにここまで到達した」との評価も本番当日のみならず各所でいただきました。この演奏を多くの方へ伝える一端を担わせていただけたことに感謝したいと思います。
指揮者バッティストーニの魔法にかかったかのように、東フィルの演奏は神がかり的な集中力をもっていました。やや遠めのフォーカスながら程よい距離感が絶妙なミックスは、明るいカラーを持ち味とする東フィルの音色と、この曲の雰囲気との融合に見事にマッチしています。マスタリングでは、壮大なスケール感の中でのダイナミックレンジを最大限生かしながら、pp での各楽器の粒立ちと ff での濁りのない音色を目指した音作りを心がけました。
個人的にも仕事でこれほどの幸福感を味わったのは初めてでした。今回の受賞がきっかけとなり、より多くの方にこの演奏を聴いていただける機会が増えることをとても嬉しく思います。
今回の受賞にあたり、素晴らしいレコーディングとミキシングをしていただいた塩澤さん、プロデューサーの馬場さん、アシスタントの小野寺さんをはじめ、この作品に関わった多くの皆さんに感謝申し上げます。

○ミキシング・エンジニア：塩澤　利安（日本コロムビア株式会社）

[優秀賞]
●作品「サン＝サーンス交響曲第３番ハ短調 Op.78「オルガン付き」」
（RYUTSA-0001）より「第一楽章 -Poco adagio」
指揮 / 飯森　範親、オルガン / 山本　真希、東京交響楽団
SACD マルチ ch
発売元：りゅーとぴあ新潟市芸術文化振興財団

☆ミキシング・エンジニア：下山　幸一（一般財団法人 NHK 放送研修センター）
○マスタリング・エンジニア：石井　亘（株式会社音響ハウス）
○アシスタント・エンジニア：金子　敏文（公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団）
○アシスタント・エンジニア：佐藤　哲郎（新潟照明技研株式会社）

部門Ｆ　「放送メディア」放送作品部門 2ch ステレオ
（写真は☆印の代表エンジニア）

[最優秀賞]
■作品「ハンサム JAZZ LIVE MASTERS」より「愛のテーマ」
Yuji Ohno ＆ Lupintic Five
日本放送協会　ＦＭ　stereo　２０１３年９月５日放送

☆ミキシング・エンジニア：小野　良太
（日本放送協会）

〈受賞のことば〉
　この度は部門Ｆ放送メディア 2ch ステレオで最優秀賞という栄誉ある賞に選定して頂き有難うございました。2012 年の春に初めて同ライブ番組を制作するためにたてたコンセプトは「楽しい音楽を良い音で提供する」というものでした。NHK の FM 放送では最終的なマスターが 48kHz/16bit というサンプリングレートですが、この番組は全てのライブを 96kHz/24bit で録音、最終的に 96K のミックスファイルを 48kHz/16bit にダウンサンプルして毎回制作してきました。できるだけ高いクオリティーで録音、ミックスすることで音楽としての鮮度を保ちつつ、音楽の持つ力を最大限に引き出すことに努力を重ね、番組として放送しました。こうした我々の積み重ねが、今回の評価につながり受賞に至ったと思っています。小さい規模ながらも最大限の力を発揮できるよう、スタッフ一丸となってやってきた結果でもあり、また収録に惜しみない協力をしてくださったミュージシャンの皆様、ライブハウス、スタッフの皆様のおかげでもあります。この番組に関わった全ての方々に厚く御礼申し上げます。今後も楽しく質の高い音楽番組を制作しつづけていけるよう精進してまいります。本当に有難うございました。

○アシスタント・エンジニア：藤本　直樹（日本放送協会）
○アシスタント・エンジニア：三浦　真友子（日本放送協会）
○アシスタント・エンジニア：岡田　正志（株式会社 SCI）

[優秀賞]
●作品「僕らの音楽」より「島人ぬ宝」　今井 絵理子・島袋 寛子
株式会社フジテレビジョン　ＨＤＴＶ　stereo　２０１４年８月１５日放送

☆ミキシング・エンジニア：中村　峰子（株式会社フジテレビジョン）
○セカンド・エンジニア：鹿又　健一（株式会社フジテレビジョン）
○セカンド・エンジニア：松田　勝治（株式会社サンフォニックス）
○音声フロアチーフ：白鳥　慎一郎（株式会社サンフォニックス）

部門Ｇ　「放送メディア」放送作品部門 マルチ ch サラウンド
（写真は☆印の代表エンジニア）

[最優秀賞]
■作品「題名のない音楽会」より「キャンディード序曲」
指揮：佐渡　裕　演奏：東京交響楽団
株式会社テレビ朝日　ＨＤＴＶ　5.1ch　２０１４年７月２７日放送

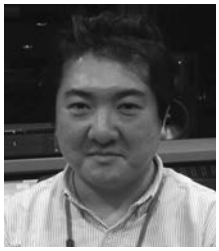
☆ミキシング・エンジニア：柳原　健司
（株式会社テイクシステムズ）

〈受賞のことば〉
この度は第 21 回日本プロ音楽録音賞 部門Ｇ放送メディア マルチ ch サラウンド部門にて最優秀賞をいただき大変光栄に思っております。
題名のない音楽会もなんと今年 50 周年を迎え、今回の作品はその記念コンサートをサラウンド収録し放送したものです。指揮者の佐渡さんと東京交響楽団の熱の入った最高の演奏を映像と音とでうまく表現できればとマイクアレンジからミキシングまでをプランニングしたのですが、実はこの公開収録した記念コンサート、入賞した曲ではない別の曲などはクラシックの枠を飛びぬけた演出も多く、歌あり、大太鼓あり、子供がたくさん出てきて演奏、客席２階席で演奏あり、その他いろいろと大転換などもありと、、、、マイクの数も非常に多くなかなかの無謀なプランニングをしました。
そんな無謀なプランにも理解と協力をしてくれた制作、美術、技術スタッフの皆様とそれらのセッティング、マイクアレンジに尽力してくれた音声スタッフの皆様に感謝いたします。あの時みんなで全力を尽くした収録が、今回の賞に結び付いたということで大変嬉しく思っております。
個人的にはまだまだ納得のいく良い音には近づけていませんが、今回の受賞を励みにもっと精進していきたいと思います。ありがとうございました。
株式会社テイクシステムズ　柳原　健司

○セカンド・エンジニア：須崎　泰道（株式会社日放）
○セカンド・エンジニア：石松　千穂（株式会社日放）

[優秀賞]
●作品「プレミアムシアター」より「歌劇「死の都」第２幕」
トルステン・ケール、ミーガン・ミラー、アントン・ケレミチェフ、山下牧子、他
指揮：ヤロスラフ・キズリンク　演奏：東京交響楽団
日本放送協会　ＨＤＴＶ　5.1ch　２０１４年５月１２日放送

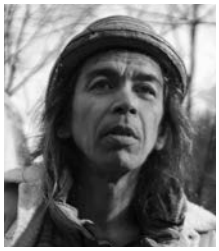
☆ミキシング・エンジニア：山縣　淳一
（株式会社 NHK メディアテクノロジー）
○セカンド・エンジニア：篠　なほ子
（株式会社ネオテック）



ベストパフォーマー賞

■作品「濱口　祐自 フロム・カツウラ」より「ドクトル・Oのラグ 」
濱口　祐自　　フォーマット：96/24

発売元：日本コロムビア株式式会社



アーティスト：濱口　祐自

〈受賞のことば〉

初めてギターを手にしたのは遠い昔、小学校４年生の時で、近所のお兄さんにチューニングと少しのコードを教わりました。

以来ずっと独学で音楽を追求し、現在に至りますが、音楽が全てとは言わないけどそれに近い生活をしてきました。

若い頃は、アメリカやヨーロッパにも行き音楽を求めましたが、昨年よりやっと、東京でコンサートをしたり、人口の多いところで演奏するようになり、いままでより多くの人たちに聴いてもらい、自分のスタイルを気に入ってくれる人が数多くいることをうれしく思っています。

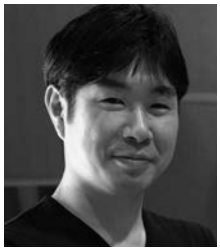
このたびベストパフォーマー賞を受賞させていただきありがたい思いです。これからも、まだまだ独学ではありますが、自分のスタイルを追求し、高めていくつもりです。

音楽をリスペクトしています。　　濱口 祐自

新人賞

■作品「贈り物」（ZLCP0163）より「贈り物」
熊木　杏里　CD

発売元：wandering note



☆ミキシング・エンジニア：安達　義規
（株式会社ミキサーズラボ）

〈受賞のことば〉

この度は、第21回プロ音楽録音賞新人賞に選出していただきまして、大変光栄に思っております。

熊木杏里さんとは2007年くらいからよくご一緒させていただくようになりました。

素敵な歌詞とメロディーと歌声で、私自身とても大好きなアーティストです。

今回の楽曲に関してですが、ビクターの301スタジオにてDr Bass Gt Piano Strings Vocal全てを同録という形での作業となりました。

この日は一日で３曲完パケというスケジュールだったのですが、アシスタントの金井氏の協力もあり大変スムーズに録音する事ができました。

音作りに関してですが､素晴らしいミュージシャンの方たちが演奏をされておりまして、機材やマイクアレンジなどでの自然な奥行きや広がりを目指しました。

普段のリズム録りとは違って、同録で全ての楽器のOKテイクを出すという事が目標だったので、モニターバランスにも細心の注意をはらいました。MIXは基本Pro Toolsで行っています。

録音当日の空気感と臨場感を損なわないようダイナミックレンジを意識しつつ、PianoやBass、Vocalなど曲の核になる部分に関してはアナログ領域で処理しました。

このスタッフで同録をしたのは初めてのことだったので、評価していただいた事を大変うれしく思っております。
最後にこのような機会を与えてくださった熊木杏里さんはじめ、スタッフの皆様に心から感謝申し上げます。
ありがとうございました。

■作品「LOVE SONGS」（WPCL-11998）より「思い出のレストラン」
馬場　俊英　CD

発売元：株式会社ワーナーミュージック・ジャパン

☆ミキシング・エンジニア：小坂　康太郎
（株式会社ミキサーズラボ）

〈受賞のことば〉
この度は、受賞ありがとうございます。
楽曲もですが、ミュージシャン皆さんの演奏も素晴らしかったので、それがダイレクトに伝わるようにパッケージ出来ればと思いながら作りました。
録音時にダイナミクス感を失くしたくないというお話があったので、特にそこに気を配りながら制作した作品です。
この作品の制作に携われた事に感謝しております。ありがとうございました。
（株）ミキサーズラボ　小坂 康太郎

審査委員会

総合審査委員長　内沼　映二　　副審査委員長　高田　英男
部門Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ　審査委員：内沼　映二、川澄　伸一、椎名　和夫、
塩澤　利安、清水　三義、髙城　　賢、
高田　英男、中村　文俊、増田　　晋、
松尾　順二、松武　秀樹、三浦　瑞生、
森元　浩二、吉田　　保、脇田　貞二、
渡辺　昭人
部門Ｆ・Ｇ　審査委員：加藤　茂樹、石野　和男、清水　幸男、
高橋　正勝、深田　　晃
（以上 50 音順）

今回の顕彰内容については、各部門の最優秀作品と優秀作品の制作に携わったミキシング・エンジニア、マスタリング・エンジニア及びベストパフォーマー賞のアーティストに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈し、セカンド・エンジニア、アシスタントエンジニアには表彰状を贈呈。また、新人賞についてはミキシング・エンジニアに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈。

なお、部門Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｅの最優秀賞については、優秀なスタッフと良好な環境を提供されたメインのスタジオについても表彰状とクリスタル製の表彰楯が授与された。

第 21 回日本プロ音楽録音賞　審査委員講評

＜部門Ａ　２ch パッケージメディア：クラシック＞

株式会社 JVC ケンウッド・
ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデュサー
高田 英男

応募総数 11 作品（昨年 6 作品）と昨年度の倍に近い応募作品を頂き、有難う御座いました。今年も、各エンジニアが独自感性と技術でこだわりの作品であり、特に上位作品については大変僅差での受賞順位となっております。

受賞されました作品の講評

●優秀賞

「吹奏楽燦選／フェスティーヴォ！」より
「ネリベル：２つの交響的断章Ⅱ - アレグロ・インペトゥオーゾ」
東京佼成ウインドオーケストラ　指揮　ヴァーツラフ・ブラフネク
マスタリング・エンジニア：毛利　篤　日本コロムビア（株）
ミキシング・エンジニア：塩澤　利安　日本コロムビア（株）

毛利さん / 塩澤さんコンビでの作品創りはプロ音楽録音賞の常連コンビであり、昨年度も東京佼成ウインドオーケストラ「火の鳥」にて最優秀賞を受賞されており、２年連続での受賞となっています。今年度、受賞されました作品は 2013 年３月、武蔵野音楽大学バッハザールにて 96kHz/24bit にて録音されております。

受賞作品：「ネリベル：２つの交響的断章」は１楽章マルカートのテンパニーのロールから始まり、鍵盤打楽器（木琴、マリンバ、チャイム）と美しい音色と木管の奥行き感のあるサウンドから始まり、応募楽曲の激しい２楽章へと続いて行きます。２楽章は打楽器対金管楽器の躍動感ある演奏が、色彩感豊かに圧倒的なスケール感で表現されており、毛利さん / 塩澤さんの名コンビならではの迫力あるオーケストラサウンドが創られていると感じました。

●最優秀賞

「SHIRO'S SONGBOOK 'Xpressions'」より「Love Overcome」
アーティスト：鷺巣　詩郎
メインミキシング・エンジニア：内沼　映二　（株）ミキサーズラボ
ミキシング・エンジニア：鷺巣　詩郎
マスタリング・エンジニア：バーニーグランドマン

受賞アルバムは 20 数年前から 2013 年 9 月まで長期に及んだ録音であり、録音もロンドン・パリ・ワルシャワであり、オーケストラも The London studio orchestra、Warsaw national philharmonic orchestra、など、作品毎に多くの時間と制作費用を掛けて完成したアルバムで御座います。最優秀受賞作品「Love Overcome」は 2001 年にワルシャワ国立ホールでオーケストラを録音し、ヴォーカルはロンドンにて録音しております。ミキシングはプリミキシングをパリで鷺巣さんが行い、最終的纏めを内沼さんが東京で行っております。

内沼さんが担当された作品は、過去の作品においてもその楽曲におけるアレンジのつぼを理解し、更にアーティストのパフォーマンスを最大限に生かされた音創りにより、音楽

制作をされており、業界の中では内沼サウンドとして昔から確立されております。
　最優秀受賞作品も①ストリングスの音色感、②緻密な楽器バランス、③柔らかいハープとストリングスによる音場空間創り、④フォーカスが合ったヴォーカルサウンドなど、大変繊細な音創りにより、派手なアレンジの楽曲ではありませんが、一つのドラマとして音楽が伝わってくる感じを持ちました。
　まさにエンジニア力により新たな音楽感動が創り出されていると、感じました。

纏め
　今回受賞されました各作品を試聴し、音楽制作におけるエンジニア力の重要性と同時に、音楽ビジネスは大変な時代ですが、地道で誠実な音楽制作へと向き合う姿勢の大切さを、改めて痛感した次第です。

　最後になりましたが受賞されました皆様、誠におめでとうございました。

＜部門Ｂ　２ch パッケージメディア：ジャズ、フュージョン＞

株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデューサー　高田　英男

　今年度部門Ｂ　ジャズ・フュージョン応募作品は 8 作品と昨年度 10 作品には及びませんでしたが、全ての作品が大変魅力的なサウンドであり、特に受賞作品は部門Ａ同様に大変な僅差で受賞順位が確定致しました。

受賞作品の講評
●優秀賞
　「Spinning Globe Kazumi Watanabe featuring Jeff Berlin & Virgil Donati」より「Spinning Globe」
　ミキシング＆マスタリング・エンジニア：鈴木　浩二
　　（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ
　レコーディングエンジニア：中村　昭子　　フリーランス

　エンジニア鈴木浩二さんは昨年度、部門Ｂにおいてケイコ・リーさんで最優秀賞、更に部門Ｄにおいてもアーティスト渡辺香津美さんで最優秀賞を受賞するなど、リアル且つアグレッシブな音創りでプロ音楽録音受賞の常連エンジニアで御座います。
　今年度受賞作品「Spinning Globe」では何と言ってもドラムサウンドに驚愕致しました。昨年度ケイコ・リーさんでの渡嘉敷さんのリアルなドラムサウンドに感激したのですが、今年度は更にパワフル・スピード感・スケール感あるドラムサウンドが立体的に表現されております。更に中低域をしっかり支えるベース・自由奔放に広がるギター、それぞれのアーティストパフォーマンスを完璧なサウンドで纏められていると感じました。

●最優秀賞
　「mooki ～ The Best and more ～」より「Something Something」
　アーティスト：Minako“mooki”Obata
　ミキシング・エンジニア：今関　邦裕　　フリーランス

マスタリング・エンジニア：袴田　剛史　　FLAIR MASTERING WORKS

サウンド的第一印象として、大変素直な音色感の中にグルーヴ感あるポップな音創りと感じました。録音はCRESCENTE STUDIOでフォーカスライトのアナログコンソールをベースに自前でカスタムされたNEVE、APIなどヘッドアンプ＆アナログアウトボードを使いPro Tools HD10に48kHz/32bitで録音。ミキシングはPro Tools HD11を使い纏め最終的にフォーカスライトの卓に２ミックスを立上げ、アナログ機材にて最良な音創りをされています。

アナログ機器独特の柔らかく素直な質感と、DAWならではの緻密なミックスなど、アナログとデジタルの良さを知り尽くし纏められた時代を代表する見事なポップなサウンドと感じました。

マスタリング・エンジニアの袴田さんにマスタリングでの音創りについてお話をお伺いしたところ、今関さんの大変緻密なサウンドを基本大切に、アーティストObataさん立会で、素直な音色の希望もあり、派手過ぎずに落着いて安定したマスタリングを目指したとの事でした。

纏め

DAWによる音楽制作も大変成熟し、デジタルシステムならではの緻密な音創りと合わせ、アナログ機材が持つ独特の音色感も大切にされており、時代を創り出していくエンジニア力の素晴らしさを感じました。

又、CDパッケージに纏めるマスタリング力の進化も素晴らしく、更なる音楽録音制作への広がりを感じた次第です。

最後になりましたが受賞されました皆様、誠におめでとうございました。

＜部門Ｃ　２chパッケージメディア：ポップス、歌謡曲＞

日本ミキサー協会
理事長　吉田 保

応募数　26作品

１、優秀賞：上間 綾乃「童神」

まずひとつ童神は曲想に大変合うミキシングが感じられ好印象で沖縄独特なサウンドを十分引き出している。音楽CDに於ける音量も無理をしていない音量で好感が持てる。私事であるが沖縄の青い海、風景を思い出すとすればもう少し広がり感があれば沖縄の風景に近づくことが出来たように思われます。この事がエンジニアの感性とともに表現できるのであればもっと良かったように思われる。細かい部分ではセロの処理をシンフォニックな感じで表現していればもっと風景が表現できるような感があるように思われる。一方でこの素朴さを表現するミックスであればこの音像感で良いと思う。この辺のジャッジが難しい判断材料となる。しかしともかくほっとするミキシングであるのは間違いなく、唄の感じも良く大変いい作品となっている。音量レベルも赤に入らずエンジニアリング、マスタリングともに良い作品となっているように思われる。

２、優秀賞：人間椅子「地獄の料理人」

今の時代CD音量レベル戦争末期に突入感があり音量は凄まじい事になっている。

この作品は正にレベル時代末期の最前線を行っている様に思われる。レベルを入れやすい分野はヘビーメタル、音楽としてはもってこいの分野である。音量レベルはもうこれ以上入れられないくらい入っていて、マスタリング・エンジニアの意地がすごく感じられる作品である。ベースドラムが大きいところは唄が一瞬引っ込むのはしょうがない所であるが全体の音楽と考えた場合どうなのか、放送で一回聴くのは良しとしてCDで何十回聴くとしたらどうであろう。と批判的なことを言ったがメタル系の音楽のミックスとしたら面白いミックスに仕上がっている。歌詞内容もはっきり表現出来ていて良いミックスとなっている。反面、ベースドラムの音像とスネアードラムの音像が一致しないのは惜しい。唄とコーラスのバランスは絶妙だ。

３、最優秀賞：菊池 桃子「Ocean Side」

サンバのリズムに乗った明るいサウンドは凄く好感が持てる。イントロのベースの上げ方は良いが唄中でベースの存在感が薄れるのはどうした事であろう。上げたままでも良かったかもしれない。普通、音楽は３大要素で構成されており、この作品はリズム生ギターが少し大きいように感じられ音像が左によって聞こえるように思われる。これにより不安定な感じになりサンバでのリズム感が少し失われているように思われる。然るにせっかくのホイッスル、クイッカーのバランスはもう少し大きいことが必然となり、ここでサンバのリズム感一体が表現出来るようになると思われる。しかしながらミックスは明るいサウンドとなっていて太陽が燦々と輝いているかの感じが上手に表現できているミックスとなっている。ただ唄のピークが少しつぶれて聞こえるのが惜しいところである。

今回の最優秀賞おめでとうございます。

＜部門D　２ch ノンパッケージ：ジャンル問わず＞

株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデューサー　高田　英男

今年度応募作品は昨年同様 e-onkyo music 様のご協力を頂き、自薦 / 推薦併せて 24 作品（昨年 11 作品）と昨年度の倍以上の応募作品を頂きました。

更に音楽ジャンルもクラシック、ジャズ、アニメソング、純邦楽と幅広く応募頂き、ハイレゾリューションによる音楽制作の広がりを感じております。

受賞されました作品の講評

●優秀賞

作品「Horizon」より「Rite of Harmony」 アーティスト：吉田兄弟　96kHz/24bit
ミキシング・エンジニア：山内“Dr”隆義　gogomix@
マスタリング・エンジニア：酒井　秀和
（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ

吉田兄弟による津軽三味線と尺八、箏、和太鼓、胡弓、薩摩琵琶によるアンサンブルの作品です。 ハイレゾリューションならではの透明感あるクリアーなサウンドからは、演奏者の気までも感じられる心地よい緊張感と、和太鼓ならではの躍動感あるサウンドとが融合し、まさに静と動の音のコントラストが見事に表現された作品です。

エンジニア山内さんは日本のポップスシーンにおいて代表的なエンジニアであります。

受賞作品を試聴し、ジャンルを超えてアコーステック録音に精通されており、この作品のプロデュース・アレンジをされました井上　鑑さん、エンジニア山内さんの感性により、吉田兄弟の新たな音世界が表現されていると感じました。

●最優秀賞

作品「飛騨高山ヴィルトーゾオーケストラコンサート 2013」より
「プロコフィエフ：交響曲第１番　古典交響曲ニ長調　作品 25
第一楽章 Allegro」 96kHz/24bit
ミキシング＆マスタリング・エンジニア：長江　和哉　　名古屋芸術大学

録音システム

本作品はドイツ録音機器メーカー REM の MADI 光ファイバーレコーディングシステムによりステージで A/D 変換された信号が、約 100 mの光ケーブルにて延長され録音されております。

今年度スタジオ協会技術セミナーにおいて「ハイレゾリューションレコーディングの新たな可能性」のテーマで、長江さんにプレゼンをお願いした時、アナログケーブルと光ケーブルによる音質の違いなど含め、最新デジタル機器を使った新たな録音へのチャレンジについてお話頂き、エンジニアとして大いに刺激を受けたセミナーでしたが、結果的にそのセミナーで説明された作品が最優秀賞を受賞致しました。

私自身感じます事は、新しい技術、機器の素晴らしさは勿論ですが、そのノウハウを音楽制作に生かす長江さんのエンジニア力の素晴らしさを感じております。

受賞作品の音創りもオーケストラレコーディングの王道的スタンスであり、大変自然な響きを基本に、繊細なミキシング技術によりオーケストラの魅力・深さ・楽しさなど音として見事に表現されていると感じました。

纏め

ハイレゾリューションによる音楽制作が広がりを見せている今、音楽制作における音の質について、アーティスト・制作者が、スタジオマスターの音をお客様にダイレクトに届けられる事により、作品への音創りへの拘りをより高いレベルで持ち音楽制作をしています。このハイレゾリューションサウンドによる音楽制作が、音楽文化の更なる向上に繋がる様に、私達エンジニアも今、とても大切な時期を迎えていると思っております。

皆様のお力を頂き、更なるハイレゾサウンドによる音楽制作が広がっていく事を願って講評とさせて頂きます。

最後になりましたが受賞されました皆様、誠におめでとうございました。

＜部門Ｅ　サラウンド・サウンド：ジャンル問わず＞

（一社）日本音楽スタジオ協会
監事　清水 三義

まず応募数ですが、今年度は 10 作品の応募がありました。

内訳は SACD ６作品、BD １作品、WAV での応募が３作品、ジャンルはクラシックが９作品でポップスが１作品でした。どれもこだわりの有るハイレゾの作品です。

昨年の応募が４作品ですから、倍増といえます。

ハイレゾの楽曲数も昨年から比べますと倍になったそうですから、今回の応募に反映されたと思われます。大変良い事ですし、今後も期待したいと思います。

さて、優秀賞に選ばれました下山さんの作品。
サン＝サーンス交響曲第３番ハ短調　作品 78「オルガン付き」より
応募曲「第１楽章　Poco Adagio」
指揮 飯森範親、オルガン山本真希、東京交響楽団が新潟市のりゅーとぴあコンサートホールで演奏した Live 録音で「SACD 5.0 サラウンド」作品です。

録音されたエンジニアの下山幸一さんは、独自のサラウンド・マイクシステムを提唱されている経験豊かなエンジニアの方です。Live 録音は、演奏されるホールの音楽空間を捉える事が重要であり、りゅーとぴあホールの美しい響きをそのまま伝えたい。そのような思いから、出来るだけ少ないマイクロホンで収録。楽曲の持つダイナミックレンジを生かし、可能な限り高音質で録る事を心がけたそうです。

実際に聴きますとナチュラルで繊細な弦の響きがとても美しく､それを支えるオルガン、木管の響きなど、透明感のある音の世界は、大変心地良く心に響きます。
また、サラウンド音場としては、オルガンとオケの自然な距離感を始めとして、あたかも Live 会場にいるような、リアルな空間を感じる優れた作品となっています。これは、下山さんの豊富な経験と技術、そして、この作品に対する思いが見事に結実した結果と思います。

最優秀賞
レスピーギ：ローマ三部作［祭／噴水／松］より
応募曲「レスピーギ：交響曲《ローマの祭》１- チルチェンセス」
アンドレア・バッティストーニ指揮　東京フィルハーモニー交響楽団がサントリーホールで演奏した Live 録音です。
「SACD 5.0 サラウンド」の作品でマスタリング・エンジニアの毛利篤さんからの応募作品です。
録音された塩澤利安さんはクラシック、ジャズのジャンルで数々の受賞をされている名ミキサーです。先ほどご紹介が有りましたように今回は部門Ａでも毛利さんとのコンビで受賞され、Ａ､Ｅ部門とダブル受賞となります。

作品からは鮮明なブラス、打楽器の迫力、鋭い弦の響き、木管のきらびやかな音が色彩感豊かに、曲の持つダイナミズムを損なう事なく、オーケストラの生き生きとした様が伝わってきます。
サラウンドの視点では、大迫力の打楽器、リアルなブラス、木管と弦がホールの響きと共に目の前に広がります。オーケストラとホールが一体となって響いている様は感動をよびます。

指揮、演奏のすばらしさ、そして、サントリーホール独特の音場がよく再現されている優れた作品です。これは、塩澤さん、毛利さんの卓越した技術の成せる技と思います。

今回受賞された２作品を始めとして、サラウンド作品の感動は圧倒的です。
これらの作品をぜひ多くの方に聴いて頂き、サラウンドファンが増える事を願いつつ、

講評をおわらせて頂きます。
受賞されました皆様おめでとうございます。

＜部門Ｆ　2ch ステレオ／部門Ｇ　マルチ ch サラウンド：放送メディア＞

音響ジャーナリスト
株式会社マクス 代表取締役
加藤 茂樹

部門Ｆ：2ch ステレオへの応募は 14 作品
（TV 番組６作品・ラジオ番組８作品）
部門Ｇ：マルチ ch サラウンドへの応募は HDTV 番組６作品

いずれも上位入賞の作品にはそれぞれ現代の電波音声メディアの特性を活かした音作りが感じられた。また上位入賞作はもとより、殆どの作品に作り手の主張、対象となる音楽への理解と知識の裏付けがあり機器に関する知見だけでなく十分に表現としての録音、音作りを目指していることが感じられた。

入賞にもれた作品も夫々の考え方、対象の解釈点で十分に主張があり、本賞のねらいどおりの録音技術が発揮されていたと思える。機器の水準システムの複雑さが進む中アシスタントを務めたスタッフの機器と音楽に対する理解度の高さが各作品の完成度となって表れ聞き手側（この場合審査員も含む）にも伝わって来た。スタッフの技術を感じさせるところであり、おおいに賞賛したいところである。

メインを務められたメイン・ミキサーには作品への思い、それを表現する技術に優れたものがあるのは勿論、この作品に向かってすぐれた制作環境を作った、アシスト・チームをまとめるリーダーとしての力量も評価されるべきだと思う。

成功への道は優れた対象との出会い、キーワードは技術に裏付けされた感性か。

部門Ｆ「僕らの音楽」より“島人ぬ宝”

沖縄独特のサウンド。当地の民族楽器を中心に組まれた比較的大きい編成のアンサンブルを自然な空間イメージでつややかな音の集合として表現した。三線（さんしん）唄の集合打楽器群など整理された音場にまとめている。この美しさに沖縄という地域性（自然さとワイルドさ）が感じられたらパーフェクトであろう。

音場の設定、唄、楽器等の音像の鮮明さ、自然な色彩感など全体の技術的表現力が優れている。

部門Ｆ「ハンサム JAZZ LIVE MASTERS」より“愛のテーマ”大野 雄二　Lupintic Five

FM ステレオ放送のプログラムである。横浜のライブハウスにおける収録である。
ライブハウスのジャズ録音にはそれなりの期待がある。ライブハウスの最前列で聴く超近接感、目前で楽器の音の尖鋭さを体験する様な会場特有の空間イメージ、音色の自然さなど。

このライブはそうした期待に見事に応える。巧まざる臨場感、自然な定位感、音量だけでなく遠近感のアンサンブルとソロとの対比、これらが見事なまでの構成で表される。ひとつずつの楽器の存在感、程よい臨場感はライブハウスの枠を越えた極上なジャズ空間を作り出している。2ch ステレオの持つ更なる可能性を感じる。

部門Ｇ　「プレミアムシアター」より“歌劇「死の都　２幕」”HDTV 5.1ch

サラウンド表現が重要な意味を持つオペラのステージの再現である。
コンゴルトの作になるオペラ「死の都」からその一部を聴いた。２人の女性＜１人は妻の亡霊～１人は妻と瓜ふたつの別人＞をめぐる主人公の葛藤を描いた幻想的に表現したオペラ。

新国立劇場のオーケストラ・ピットに納まり切らない大編成オーケストラは、決して録音にとって条件が良いとはいえないが、このオペラの壮大なスケール感を奥行きの深い立体音としてまとめていると同時に、個々のパートのディテールの良さと歌唱の明解な臨場感を十分に表現したところが 5.1ch の効果も含め評価される。

部門Ｇ　「題名のない音楽会」より“キャンディード序曲”

「題名のない音楽会」50 周年を記念して同番組のメインキャスター／識者の佐渡裕氏の指揮で表題曲を演奏しその実況をサラウンドで収録した作品。

オーケストラのすぐれた演奏と表現力が 5.1ch の表現力と一体となってスペクタクルな楽曲、明解にして切れ味の鋭さを持ったサウンドとして提示する。その整然とした迫力には圧倒される。

サラウンドによる空間表現によって、このアンサンブルに更なる深味と臨場感が加わり魅力的なシーンを作り出す。

＜ベストパフォーマー賞＞

（一社）演奏家権利処理合同機構
MPN
理事長　椎名 和夫

濱口さん、おめでとうございます。
審査講評とか、そんな大したことは言えないんですが、感想ということでお話しさせていただければと思います。

プロ録も 21 年ということで、僕が関わらせていただいたのはこの数年間ですが、エンジニアを顕彰する賞ということで、エンジニアのテクニカルな面を審査させていただくというときに、技術的な完成度の目安として、例えば空間的な広がりとか、ダイナミックレンジとか、音響特性とかという具体的な切り口を基準にして採点をしていくわけですけれど、一方で、そこで鳴っている音楽の持つ「人間性」というか、音楽の持つ「人となり」みたいな、グルーヴとか、切れ味とか、温かさとか、そういう抽象的な印象というものも、かなり大きなウェイトを占めざるを得ないなあということを、実はいつも感じてしまいます。そういう意味で、やはりこの賞はあくまでも「音楽」を対象にした賞なんだということをつくづく感じてしまうわけですが、濱口さんのパフォーマンスを最初に聴いた時も、同じようなことを考えました。この作品はハイレゾの 96kHz/24bit という、とても洗練された最新の技術を背景として僕らの手元に届いている訳ですけれど、そういうポジティブな要素をしっかり味方にしつつも、それを遥かに越える「人となり」というか、「人間性」というか、そういうものを持ったパフォーマンスだということを強く感じさせられました。聴いてすぐに、今年のベストパフォーマーは濱口さんで間違いないなあ、と直感したことを覚えております。

僕もギタリストの端くれですが、ギターというとてもシンプルな楽器の可能性は実に大きいのだということも、改めて感じさせていただいた１曲でした。

先程音源は流れたんですけど、今日は生で演奏をしていただけるということで、とても

楽しみにして参りました。これからも益々がんばって、より多くの人達に温かい音楽を届けていただければうれしいなあ、と思います。
　濱口さん、本当におめでとうございました。

＜新人賞＞

（一社）日本音楽スタジオ協会
会長　内沼 映二

　今迄の経過でお気付きになった方もいらっしゃるかと思いますが、部門Ｂ最優秀賞の今関　邦裕さんと、部門Ｃ最優秀賞の村上宣之さんは、新人賞を設定した２年前の最初に受賞したお二人なのです。
　新人賞を設定した経緯は、もっと若いエンジニアに参加して頂き、次なる時代を担うエンジニアになって頂きたいという登竜門としての意味付けでした。
　お二人は、見事２年で最優秀賞をとるまで急成長したと思います。
　この新人賞の意義があったものと考えます。

　まず、安達義規さんの、作品「贈り物」より「贈り物」 熊木 杏里
　これは、ミディアムバラードの J-POP です。
　サウンド作りはオーソドックスで誇張感もなく、しかし、各楽器の主張はちゃんと表現されている。
　特に、ボーカルは、音質の良さに伴って本人の繊細なニュアンスと詩が相まって独特のボーカルサウンドになっています。
　今流行りのコンプレッション・サウンドでなく、伸び伸びしたサウンド作りは好感が持てます。この辺が高得点につながったと思います。

　次の、小坂康太郎さんの作品「LOVE SONGS」より「思い出のレストラン」 馬場 俊英は、軽やかな８ビート J-POP-Rock です。
　サウンド作りは、しっかりしたリズムセクションと艶やかなボーカル、多重録音によるハモ、コーラスがバランスよく纏められている。
　この曲も、コンプレッションを多用しないで演奏のダイナミックスを大事にミックスされています。小坂さんに聞いた話によりますと、ベーシックのリズム録音を録っている時、馬場さんから、特にドラムの音に関して『多くの CD に見られる、潰した音でなくこの雰囲気、ダイナミックスをそのままミックスまでキープして下さい』と言われたとの事ですが、アーティストも圧縮サウンドには飽きていると感じたそうです。

　お二人も次世代を担うエンジニアにますます成長する事を願います。
　本日はおめでとうございました。

「音の日のつどいパーティー」レポート

平成 26 年 12 月 5 日（金）「音の日」記念イベントとして、18:00 より目黒雅叙園 3 F「シリウス」に於いて、当協会および一般社団法人日本オーディオ協会、日本ミキサー協会、一般社団法人日本レコード協会、一般社団法人演奏家権利処理合同機構 MPN の共催により、第 21 回日本プロ音楽録音賞授賞式関係者と当日併行して開催された 一般社団法人日本オーディオ協会主催の「音の匠顕彰式」および本年度より実施された「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」関係者が参加した「音の日のつどいパーティー」が開催された。

当日の模様を以下にレポートさせていただきます。

（一社）日本レコード協会
畑 陽一郎 氏

経済産業省 文化情報関連産業課
課長補佐 望月 孝洋 氏

日本プロ音楽録音賞授賞式の司会に続き、進行役は石井 みゆき氏が務め、最初に一般社団法人日本レコード協会理事・畑 陽一郎氏より来場者に対して開会の辞が述べられ、続いて来賓代表として経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課課長補佐 望月 孝洋氏が挨拶された後、音の日実行委員長の森 芳久氏より、本年度の「音の匠」として顕彰された内容が以下の通り紹介された。

平成 26 年度 第 19 回「音の匠」は、「イルカの生息域に依存する鳴き音の違い」など数々の発見や、「イルカの鳴き音によるコミュニケーション方法の研究」など、多くの論文を発表され、音とイルカの研究の第一人者である東海大学創造科学技術研究機構・特任講師 森阪　匡通氏が「音の匠」として顕彰されました。

「音の匠」受賞者
森阪 匡通 氏

続いて、第 21 回日本プロ音楽録音賞に於いて表彰された各部門の受賞者を代表して、最優秀賞に選定された代表エンジニア 7 名、ベストパフォーマー賞 1 名および新人賞 2 名が紹介された後、エンジニアを代表して、（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ 村上　宣之氏が挨拶を述べられた。

部門 A「2ch パッケージメディア：クラシック」
　　内沼　映二 氏　　（株）ミキサーズラボ
部門 B「2ch パッケージメディア：ジャズ、フュージョン」
　　今関　邦裕 氏　　フリーランス
部門 C「2ch パッケージメディア：ポップス、歌謡曲
　　村上　宣之 氏　　（株）ソニー・ミュジーックコミュニケーションズ
部門 D「2ch ノンパッケージ：ジャンル問わず」
　　長江　和哉 氏　　名古屋芸術大学
部門 E「サラウンド・サウンド」
　　毛利　篤 氏　　日本コロムビア（株）
部門 F「放送メディア：2ch ステレオ」
　　小野　良太 氏　　日本放送協会

部門 G「放送メディア：マルチ ch サラウンド」
　　柳原　健司 氏　　（株）テイクシステムズ
ベストパフォーマー賞
　　濱口　祐自　氏
新人賞
　　安達　義規 氏　　（株）ミキサーズラボ
　　小坂康太郎 氏　　（株）ミキサーズラボ

内沼 会長

村上　宣之氏の挨拶の後、当協会・会長 内沼 映二氏による乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなる。会場内では受賞者を取り囲んでの写真撮影や談笑する場面が見受けられ、今年も様々な音のプロフェッショナルな方々が一同に会する場となりました。

またパーティーの途中で第一回「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」の受賞者が紹介され、最後に中締めの時間となり、一般社団法人日本オーディオ協会・校條 亮治会長より、参加者に対して御礼の挨拶が述べられた。

今回もプロ音楽録音賞の運営委員会および審査委員の皆様をはじめ、多くの関係者のご協力により、第 21 回目を無事に終了することが出来ました。有難うございました。

（一社）日本オーディオ協会
校條 亮治 会長

会　員　動　向

1．会員数（平成 26 年 12 月 1 日現在）

正会員（法人）	25 法人	準会員	２法人
正会員（個人）	19 人		
賛助会員Ⅰ	40 法人	賛助会員Ⅱ	２法人

2．入会

①準会員

○株式会社 丸二商会　平成 26 年５月１日

②個人正会員

○馬場　哲夫（尚美学園大学芸術情報学部情報表現科 教授）平成 26 年７月１日

3．退会

①個人正会員

○鈴木　京（株式会社テクノハウス）　平成 26 年９月 30 日

○山下　有次　平成 26 年９月 30 日

②賛助会員

○株式会社 タイムロード　平成 26 年６月 30 日

4．法人・会員代表者および住所変更、その他

①正会員

○住所変更

ヴァストミュージックエージェンシー株式会社

（新）〒 150-0001　東京都渋谷区神宮前２－ 12 －２ ステージ神宮前Ⅱ５Ｆ

TEL：03-6804-3162　FAX：03-6804-3165

②個人会員

○住所変更

浅見　啓明

（新）〒 194-0044　東京都町田市成瀬六丁目 10 番 15 － 105 号

③賛助会員

○協会担当者変更

ゼンハイザージャパン株式会社

（旧）佐藤　満

（新）堂田　淳

○ FAX 番号変更

株式会社エムアイセブンジャパン

（新）03-6683-7543

○法人名変更

（旧）東京スクールオブミュージック専門学校

（新）東京スクールオブミュージック＆ダンス専門学校

5．その他

○会長変更

一般社団法人 音楽電子事業協会

（旧）岡部　比呂男

（新）長谷川　豊

○会長変更

一般社団法人 日本音楽出版社協会

（旧）谷口　元（7/1 付　専務理事）

（新）桑波田　景信

○専務理事変更

一般社団法人日本アド・コンテンツ制作者連盟

（旧）若尾　一彦

（新）薬師寺　衛

○理事長・専務理事変更

共同組合　日本映画・テレビ録音協会

（旧）紅谷　愃一（理事長）　橋本　泰夫（専務理事）

（新）小野寺　修（理事長）　志満　順一（専務理事）

○会長・事務局長変更

一般社団法人日本映画テレビ技術協会

会長

（旧）島谷　能成

（新）村瀬　治男（キヤノンマーケティングジャパン（株）代表取締役会長）

事務局長

（旧）大前　和美

（新）毛塚　善文（常任理事・事務局長）

○会長変更

一般社団法人 日本作詞家協会

（旧）里村　龍一

（新）喜多條　忠

○副会長変更

一般社団法人 日本オーディオ協会

（新）池田　達史（パイオニアホームエレクトロニクス株式会社）

岡内　理（パナソニック株式会社）

猿谷　徹（株式会社ヤマハミュージックジャパン）

○代表取締役社長、副社長変更

エフエムヨコハマ音楽出版株式会社

代表取締役社長　兒玉　智彦

取締役副社長　　福田　和哉

○事務局長変更

日本デジタル・フィルムラボ協会

（旧）松原　健浩

（新）近藤　桂司（（株）東京現像所 取締役）

○会長、代表理事・専務理事変更
一般社団法人 日本エレクトロニクスショー協会
会長
（旧）佐々木　則夫
（新）山本　正巳（富士通（株）代表取締役社長）
代表理事・専務理事
（旧）半田　力
（新）長尾　尚人
○新任役員
一般社団法人 日本レコード協会
副会長
（新）林　真司（エイベックス・ミュージック・クリエイティヴ（株）代表取締役）
○社名変更
（旧）エイベックス・マーケティング株式会社
（新）エイベックス・ミュージック・クリエイティヴ株式会社

（旧）エイベックス・エンタテインメント株式会社
（新）エイベックス・デジタル株式会社
○移転
特定非営利活動法人
レコーディング・ミュージシャンズ・アソシエイション・オブ・ジャパン
（新）〒164-0012　東京都中野区本町 5-5-6
TEL：03-6382-4224　FAX：03-6382-4227
Mail：office@rmaj.or.jp
○理事長・副理事長変更
日本ミキサー協会
（旧）梅津　達男（理事長）　吉田　　保（副理事長）
（新）吉田　　保（理事長）　森元　浩二（副理事長）
○移転
エイベックス・ミュージック・クリエイティヴ株式会社
〒106-6027　東京都港区六本木 1-6-1 泉ガーデンタワー
TEL：03-5545-9161
エイベックス・デジタル株式会社
〒106-6038　東京都港区六本木 1-6-1 泉ガーデンタワー
TEL：03-5545-9403
エイベックス・ピクチャーズ株式会社
〒106-6027　東京都港区六本木 1-6-1 泉ガーデンタワー
TEL：03-5545-9279

♪　編　集　後　記　♪

フランス哲学者アランは「悲観主義は気分によるものであり、楽観主義は意思によるものである。」と述べています。今年こそは意思を強く！と思うこの頃です。
本年もよろしくお願い申し上げます。

Smith

プロ録も何とか無事に終了し、会報原稿のチェックへと今月も追いかけられています。年男としては元気な１年にしたいものです。

hair ken short

北陸新幹線・北海道新幹線と、どんどん便利になり今年は旅にでかけましょう。

yakiton

明けましておめでとうございます。新たな気持ちで少しずつでも前進して行けたらと思います。本年も宜しくお願い申し上げます。

mm

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 運　営　委　員　会 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

委 員 長　清水　三義（青葉台スタジオ）
委　　員　佐藤　賢一（事務局）
〃　　山本　薫　（　〃）
〃　　伊東　真奈美（　〃）

＊＊＊

【発行人】会　長　　内　沼　映　二　　【発　行】2015年（平成 27 年）1月
【発行所】一般社団法人　日本音楽スタジオ協会
〒169-0072 東京都新宿区大久保２丁目１番 11 号　モナーク大久保3F
TEL. 03－3200－3650　　FAX. 03－3200－3660
http://www.japrs.or.jp　　E-mail:japrs@japrs.or.jp
【編　集】総　務　委　員　会　　【印刷所】株式会社研恒社

JAPRS

Japan Association of Professional Recording Studios
http://www.japrs.or.jp E-mail:japrs@japrs.or.jp